

し。くだくしければ畧。一をもて萬をしるべし。惣躰翁清撰の集には、重き句とはひとつもなしとしるべし。かるみとてちよつと口先にも言事にはあらず。一段深く案じてかるくくと句作る事なり。趣向の重きはいかに句作をかるくすとも、勿論軽くなるべきやうなし。此重みといふは全躰病にて、翁の道にては尤嫌ふ事なり。はやく捨べきものぞ。軽きはいかほどもかるくすべし。害なし。しかれどもかの安みに落べからず。又俗中に引落して言を輕みと覺違へるは、炭俵・俗猿蓑(譯)をかるみの俳諧とするよりの取違なるべし。此二集の輕みそこにてはなし。世話に落したるは其時の流行也。

此二集より深川集迄の俳諧の仕さま、其翁のころを用られたる傳あり。今しばらく口傳とす。

○文章の事、當時文章と俳諧とは別義と思へるにや。俳諧につり合ぬのありたる躰を用ひ、或は漢文を假名書に直したるばかりの躰も有り。又、翁已前の狂俳滑稽も見え、或は戯作・草双帯に落る俗にチャリといふ躰もありてまち／＼なり。翁の言のどく、いにしえ何の文章も取べ

の世の中なり。よく／＼つゝしみ味しるべき事ぞかし。將、猿蓑集の序、晋子が名をかりて實は翁の稿なり。此文の書さま、今の人々何と見給ふやいかに。

○當門に遊學する輩、たゞ議論穿鑿のみに走り、口授口決ばかりを聞たがりて術を練るにうとく、たゞ上へ走りて天狗づらをする輩、當世のはやりもの也。かゝる人は決て誠の上手にはならぬもの也。是を名づけて謂用俳諧といふ。術より入て然して後の傳なり。術にうとくしては口授口決を聞ても胃中に入らずして、發明する事あたはず。たゞ口うつしを辨のうへに走りて心は暗やみ也。辨と術と相對し明らかならんば何の益かあらん。口授も口決も術に達する時は聞ずして至り、さづからずして得るをや。○此道に於ては、いかなる學才ありとも先夫を用ひず、愚を守りて心を蒙昧にかへし、小兒のいろはより習ふがどく師に付て堅ク謹み學び、さまざまの私意をまじへず、正直に師の教を受用し分骨(骨)して學ぶべき也。才にはこり上手めかしたる事をしたがり、或は点取などいふものに交り種々混種(雜)するときは、少々術に叶ても當流の規則備

し。しかれどもこころかたちは翁一家の躰なきにしもあらず。是をうしなふ時は翁家の俳諧にあはず。他流はしらす翁の家におゐては俳諧中皆文章也。書畫一筆などいふがどく俳諧同一躰に書べきわけ也。しかるを俳諧は當家の流行にして、序・跋及び言葉書等は、今國學者流に古學家といへるものゝ用る万葉風などいふべき躰を取合せ書る。誠に後家ものにしてわけて見ぐるほし。さらば俳諧も萬葉躰ならでは取合ぬなり。翁の曰、俳諧の集は俳諧のうちにてすべしと。是一集中皆文も句も俳諧なればなり。曠野集の道具立にさまざまの事持込過たるさへ心になはざりしとなん。惣じて文章も句もつれ立ちて、俳諧中にて流行すべき事なり。扱又俳諧中に和哥の枕言葉又地の詞、其外物語の言葉或は古言等用る夏、當門に於ては其つかふべきしをりなくてはつかはず。何のわけもなき所へつかふときは、平地に浪をおこし、物しり兒にそれがいひたくて遣ふたりと見へて、畢竟は出ものとなり、其詮なきのみか翁の意味に叶はずして、當流の俳諧の仕さまといふべからず。かゝる事も今はやみくも

らず、終に雜俳となりて本場の哲には入がたきもの也。よく師の教を守り切磋琢磨の功をつみ、其教腹中にうつつりて千變自在の手裏に至りては、口にいかなる惡風を吐ともこころの明鏡是をうけざれば、いさゝか害になる事なく、則をやぶりても則に叶ふ。是翁のいふ格に入て格外に遊ぶの時節也。正道を遂んとならば此禁戒(譯)黒正直に守るべし。もし才に慢じて此戒をあなどり思ふ輩は、愚夫にして用ゆべき人才にあらず。

但、初より正道の師をえらぶ事肝要なり。もし永泥にはまりては、うかぶ世さらにあるべからず。且こころ高ぶりがる、凡情の常也。是を克己していつも人よりおとりたると耻る所に目をつけしめたらば、是上達するのきざしなるべし。尤生涯にかけて修行すべきなり。

○蕉風中に俳諧をチャリとこころへたるも近ごろおこれりとの見ゆ。あやまれり。それは翁已前の事也。翁變風の俳諧ならばかつて狂戯にあらず。今おかしみといふは可笑のをかしみにあらず、おもしろしと感美する意也。ちかくいはゞ雅俗の差別ありて、戯場を見ておもしろしとい



はんと、花をながめておもしろしといはんとのかはりめなり。かならずしも戯語狂言の繪双帯ぶりにおちいるとなかれ。

虚を述て實に叶ふ、此間に正風の微妙ありて、こゝにおかしみはあるなり。將、對竹按るに、唐詩に白髮三千丈と前置に虚を述、依憂如個長しと下にてうけたるにて、上の三千丈のうそが忽實となりて、憂るこゝろの甚しき姿があらはれ、こゝに句の神とどまり、是よく正風の虚をつかふに似かよひたるもの歟。

○此都會にて芭蕉の正風随一とおもひ、おもはるゝ宗家の會席に行あひ、傍より其付合をうかどひ聞留たる句とて三句のわたりをしるし來り、善惡を問ふ人あり。その付句、

かつたりかたりぬり下駄をばく  
とつさりと脊中うたれて死ぬばかり  
いつ來なんすといふが御仕着せ

是坐中殊に感じ合たる付なり、よろしきやいかにとなり。予唯脇下より冷汗を流して返答に當惑せり。かゝる正風

いづれの魔國にて行はるゝや、わが翁の正風にては先文臺に近くる事を憚るべし。惡風といふにも程もあるべき。第一は世の風俗をも害すべき魔道なり。是を正風と思ひて感するこゝろいかにぞや。門人には親の寵愛玉にもかへぬ人の子も多かるべし。夫ものゝ師となりて牽教する人物にかゝる事をよしとして、大切の人の子を魔界に引込む惡行のおそろしきかな。師たる兒付して吟聲もしらるゝ口つきかや、かなしむべし歎すべし。其宗匠の名をわすれしが、其問たる人も不幸にして泉下の客とはなれり。尋問ふべき便をうひなひつ。もし其名を耳底にとどめたらんには、天下のためにもこの宗匠の膝もとをせめ叩て、直言の節諫をつくすべきを今更殘多くもせんかたなし。

○このごろ諸國風士の名をあつめ、すまの番付に比論し、梓にかけて此都のちまたに出し賣る也。愚人凡俗のなせるわざなれば取にたらずとはいへど、風説には其こしらへたる輩が師たるものも、おのれゝが名をうるゝがうれしさに、みそかに聞てゆるし置ならんとぞ。しかれば風流門の中にかゝるいたづらものありや、耻べし

○或人問ふ、

梅が香のつと日の出るやま路かな

此句神祇なり。のつとの言葉、下心に祝詞をふくめりと或る宗匠の著述に載せて、やがて梓にもかゝるべきよしなり。實にさる事にはべるやとなり。答ていはく、以の外なり、句情も姿もわきまへぬ蒙説也、論するに足らず。かならずかゝる邪論に惑はざるゝ事なかれと。此人も左こそと伏して去りぬ。嗚呼笑止。假初に宗家の稱をぬすめる輩にもせよ、知たふりをするにも程もあるべきに、これらはあまりなるめつた的なれば、今時の世界誰かまこととするものあらん。初輩といふとも一笑して止べきにぞ。扱註解の次手に、

梅が香ちやうりやうふりやう黒木賣

是嵐雪が畫に翁の讚なり。ある家に秘藏せり。畫は柴垣のどくなるものゝうへに梅の畧畫なり。翁の句悉解せんばあるべからず。諸大家の説を聞ん。予は唯翁の博識を感す。

梅さくやしらゝ落くほ京太郎

此句物語より作し給ふといふ説、まことに蒙説也。左には

〱。剩、元録(總)の祖師笑はゞわらひ給へなど書たる、實に風流門中の重罪人かな。大徳の翁をおのれが拙き腐腸に引當、大穢をつけまるらす也。哥舞妓評判戯作草帯の中に噂ばかりも混じけがされ、何ぞよろこばしく一笑し給はんや。わがみちのかくもおとろへたるかなと、黄泉に足すりして千嗟萬歎し給ふらんと、おそろし勿躰なし。○葛飾の素丸、冬の日解ならびに説業大全とてあり。かゝる類の書、世に林をなすといへども、おのゝ僻説繁よとして却て人を惑はす類少からず。此素子が述は夫にことなり、述るところ實に明らかにして説本の冠たるもの歟。初心のたより大方ならず、好て見るべし。説業の方わけてよし。よきは斷りかな。去來が言葉を丸にて我力のどく引直し書たるものなればなり。中にいさゝかづゝ誤れる条あるは、去來がもらしたる所を素子が了簡にて補へる所と見ゆ。さりながら和漢の書・上古以降註解傳説、悉く誤なき事あたはず。あながちに責べきにもあらじ。素子が功つとめたりといふべし。しかし去來抄など見たらん人には、此書無益の書なるべし。おしひかな。



あらず。しらも落くほも所名、梅の多き所也。京太郎は京より西の近國にていふ雲の名、是を物語の名に借たる也。その所に行あたりて物がたりの名にかりたるを思ひ出し、おかしく思ひて作ありしとは、下の京太郎にてしらる也。疑ふ所なし。しかれば物語のうへにて作し給ふにあらず。物語も此地名に寄り、此句も此地名により、双方別となり。たゞものがたりの名にかりたるを、おかしなつかしと下心に思ひ寄せられしとは見るべし。

右の句、物語より出たりとて、むつかしき僻説をこじつけ言人多し。何も六ツかきし事なし。世に人々のいひゆる解、こじ付の解ゆへ、此句の神は留守になりて居るぞ。物語にかゝはるによりて解兼る也。解するに何も物語にかゝはる事なし。しらも落くほはともにも所名、京の方にむかひ登り勝手の所、しらも落くほと地つゞけり。京太郎は京のかたより出て西の方へ行向ふ白雲の大なるもの、雲の峯の類なり。是を京より西の隣國にて京太郎といふ。丹波山を見こしに見ゆる雲を京にて丹波太郎と云に同じ。太郎といふは第一に大なるものをいふ本邦の通語なり。童子を太郎と云に同じ。太郎といひ、國語第一の大和利根をさして並東太郎といふがごとし。此

句春の央其地の景姿に望み、梅の盛白妙なるに感じて先、梅咲やといひ出し、扱梅花のしろきよりしをり出し、幸にしらも落くほとつゞけ、落くほはし、又落くほより遙に山上の地盤を望めば、眞白なる京太郎雲が見ゆると也。上五文字より下までしろきをしをりつゞけたる句也。一天暖和にして長閑なる春色言外に見へて誠に名達の作也。物語をかける所は、はじめにいふごとく、物語にも此名をかりたるかとおかしく思ひ寄せられたるのみなるべし。さまざまの僻説迷ふべからず。

古池や蛙飛込む水のおと

深川六間堀鯉屋藤右衛門私曰、杉風が子。此家代、藤右衛門をる名とす。此時はもはや杉風は隱居なる也。

野屋敷あれはて、藻屑にうづみたる寓感、放魚池

潤蛙聚の律の句思ひ寄せし。

こは翁文音の留書なり。

此句ことふりにたれば、今更句意を論するにあらず。しかれども當時猶僻説にくるしみ、まどひ疑ひて決せざる輩甚多し。かくては翁の腹に入る事かたかるべし。さるによりて此證據を顯して人の惑を解しむ。他よりはいか

やう共見次第也。當一派の人々に於てはかならず感ふ事なかれ。此證據を的にして落付くべし。素より翁の句、心月あるは此句にかぎるべからず。初にいふ大道の高腹より出ればなり。今世我黨に至りても其心月を詠ずんば、何ぞ芭蕉の家流といふに足らん。

句の次手あれば今こゝに當時の句を揚て、しり安からしむるの意也。

句の活所なく居付て死物と成り、しかも古みに落る躰

花芥子のちらずに鐘の鳴る日哉

土手下り篠笹つゞくほたるかな

右の句をもて活所を得せしめ、居付を除きて新みに出す

花芥子のちらゆるとよやまの鐘 宇橋

土手くだり篠をこほる、螢哉 北尼

一句の作にて死活ある

長袴鞆の着て出る、茅輪かな

誰が鞆ぞ茅輪に餘る、長ばかま 石海  
一字にて只事となり發句と成る

俳諧の字例の  
か字の例の  
せの字の例の  
ふ義をのり  
りふ義をのり

右之大下手

鶯の小兒半分あさ日かな 對竹

鐘のなるさかりを花の散にけり 對竹

作者  
しらす

道ばたの晝兒さくや、雲の峯

みちばたのひるがは咲きぬ雲の峯 士朗

一字にて死物となると活ると

荒るより折るよにはやし女郎花 護物

あるより折るよに安しおみなへし

一句の主になるとならぬと

花あらばしのばしからじしのぶぐさ 素榮

花もたばしのばしからじしのぶ草

朝ゆふの寒さつれなくなくうづら 篤老

あさゆふのさぶさかはゆく鳴うづら

三日月もゆるる、葛の山邊哉 心非

三日月もぐらつく葛のやまべかな

言葉に俳諧なく、心にはいかいある

はつてふやさらでもいそぐ草まくら 對竹

きさらぎは扇をひらくはじめ哉 道彦



下手と上手の取まはし

みのむしも出て聞たいかほととぎす

茅丸

湯あみせぬ身にこほれけり梅の露

年彦

をれやうのいかめしけなる紫苑かな

雪雄

いかめしく風折したるしをにかな

有美

はなに倦ば蝶にもなけといひたいぞ

道彦

宗鑑は酒きらひし歎ふきの臺

正風に似て正風にあらざる仕立

畫兒の命の親歎馬の息

正風になる仕立

畫兒のいのちや草に馬の息得布

正風にあらざる趣向

頼朝のかうべに似たる牡丹かな

春來

百姓の目にも見せん蔦もみぢ

可磨

海老の手も泥かくまでに水涸し

竹馬

紅梅に思はぬさまや飼葉切

守静

鶴見せに子も負ゆく歎浦の春

松雄

浦波の音引更る火桶かな

南竟

分別の日歎鶯の目のうるみ

夫州

かゝる日は鳥も糞する紅葉哉

竹管

拍子なやきぬたに寒き母の年

壽翁

うき葉にも朔日いふ歎船世帯

諫圃

ものに倦て夜寒を覗く眼鑑かな

一茶

しら露の丸く見へてもいそがしや

太筈

花のおもてこちら向けり松の間

星譜

薺やとかく隣は神たゝき

鹿太

うきときは見ぬ事にせし櫻かな

まさ岐

生れよりの新しみ  
 ことくとなるやしぐれの馬の腹 竹有  
 河千鳥なくや博奕にゆくなとて 調  
 作のあたらしみ、たけ高き躰  
 此ごろは疊ざはりも落葉哉 成美  
 おなじく利口なる躰  
 寐よとのまうけ歎蝶にふとん干す 芦圓  
 道具立の作、精神なき句  
 小男鹿の生田を越てはるの月 ある人  
 生類 名所 春月  
 是切繼の細工物也、句にあらず。

あかつきの花はおぼる歎風寒し 曉河  
 ひとつづゝ日の落かゝるつばきかな 幸雄  
 さびしみの足らでやどつと小鳥たつ 夯貨  
 あさがほにこりて植ねばなつかしき 丘高  
 たび人に啼よる雪の千鳥哉 久賦  
 水際の暮兼て居る田にしかかな 菊塙  
 秋の夜や風よりはやき松のこゑ 梅間  
 鯨の骨きのふの骨もかさねけり 嵐外  
 誰も来ぬ鞍馬のさくら雨越る 廣陵  
 卵のはなはどれ歎近江の何祭 袁丁  
 吹あれしのちや雉子なく天の川 雨籬  
 草がみななくやうすなり舞雲雀 薫岱  
 しら魚は水の中なる水ならめ 梅我  
 釋迦の身に枯つめて来る嵯峨野哉 春翠  
 わがおもふとや空ふくはなすゝき 椿堂  
 藁一把ありとて我にとしのくれ 東野  
 ぬか味噌に冬といふ夜がたまりけり 大年  
 凧に喰うものくらし艸の菴 草丸  
 千鳥なくや産家の伽の入かはる 確令  
 名月やすげなく通る萩のこゑ 素樸

海老の手も泥かくまでに水涸し 可磨  
 紅梅に思はぬさまや飼葉切 竹馬  
 鶴見せに子も負ゆく歎浦の春 守静  
 浦波の音引更る火桶かな 松雄  
 分別の日歎鶯の目のうるみ 南竟  
 かゝる日は鳥も糞する紅葉哉 夫州  
 拍子なやきぬたに寒き母の年 竹管  
 うき葉にも朔日いふ歎船世帯 壽翁  
 ものに倦て夜寒を覗く眼鑑かな 諫圃  
 しら露の丸く見へてもいそがしや 一茶  
 花のおもてこちら向けり松の間 太筈  
 薺やとかく隣は神たゝき 星譜  
 うきときは見ぬ事にせし櫻かな 鹿太  
 はつてふやかれ萩からで置しかば まさ岐  
 もる雨もかはゆき宿ぞ花まつ夜 木老  
 捨ふては榎火呼つぐ木葉哉 百貢  
 其こゑが夜のほりぞきりくす 三津人  
 けふも出て雨に追はるゝすゝき哉 梅價  
 灯ともせば遠し入江のわいつばた 杜蓼  
 はつはなと息才な兒あはせけり 蓼松



橋錢のしぐるゝばかり人も居ず  
 鯛の目のすゞしかりけり冬の月  
 はつ月やとかくさげぬ宿ゑらみ  
 こゝろゆくや木の葉しく夜のうつしもの  
 門あれば垣根もありつけさの雪  
 寒しとは世にある人の言葉かな  
 おく底もかくさぬ芥子のひと重哉  
 どの家もけぶらぬはなしかたつぶり  
 ふぐと汁くらべあふたるかいなかな  
 飯の泡ひくころ菴はしぐれけり  
 七夕も過けり門のあすならふ  
 朝がほのけふは雨をとたのみけり  
 蕎麥喰のしなのゝ客もうめのはな  
 ものかけば墨瀧うなる若葉哉  
 門松に今年の雪のふりにけり  
 啼空にすがるこゝろよほとゝぎす  
 燈籠の邪魔になるまでふけにけり  
 はるの雪昏燭かくせば見ゆるなり  
 影までは見足らぬ雁や二三日  
 松風を肩にかけてやなく蛙

浦人 了國 至長 杜年 重行 幽嘯 衣重 亮几 蒼虬 史千 旬光 芦菴 金堤 鬼洞 奇淵 雨塘 簾左 二蝶 才馬

出るものに見るものにして秋の月  
 庭草に聲ありとはしらざりし  
 いせの春先宮川の無錢より  
 飯蛸は光源氏のなんぞかな  
 水雞きくはし居や紫蘇のうかし汁  
 嚴重にかれ野を月の守りけり  
 中へに身は捨られぬ紅葉哉  
 冬思ふほどはあそべずはるの月  
 いざよいといふひまもなき月夜かな  
 はつ雪を直にして買ふぞ柴一把  
 春の月あそび過ぎてやみにけり  
 若菜からわか菜の年を見る日哉  
 やり梅の四五間中でなくすゞめ  
 夕ぐれや掃殘されしみそさゞめ  
 遠ばれのするや世の八九月  
 水鳥のほりしと思ふ入江哉  
 あさがほの蔓となりけり草の蔓  
 魂棚の灯は白露のたぐひかな  
 瀧の上ミ赤松ばかりのどかなり  
 かゝる日をそしるに近しへちま沙汰

雨考 卓池 一蕙 漫々 秋舉 梧井 雲舍 たり彦 潭月 百非 百二 百慈 松保 桐栖 宜彦 采彩 鳥頭 寶水 其文 玉珂

着て出れば入の裕のまさりけり  
 日を別にくらしもしたり小春やま  
 等閑に見るを桃にも月のさす  
 川島や尻目にかける夏の月  
 水の香にこゝろとゞけば鮒を呼ぶ  
 眞こゝろの月見て歎戸をはやくさす  
 のらの跡奇麗に暮て鷹わたる  
 大根のからみにそむや秋のくれ  
 瓜むくや蠅なき宿を取當り  
 篠の葉にゆくや名越の跡の風  
 うぐひすよ聲をこぼさば余吾のうみ  
 何をしに来るぞあやめに夜の雲  
 さくら木が連理になれば閑古鳥  
 かし捨の笠かへせと歎蓮匂ふ  
 それと見て見へずなりゆく鵜舟かな  
 しら魚にひかれて春も曉にあふ  
 三ヶ月をくゞりつけゞり鹿の角  
 四五輪の梅が香人歎鉢たゞき  
 蚊のこゑや露のうら葉は日もさゞず  
 思ひ切て坂東太郎しぐれきや

篤老 五國 物二 都英 井彦 完來 武日 里丸 柿麿 瑚璉 一峨 杉長 風至 素其 葛三 光躬 南爪 澧水 一甘 馬六

鎌とぎに出る口はあり雪の家  
 雞達もこゝろがゞり歎峯の雲  
 須磨明石見に来た春を月の出る  
 仲のよい道の柳もかれにけり  
 落し水どこまで行て酒になる  
 ほとゝぎすなくやもかりの淺黄幕  
 枯芦のかれ残しけり小田の雀  
 かゞしまで起してまつや初しぐれ  
 さかやきの跡からすべる落葉哉  
 あかつきはわれが蛙でないのみぞ  
 寝るてふをつまみそこねて興に入  
 乳くさく成たる晝の火燧哉  
 かほばせに秋たつ人よ戀もせめ  
 鉢たゞき月は下地の待かゞり  
 山水に蛤活るさくらかな  
 小としをさし出す空や歸鷹  
 雀子やうられゆく子の袂より  
 雉子啼や身に山彦のあるやうに  
 春の夜や檜の香にも人の寄る  
 こもらばや四方は花の壁にして

東蒼 百一 秋人 菅大夫 普賢 逸慶 月蝶 宙太 國むら 至徳 也好 呂律 米砂 可來 万和 千屋 与人 路丈 二鶴 米彦



閑古鳥さびしき聲もなかりけり 鞍風  
うぐひすは居ぬよ目白を置ざりに 白麩  
見らるゝや松露かく子のぼんのくぼ 布席  
蹈脱で寝た夜明れば木芽哉 羅風  
こがらしやくにくまれものゝ高足駄 蟹守  
夜やおかし花の小桶に手のさはる 東陽  
いで花のかたらば聞かんちりごゝろ 壺牛  
寒き日や浪より白き筑波山 月鴻  
たゞ居てもおもしろき日や蝶の飛 李長  
むら千鳥落れば敷もなかりけり 龍門司  
網の目にひたふる雨や襟明り 五波  
ものわすれしてやすどしき家の口 蕉雨  
いなづまやあとかたなきが秋のもの 井眉  
ひとたびは分別もなし雪の鯨 似藻  
かれ尾花枯けり月にけぶるほど 楊州  
乙鳥の来るや朝く茶釜拭く 方呂  
夕げしき鶴の足水にはじまりぬ 乙二  
出た所はなくて出てあり雪の月 扇暑  
花になく鳥に又あり朝雲雀 玉匣  
鳥の巢や嵐の跡もつくるはず 一巢

人の事はぬよ春戸の花すゝき 松隣  
猫の手も一癖あるに落の臺 雀老  
菜のはなや夜の思ひのうすしとみ 樗雲  
姥捨は苗代見てもたゞならず 竹里  
ほるにがき匂ひもすなり春の野ら 燕市  
うぐひすの糞にも残るあつさかな 武陵  
蚤に寝ぬ朝の趣向は青すだれ 自由  
あまがほや蚊の一群にわれひとり その女  
夕兒や箒にかゝる湖の水 眞彦  
ゆく水の先からくらき鳴子哉 素迪  
棹にあたる蟹大きうおもひけり 風篁  
水もある水田の中の小草かな 玄蛙  
なげ水鶏月のある夜は多事ないぞ 南井  
せきぞろの来るや壘のやきこがし 木海  
しら露の夜に入門や馬ひとつ 可盈  
なでしこやけさはわするゝ蚤の跡 斑車  
遠里のあるふりだとぶつばめかな 六轡  
しらぎくにさへゆくさまの在所哉 長齊  
六日にはどこへ出るやら天の川 若人  
秋の風あきは千鳥もふきこず歎 草史

浦山も捨ずよ月の有あける 慮一  
窓の竹さはつても夏の夜は明る 千影  
古郷のはや手にとゞく清水哉 葵亭  
おし鳥のものいはぬこそ奇麗なれ 木甫  
きのふ見しまゝにもあらず枯尾花 岳輅  
牡丹切てやるおもひなり年のくれ 月底  
夕兒の一むら見へて船の飯 岱雲  
よしきりの口もほどげん花の空 車兩  
はせありく人には鳴かね小田の鴨 湖中  
見すごして月のいるさを恨まじ 蘿月  
夢國のニヶ國ならぶ雲雀かな 對竹

翁曰、品高からんとすれば言葉足らず、こまやかなれば其さまいやし。艶なきはたはれやすく、強きはなつかしからず。

○近ごろ俳門の徒にもあらず、もとより蕉門正風の妙所などわきまふべくもあらぬ輩、みだりに俳論をかきちらし、いかめしく梓にもものし、名利をむさほるありと見ゆ。こはけしからぬ事なり。俗書なればいふに足らずといへども初輩のまどひを起す事にて、わづらはしきのはじめ

なり。初學の輩其心得て、蕉門中に聞もなれぬ輩の著述とあらば、まつ師に監定<sup>(監)</sup>をうけてのち信用し給ひて可也。

○續猿蓑集を贋作といふ事、是あながちに贋書といふにはあらず。翁、編夾にして難波へ下り、寂し給ふゆゑに首尾をも遂給はず。草稿伊賀の無名菴にありしを支考行て編續たり。尤己れが名のもれたるを悔て、哥仙のうち他の名をおのれが名にもりかへ、或は名月二句の評ならびに今宵の賦などこしらへ入たり。良夜には支考は伊勢にありて、廿日の日伊賀へは來れり。翁死後の編續なれば良夜にも居合たるやうにして、己が勝手にしたる也。

さればこそ猿蓑にもれたる、霜の松露哉 といふ句の卷は續猿蓑の集名に於る發句故、第一番に編置給ひしを猥に操下<sup>(總)</sup>ゲなどしたる故、此句何の譯やらしれぬ句と成たり。さりながら俳諧は翁の俳諧に相違なく、ことごとく斧正ありて、自筆の中清書ならびに斧正の草稿ともに秘存せり。俳諧をも味ひ見よ。支考が手に及ぶ力にあらず、付肌もかれが筋ならず。將、門人達の句は翁死後の



編繼なれば、滅後の句も何ごころなく入足したりと見ゆ。こゝに支考ひとつ不届のはかりご有り。此集おのれが名を顯し、翁のこゝろざしを追なしたりとせば論なかるべきを、翁の手にてさせねばおのれが威光なきにより、唯翁の草稿の儘をうつしたる躰にて本書は己もらひとり、うつしを翁の姉聲山岸半殘にあたへ置、時を経て井筒屋庄兵衛へ含めて、何ぞ翁の遺書はなきやと伊賀を捜させ、くだんの草稿にさがし當らせ、庄兵衛が奥書を加エさせて梓にのほさせ、おのれは飛退てしらぬ兒にて居たりとぞ。しかれども其事誰かれしりたる人も在ながら、去來などは篤實にて口を閉、其外の輩もひそく言のみなりしが、越人ひとり大にからかふたりと聞ゆ。是越人・支考不和の一ツなり。(不猫地)不名者にもいさゝか其はしを述たり。但、越人・支考不和の起りは奥にしるす。

○二十五ヶ條を貞享式といふと、いつの世よりの誤にや。是は翁、去來が所望によりて長崎町七へしるしあたへ給ひしものを本として、或は己翁に聞、或は同門に語給ひし事をも見聞して書あつめ、それにおのれが了簡をも

考を誦るともがら正に多し。考るに翁滅後は諸國一統支考が勢ひにしかれ、一旦皆夫にうつりたるの見ゆ。翁の教は大半かくれて行れず。近ごろになり俳諧はいにしえにかへりながら、流布したる支考則の洗濯人がなしと見ゆ。古集を目當にいさゝかしんやくして用るのみ。故に中には、やゝもすれば他門さばきがある也。あやうしや。尾張の士朗はさすがによく洗ひて、獨りめして居たり。

翁曰、式は古式に倣へど、こは高腹ゆえ強て式などにかゝづらはざる謂なるべし。されど則は然(通)一家の則備である也。志ふかき門人ならではかたり給はざりしとぞ。然して式も古式は大かた捨用ひ給はず。されば翁家の別則式といはん。文臺かゝり執筆および一坐の式などは、翁の定に近ごろ二條家の御手入ありて、尙閑易を旨としいさゝか改給ふ式あり。是を本とすべきもの也。將、七部集俳諧のうち古法を破り翁一家の法を立る口決ある卷一二あり。廣くしる人ありやいかに。

○支考、翁よりはいかひの血脉をさづかりたりとみづからいひふらしたる。素より血脉とは傳統の景圖(系)の事にこ

加えて小冊とし、翁の奥書を贋して正風裁錦と名題し、うり歩行たるもの也。後に己が一派を立るに至て名題も替たりとぞ。又別に翁の旨とおのれが了簡と混じてこしらへたる新式あり。板にはせず、翁の遺書とて寫させて金銀をむさほりし也。定て今も彼一派には持傳るならん。是を名付て貞享式とは申なり。

○奥書を加えてはせを在判と有ものは、悉支考等が贋作也。其中に翁の旨もあれど多くは捨給ひし翁已前の事も取用ひ、それに己が了簡を加て惣別翁の謂と偽り作り立たるもの也。心得なくては見分にくかるべし。たゞ翁の筆を取給ひしものは、露沾公エ傳へられし手爾葉の書ならびに其角へ帯一枚ばかりに書てあたへられしもの有。是に奥書らしき事をいさゝか添て、はせをとしるし朱印也。是いつ方へぞ傳りてあるべし。支考大方此奥書のさまをぬすみ、少づづ文を増して諸書に贋附せしもの歟。手爾葉の書は露沾公の家に秘し給ふらんと思はる。翁はかゝる俗がましき事にかゝはり給ふ腸なしとしるべし。

○當時の俳則、悉支考が涎をなめながら翁の則と思ひ、支考を誦るともがら種なき事にもあらず。其根元は越人に翁の語り給ひしヶ條のうち、各別なる事をわかつて書留置たるもの有り。夫を支考ぬすみ取たるが越人と不和の初なり。是を種としてかの血脉をもこしらへしとぞ。翁滅後續猿蓑の爭論より意恨に意恨をかさねしが、支考とかくに越人を邪魔に思ひ、越人こそ翁の勘氣を請たるなどふれ廻り、同門の中を隔させた。その事もいさゝか不名者に匂ひを出せりと覺ゆ。野水・荷兮も勘氣を請たりと言なしたる。これは越人が連衆なればなり。越人は肥熊の藩士、中比いさゝか変ありて浪人せし時名古屋にあり。後に歸參して舊録(藏)につく。熊本にて終れり。佐分利氏にして其家餘郷に存す。墳墓は能府流長院といふ禪林にあり。是歴代の檀寺なれば也。

○門生問、或人のいはく、今四方垣のあるじの俳諧哥と号るもの、貴文の學ぶ所の俳諧を三十一文字に延作るのみにて全く同じ道なりと。某左もありぬべく存ゆ、いかに。と也。答ふ、違へり。蕉翁已前俳諧と稱るものは、古の俳諧哥にもとづき、おどけたるやうに言ふとなり。俳



諧哥の事は、古今集につらゆきの書る通りなるべし。今眞顔のとれる所則其古ぶりならん。わが翁の道は左にあらず。初て虚中に實あるの正風を發明して不易流行の活法をたて、其意は高く大道より來りて、別に一家の新風をおこされたる也。此故に俳諧に古人なしとも、又、名は古のはいかいにしして、こゝろはいにしへの俳諧にあらずなとの謂あり。所詮名は借ものにして何にてもよしと也。さるによりて蕉門の道に於ては、實は俳諧といふものにあらず、一家新風の短哥也。強て名を改なば鄙短哥ともいはんかと翁も申されき。俳諧と稱しながら其字義にかゝはらざるいはれ、かくのどし。今は大道の花ともいふべきもの也。四方垣のとれる所と混すべからず。

或人、鶯笠菴に遊ぶ日、此書を反古溜の中よりぬすみ來れりとして袂より出しつ。ひそかにうかゞふに實に雨後の月夜に逢たるが如く、心快然として讀て眠らず。忽そこばくの益を得のみかは、未聞の珍説もまた少からず。よつて予あながちに乞得て深く匱中に納ながら、つらく思ふに、かくまでいさほしなりて反古になし申されしと、いかさまにもこゝろありけには覺はべれど、かばかりの物一己の料に祕め果さんは空おそろしき業なれば、しのびやかにばかりて櫻木にもものし、あまねくおし廣めんとするを書肆何がしいそぎ奪て、ふところにしかへるも亦おかしくや。もし居士の見そなはしていきどほりあらんには、予あやまり謝して地に伏すべからんのみ。

北 總 芙蓉樓廣陵識

おもふといはざるははらふくるゝわざなりと、さる法師のいひけむをむべもとこゝろにとゞむれば、又くちびる

に秋風のさぶくて、さうもゑはたさずなりける。さはあれ凡なるはらのへちにをさむべきりやうなければ、いかにもこゝろうきまゝに、いとまあるあさなゆふなふでにまかせしよしなしとの、ひとゝちばかりもありけるを、やがてかいやり置ける。こはたかき世のかしこきひじりのしわざに似つかむとはあらで、ひきく狙米のみのよみがとしつきのたのしびに、屋づくりの圖繪しくらしたるたぐひにして、あさましく人に見すべきにもあらざりしを、いつの間にかは花のしらなみひきながして、しもつふさのながしが手にとゞまりつとはほのきこえながら、それさへうちすて置けるが、おもはざりき、櫻木に匂ひて世ひろうふきしきはべらなむとは。ぢちに見きくにつけて、むねにこゝろにおどろくしかりつれど、いまはいかにすともせむかたなくぞなりにたりける。日過てつらくおもひめぐらすに、かくありてのよちの思ひには、成美うせてこれによしなく、完來さりてかれにとゞかぬいとこのりおほしなどいふに、うつりすましてはじめのせちなる眞ごゝろには、いつはとなくうとくな

りにたるは、かの三百扁と歎いふめるなかに、のちの婚いろこくなりて、はじめの寵さめはべるを諷したりしおもかけにかよひて、たれをかわれを諷すらむなどおもひあはするにつけても、ほいなくもそらさぶうのみおほへはべれば、おのれにおのれをいませつゝ、やとちからいれてめんもくをひしかめ、まるまどのほのくらきに、おほつかなきこゝろの月をすましかへさんきはのさんけものがたりを、ふみはしのしろきところにあはてゝかきそふるなめり。

文化の丁うしにやどるとしのなつのなか

こゝろする日、老うぐひすのかさのかげに

居士みづからす



隨ずい  
齋さい  
諧かい  
話わ

乾坤  
成美著



文政二己卯仲秋刻成



成美先生著

米諫圃校  
豊久藏

隨齋諧話

東都

慶元堂梓

とにかくにおほく年つみぬれば、なみくものものはひ  
としからぬ氣はひ見ゆめり。かつら苔などのおひまつは  
れるいは木のたぐひさへだにしかなるに、人のうへにお  
いては、なか／＼かくすにあらはるゝ徳もおこなひもな  
くてやは。かゝる諧話のゆゑ、しきをみるにても、さは  
おもひしらす也。まして隨齋のおきな、いにしへをこの  
みてつねにふみよむに、くらきをかうがへ、まどへるを

たづねて、我見るところよし有とおもふものは得てをし  
ます、人にもうつしらせんとこのころばせ、世に信を  
薦うするのわざといはざらめや。その書あつめおけるく  
さん／＼の中より、まつすこしをぬきだして一帖となし  
ぬるは、叟がつれ／＼をまざるゝの手すさびとなむ。を  
とつ日のゆふがたなりし、諫圃ぬしふといり來て、此帖  
の首に題せむとをまうさる。叟が言もそへばすみやかに  
とおもひしが、きのふはをかし、一甌の餅おくる鄰のた  
めに、ひねもすいとまをつひやせり。老のころはれい  
のものいそぎにて、まつことのさぞもどかしからむと、  
今朝はよこ雲にさす日のにほひさらぬうちに、とく硯に  
よりつ。あら／＼しくも辭つくりて、すぐさまもたせお  
くる。墨もまだしめりふくめるまよなるべし。

ひのえねのあき

寥松





隨齋諧話 乾

夏成美輯錄

紅梅やかの銀公がからころも 貞徳

是千句巻頭の句にて、世に紅梅千句と唱ふ。かの銀公といへば、衆人みな知りたる故事のやうにきこゆれども、銀公誰人なるやしる人なし。今按るに、古今榮雅抄に、色よりも香こそあはれとおもほゆれたが袖ふれし宿の梅ども、といふ歌の注に、漢仙記に云々、銀袖句に移り木花古情留マルと云、漢武帝の后銀公の袖の香、梅のはなにつりて句ひをとどめたりといへり。おもほゆれの詞、今は詠すべからずとなりとあり。銀公は此をいへる事疑なし。但漢仙記といふ書、いまだ見ず。全文を見ねばくばしくは知りたけれど、飛鳥井殿のかくしるしおかれし事なれば、浮たる説にはあるべからず。

冬之日 狂句木がらしの身は竹齋に似たるかな 芭蕉

ある人の説に、狂句とおかれしは翁の謙辭なり。後に門

弟子の、狂句の二字をとり捨て、集などに出せしは面白き事なりといへり。案るに此説しかりとしがたし。まづ句を作るに、人に對するにもあらで謙遜の詞をおくべき謂なし。是はその比の格調にして、此外にも、御廟年を経て、牡丹薬ふかく、芭蕉野分して、芋あらふ女、あら何ともな、猿をきく人、晦日月なし、風髭を吹て、のたぐひあまたあり。此句も狂句の二字ありて尤風味あり。門人などの、師の句を後後みだりにあらため削らん事、甚いはれなし。文字あまりたりとて、たま／＼此句のみに付て臆説をなすは心得がたし。外にも是等の体裁あるをしらぬ故にや。但竹齋は尾張の名護屋にありて、後に江戸神田に住す。醫を業とし狂歌をよくす。世に誰人の作にや、竹齋ものがたりといふ草紙あり。

俳諧の句に点あはする事、むかしは百韻の中二三十句に過す。中にも逸興ある句には長点をかくるもの二三句なり。貞徳・季吟・芭蕉のころ迄大やう如是なりし。浪花の宗因・西雀の門派より次第に点の句も多くなりしなり。

京の高政、俳諧惣本寺と名のりて世に行なはれし頃、京の隨流が破邪顯正といふ書を板行して宗因・高政等を批評し、貞徳の流派の一變したるを歎たり。その書の中にいへるは、諸國へ廻文をまはし同類をすゝめ、わけもなき俳諧に百句の中七八十点、長二三十もかけて初心を譽そやし、鳴わたれりと語る。この咄をきくに、けうとく胸おどろき空おそろしく、口を閉て聞居たりと書り。此書延寶七年の刊行也。百句の中長二三十句におよぶを、氣うとく胸おどろきしとは古風に殊勝なるとならずや。かく点の句、多くなりしかども、今の世のどく点に數をさだめてあらそひしにはあらず。其後其角が世上に点のおほくなりしを憤り、世俗を撓おどろかさんと半面美人等の印を刻み、是を句の傍に施して、かれは幾点これは何点と點數をかぞへしも、すべて世を玩てなしはじめし事なるに、その頃の俳士其角が擧にならひておの／＼点印をつくり、巻毎におしける也。今世上の俳士、是を俳諧第一の事のやうにおほえ、都鄙にわたりて勝負のみあらそふ事になりしは、其角が俑をつくりし也。

近來風体抄に曰、点に長点とて二ツ引事いかなる事ぞと試しに、まづ基俊の悦目鈔に、点の長サあまりおびたしく長く引事、口傳なきがいたす處也。長点一寸三分に過べかず。平点は七八分乃至一寸なるべしと書たり。また備州に宗祇の点の卷あり。点の長短ばかりあり、二ツ引し点はなかりしなり。またいつのころか烏丸資慶郷へある人歌の点を乞しに、点の長短のみ有て奥書に、歌の勝劣は点の長短を以て定むべしとあそばしたるなり。かれはおもふに、長とはながき也、一分二分のあらそひもたび／＼定めがたき事なれば、二ツ引て長のしるしとするなるべし。されば点、むさと長く引ちらし、色／＼形をしてひくと、かゝる故實をわかまへぬなり。点者のしるべき理にこそ云。

寶曆 ころ黒露といひし老俳士あり。ある時甲斐山中を行とありしに、二月なかば草麥の青み立たる山畑に、獸の皮を焼て四五寸づゝに切て申につらぬき、哇ごとにくつも立たり。畑うつ男に此ものゝ名をとふに、是はやい



かどしと申て、猪の皮を焼て、麥あらず猪にその匂ひを嗅せ追おどろかすものなりと答し。さればかどしといふ語は、もと臭き香を獸の類にかどしむるよりいふと見えたり。御傘にかどしと濁点を加へれば、清てはよむまじき事なりといひし。案るに、續犬筑波集に可政が句、國の名のかどしを立む梅田哉 といふ句も加賀のくにいひよせれば、古くは濁音にいひし事疑なし。古昔にいふ香火屋もその趣にて匂ひを獸に令し嗅なり。鳥驚の人形をかどしといひ、また案山子の字を用ひし事は、友人芝山曰、案山子の文字は傳灯録・普灯録・歷代高僧錄等并、面前案山子の語あり。注曰、民俗刈草作人形令置山田之上防禽獸、名曰案山子。又會元五祖師戒禪師章、主山高、案山低。又、主山高峻。案山翠青。などあり。按るに、主山は高く山の主たる心、案山は低く上平かに机のどき意ならん。低き山の間には必田畑をひらきて耕作す。鳥オドシも案山のほとりに立おく人形故、山僧など戯に案山子と名づけしを通稱するものならんといへり。さもあるべき事なり。徂徠録に、主山・案山・輔山と云とあり。

んと、伊勢氏の考なり。

近江路のうらの詞をきよめて

此句はあふみの浦人のと葉をきくと云事におほえて過しに、此ごろ李由が湖水の賦を見て、ふと心づきし事あり。其文に、國中土に灰汗なく水に泥なし。音聲に清濁をわかちてうらのことばをつかふ云。かくあればうらのことばは一種のつかひやうあるをほめたる趣にきこゆ。たとへば入間言葉などやうの事にやと、近江の人にかれこれ問しに明らかならず。後の人なほ考べし。

佐保姫・龍田姫は、春・秋の色を染出す造化の神の名なりといへり。おもふにこれは奈良の朝庭のころの諺なるべし。その故は佐保山は帝都より東にあたり、龍田やまは西にあたる故、春・秋の方位を取てしかいふと見ゆ。また萬葉集第九に、吾去者七日不過龍田彦勤此花乎風爾莫落。此歌春に龍田彦をよめりといふ先達の遠論あり。されど萬葉の歌は風の事を專によみたる故、龍田彦とは云る也。龍田は風神なればなり。神祇令曰、風神祭義

多くの山の中に、北にあたりて一番に高く見事なる山あるを主山と定めて、主山の南にあたりてはなれ山ありて、上手につくえの形のどくなるを案山とし、左右につどきて主山をたすけたる形あるやまを輔山といふとあり。

昆山集

梅漬はうぐひす飲のさかり哉 貞徳

此うぐひす飲といふ事、酒宴の席にある事なり。その比の俗にて、いまの世はしる者なし。酒のみやうにさまざまの名目ありしとなり。宗任記に云、十度飲とは、たとへば十人まどろして盃を十人中に置いて、まづ一人盃と銚子を取て始めさせ申し、さて次の人にさして其人に銚子を可渡。さて又次の人飲て前のどくすべし。まはり酌なり。鶯飲とは、兩人出て十盃とく飲ゆを勝と申ゆ。盃は定り不申ゆとあり。その外も名目いろいろ見えたり。是を鶯飲と名づけし意は、古今集物の名の歌に、心から花の雫にそほちつうくひすとのみ鳥のなくらん、といふ心をひきあはせて、酒を十盃ひきつめて飲はうき事にて盃のひるまもなき故に、かく名づけしものなら

解謂、亦廣瀬竜田二祭也とありて、佐保姫・たつたひめの春・秋にやまの名をよせしとは別事なり。

おはらさしは五月廿八日なり。丹波國桑田郡大原の社へ諸人參詣するをおはらさしといふ。さすとはその處を心ざしてゆく義なり。襦袢抄云、さすとは早く歩む義、指の字を書なり。上林賦、率呼直指と云。これははやく行心なり。呂尙注、指は行也と釋せり。道をさすとは此心なるべしとあり。言塵集に舜蓮、鶉はふ門は木の葉にうづもれて人もさしこぬ大原の里。又三月廿三日を春さし、九月廿三日を秋さしとして一年に三度詣る由をいへり。蚕する人の殊に信ずる社にて、社地の小石を猫と名づけて携歸るとぞ。是は蚕に鼠のつかぬまじなひ也といへり。

芭蕉菴六物といふは、文藻堂二見、大瓢米入号、小瓢帶は、檜笠、菊、繪茶、羽折なり。おのゝ素堂老人の銘ありて家の集に見ゆ。その中小瓢と大瓢の文章とは故ありて予家に藏す。小瓢は芭蕉後松木紋水といふものにつたへ、







彦根の許六は世に自負放言の人とおもへるに、常に濶厚謙遜の人にてありしとぞ。ある時一士人來りて俳諧の指南を乞ふ。許六辭してうけがはず。士人懇にいひてやまず。許六のいふやう、われ人におしゆべきほどの事しらず、ゆるし給れといふに、かの士すこし不興し、某此道執心なればこそかくまでには申せ、御教示を得ても、ものゝやくにたつまじきものなりと御見かぎりありて、さはの玉ふなるべしと、すこしあらゝかにいふ時、許六大に迷惑せる体にて、さらにさやうの事ならず、われ俳諧に何の心得たる事なければいなみ申なり。足下はまた何によりてかくは仰らるゝぞといふに、かの士いよく憤りて、それは某をあざむき給ふなり。既に御著作ののあまた熟覽するに、芭蕉門において血脉相承せる人世更になし。君ひとり實に傳灯の俳諧なりといふ事をあらはし給ふ。さる故にかくは望み申すなりといふに、許六打わらひて、まことにさにて侍るや、あの著述のものはみなく一時のたはぶれごにてゆぞや。あのたぐひの書るものをもて實とし給ふは痛入たる事なり。もとより

跡なしごなれば、必それらにすかれ給ふなといふに、士人閉口して戻りしとぞ。是を思ふに、許六はよく俳諧に遊戯せる人といふべし。いまの世の俳士の人をそしり、をのれを高ぶりて、やゝもすれば名を賣、利に走りんとする輩とは霄壤のたがひにして、その心の高き事をおもふべし。

右二條は古雪中蓼太の話なり。予若輩のころなれば、唯おほよそに聞て、何に出たる事なるや、また何人の傳へ置る話なりやといふとをも聞ざりしを今後悔す。

古池や蛙とびこむ水のおと 芭蕉  
ある人の説に、池のふりたる形容はさもあるべし。されど古池をおしつけて古池といはん事いかゞと。按るに筑波問答の序に、過にし春のころかよ、ふる池の亂草をはらひて蛙樂を愛する事ありきと、良基公あそばされしうへは難なかるべし。

信夫館 芭あからむ六條が髪 はせを

ある本に髭とあるは誤なり。六條は少將成經の乳母なり。平家もの語少將都還の條に云、少將の母上靈山におはしけるが、きのふより宰相の宿所におはして侍れけり。少將のたち入給ふ姿をたゞひと目み給ひて、命あればとばかりにて引かづきてぞふし給ふ。北のかたはさしもうつくしうはなやかにおはせしかども、つきせぬものおもひにやせくろみて、その人とも見え玉はず。六條が黒かりし髪も白くなりたり云々。

芭蕉、深川の菴池魚の災にかゝりし後、しばらく甲斐の國に掛錫して、六祖五平といふものをあるじとす。六祖は彼ものゝあだ名なり。五平かつて禪法をふかく信じて、佛頂和尚に參學す。彼もの一文字だにしらず、故に人呼て六祖と名づけたり。はせをも又かの禪師の居士なれば、そのちなみによりて宿られしと見えたり。その後其角が招きによりて、ふたゝび江戸へ立かへりて、

ともかくもならでや雪のかれ尾花 はせを  
ときこえしはこの時の事なり。

また是より若葉一見となりけり 素堂  
此句、とくくの句合に、一見となりけりといだせり。かの句合は、後後年を経て宗瑞といふ人淨書して印刻す。その時草稿に文字脱たりとおもひて、みだりにへなりにけりと書りと見ゆ。誤なり。其角が句兄弟にも、へとなりけりとありてその評のと葉に、となりけりとは素堂が平生の口ぐせなれば、これを證には取がたとし書り。扱、と文字は大やう下につけてよむ句法なり。その證ひとつふたつをいはず。

古今集  
日ぐらしの鳴つるなべに日はくれぬとおもふは山のかげにぞ有ける  
この歌賢住密勸に、とみしはやまのとあり。

會丹集  
夜をかけて春くれ夏は來にけらしとおもふまもなくかはる衣手  
慈鎮和尚の長歌に

かくてや今はあとたえむとおもふからにくれは鳥



その外にもあまたあり。されば西行上人のいづくにかといへる歌も、へとおもふかなしきと、へと文字下句につけてよむべきなり。

ある人のつたへし芭蕉・立圃兩吟の附句あり。立圃は万治十二年に卒せし人にて、はせをの仕を辭して伊賀を出し年なり。此附句の風調を考るに、いかにもそのころのものならず。ひとへに信ぜられぬものなれば、我家藏の俳諧録に是を載せず。其後享保八年に琴風が著したるおく記行といふ集を見しに、立圃といふ名多くあり。彼の雛屋立圃が後に又立圃と名のれるものありとおほえて、尤まぎらはし。近世は父の名・師の名を襲ひて名のるもの世に往々あり。昔はかつてなき事なり。すべて物に名のあるは、その物を辨別する所以なれば、かくはあるまじき事なり。たとへば硯をスバリと名づけ、筆をもおなじくスバリとよび、墨をもまたスバリといはゞ、何を以てわかつたんや。されば人の名を次々に名のれる輩も、みづからはをわかつ事なければ、或は二世某・三世某と書る事止

事を得ざるとなれども、わづらはしく見ぐるしき也。人のくにも古人を慕ひて我名に用ひし例もあれど、それは世をも隔、とにまざるまじき故ありて尤まれくの事なり。いまのどく人毎のやうにせしにはあらず。是らは百年以來の事にて、かの立圃などやはじめなるべきとおほゆ。但、菴号などは、その庵をつたへたる人の次々に書る事は、かの例にはあらぬにや、それさへ古人さやうに書るを見ず。

又按るに、後の立圃は雛屋が孫なり。たばね菴といふ集の中に云、

祖父雛屋立圃、第三の句を存じ出  
て、この花のすがた發句にむすび  
侍りて、手向草にもとづく。

鷺草や御簾のあちよりこちらむく 立圃  
とあり。此書、正徳二年四月刊行。

夜寒・肌寒は秋のと葉なり。はだ寒はいさゝか寒き義にて、漢字の將ノ字にあてゝ、はたと清みて唱ふべしとい

吸もの 吸だけ

冷飯

とりまかな  
一芋 煮入

宗長記の中の附句

人のなさけやあなにあるらん  
女ぶみかしこくとかき捨て

これはあなかしこといふつゞきにて附合せたり。宗長は大永頃の人なれば、そのころまでは女文にかしこと書る事疑なし。かしこは甚ふるき詞にて、はたらかしてはかしこみ、またへかしこまるなどいへり。上古の神の御名のかしこねの命と申奉るにも惶の字をあてたり。男の文の終に恐惶と書るおなじころなり。蓮如の文の終にもあなかしことあり。今の女文にかしくと書はこのかしの轉せるなり。いつのころよりかあやまり來たりつらん。

ほつれたる去年の寐蔭のしたゝるく

關西にて汚れ垢つきたるを、したゝるし、或はしたるしと今もいふなり。此詞古き事にや、扶木鈔に、

加茂社百首 慈 鎮

ふ人あり。温故日録にも將寒と文字にて書り。連歌には將寒の義なるべし。按るに、萬葉集第二十、防人歌に、佐賀波乃佐也久志毛用爾奈と辨加流去呂毛爾麻世流古侶賀波太波毛。また古今六帖、むかしある人といふ部に、へひとり寐の夜はだの寒さしりそめてむかしの人ぞいまもこひしき。是ら肌寒とはつゞかざれども、俳諧にては此歌どもを引あはせて、肌寒とせんも障あるべからず。

八月十五夜

せうが  
ふんにやく  
一煎物  
ごぼろ  
木くちげ  
里いもげ

吸物  
つかみ豆腐  
めうが

中猪口  
ちゅうしゅう

肴

にんじん  
やき松茸

しほり汁  
すり山のいも

くはし柿







るしわざにこそ、とあり。おもふに是らや諺の事のもとなるべき。

又案るに、鶯水が俳林良材にいふ、此翁丹州保津の産にして野々口氏宗左衛門親重といひける武士にて、累代弓馬に星霜を経て云々。上は後水尾帝の御前句をかたじけなくして、骨肉の句意をはいかにうたひ、或は烏丸亞相の賢筆を申くだして、はなひ草の巻の末に芳句を得給へり。又曰、ある日跡をくらまし名をかくして九重のかくれ家をもとめ、雛といふものに生涯をたすけ、子陵がころろざしをしたひ云々。是を合せ考るに、此ころより雛をつくりて雛屋とはいひけるなり。

句は万はじめをよくおもふべきなり。古人の句きこえがたきやうなるも、廻しめにて聞ゆる也。たとへば冬の日の脇に、たそやとばしる笠のさどん花。是は發句の竹齋に似たるといふに對して、笠に山茶花のとばしりかゝるは誰そやと問たる心にて、何の事もなくよく心得らるゝ也。此まはしめを見ざるゆへに、さまざまの説をなすも

へり。此類なり。

立志はいかにもちひさき男なりと見えて、京にあそびし時、團水が戯の句并ニ小序あり。

古ニ曰ク、設レテ名ヲ本ト名ニシテ其體一。無レテ何ヲ以テ當ニ其名ニ。言ハレテ本ト以テ當ニ其名ニ。无レテ何ヲ以テ當ニ其體ニ。是則所ニ以名實之顯也。其ノ名大ニ而其體小者、和諧堂立志法師。

中／＼にちいさかりけり蟬の口 團水

なにゆへに名をよぶこゝろふと 立志

これにて心圭と三吟の歌仙あり。立志が撰の都のしをりに見えたり。

惟然法師なれば、牛子ムと吳音にとなへたる事とおほえしに、漢音にてキゼムとよびしと見へたり。伊丹の鬼貫が家をたづねし時、

秋はれたあら鬼つらの夕やな 惟然

と即事にたはぶれしに、鬼つら、とりあへず、

いぜんおじやつた時はまだ夏

のあり。或は、たそやとト句を切て、走る笠のとよむべしといひ、または、たそやとバ知るなりなどいふ説あれども、みな非なり。八雲御抄にたばしるは、とばしると云り。古人の説なりと書せ給へり。たばしる・とばしる、同語にて、たといひとといひ共に發語ながら、唯はしるといふより語勢つよし。萬葉集に、霜の上にあられたばしり、また實朝卿の、あられたばしるなすの篠原、など形容おもふべし。

元日や土つかうだる顔もせず 去來

此句、遣土ひたるとおもふ人多し。土をつかふとはいはず。是は土抓みたるなり。み文字をのばして、つかうだと云り。文字濁りてよむべし、音便なり。平家物語忠度最期の條に、薩摩守はきこゆる熊野そだちの大力、くつきやうの早わざにておはしければ、六彌太をつかうで、につくいやつが、味方ぞといはどいはせよかして云々。また曰、しばしのけ、さいごの十念となへんとて、六彌太をつかうで、弓だけばかりぞなけのけらる。又狂言のとばに、たのみたる人といふべきを、たのうだ（空聞）人とい

と脇してたはぶれあひし事、七車にのせたり。鬼貫が名をいひ出でたはぶれしを、脇もまた其人の名にて附たれば、キゼムと唱し事しるべし。

其角が雑談に、支那彌三郎入道宗鑑は、生涯をかるんじて隱徳たかく、山崎の桑の門しかも車馬の喧カマヒシヤシなし。ひと日近衛殿宇治へ逍遙の頃、さる法師しれるものなりと尋ね入らせ給ひけるに、瘦つかれたる老法師ひとり、庭草とりなどして、その邊の池のたゞへに水かゞみ見けるさまを、

宗鑑が姿を見よやがきつばた

と仰下されければ則、

のまんとすれば夏の澤水

とつかうまつりける。當意興ありけるにやとあり。此御脇、鑑が申上たる事誰もおほえて異論なし。然るに滑稽太平記に、或時逍遙院殿へ宗長誘引して参向す。宗鑑は杜若をめで、庭の池に植て愛しけるに、折ふし咲亂れたれば一本持参し献じければ、御挨拶として、



手にもてる姿を見ればがきつばた

のまんとすれば夏の澤水

蛇に追はれていづちかへるらむ

宗鑑

宗鑑

宗鑑参向のよし申上ければ、發句すべし、汝脇はやくして宗鑑をせかすべしと仰ければ、脇を御發句出ると附たり。宗鑑も名人にて、宗長いひもきらざるに附たりとなり。宗鑑はやせ形なりければ、餓鬼つばたと仰られき。

また犬子集に載たるは、逍遙院殿へ宗鑑法師始て伺候の時、宗長法師伴ひて罷出けるに、逍遙院殿御當座、

宗鑑がすがたを見ればがきつばた

のまんとすればなつの澤水

蛇に追れていづちかいるらん

右、脇宗長、第三は宗鑑

と見ゆ。此二説によれば、宗鑑が室へ立入らせ給ふにはあらず、御脇も宗長作なり。雑談集に瘦法師の池水に水かぐみ見たるなど、御發句のさまにはよく取あひたるやうなれども、二説とも宗鑑が近衛殿へ参殿したる趣なり。犬子集

は雑談集より五十余年以前の撰なれば、右二説

を正すとすべし。

按るに、宗鑑は讃岐國にしばしすみて、そこにて終りぬと見ゆ。一時軒惟中が記行に、八月六日讃州一夜庵に至る云。宗鑑法師、心を茅擔にとどめ眼を煙霞にあかじめ給ふ。けにとほりなり、天下の多景こゝにあつまれり。更にいふべきものはもなし。

月白し此一夜庵をいかむせむ

後の山路を四五反ばかりわたりて宗鑑の石塔あり。草茫々と生しけり、徒に土中になかばしづめり。夕陽の僧、折々落葉を拂ふ。われも此ところに来りて終り、此塚のもとにふせらん事をおもひ、一炷の香をひねりて感慨やます云。かくあれば此ところにに終りし事明らかかなれば、雑談集に、天狗になりて月のあかき夜さまよひ歩行しなどいへるは、一時の文花に書るにて信すべからず。又案、近來風体抄云、讃州興昌寺といへる禪院は、一夜庵宗鑑法師の開かれし地にて、終にその處にて

終られたるとなむ。かれは縁起にくはし。

下の客とよしいへ月の一夜菴 一三

又、對月庵ともいへれば、

月に對すあんの外なりあか名人 一時軒

其角十七年忌に大坂淡々が編集四卷、その標題、たゞ七回の三字を題せり。集中に其角年立を記す。

寛文丑

うまならばいかほどはねんうしの年

さてもはねたり寛文元ねん

七月十七日、母の靈夢

人目には過ると見えてうろくすの

かずしらなみの寶まうくる

七夜曉

すみよしの松の秋かぜふくからに

こゑうちそふる沖つしら浪

寛文九酉九月廿二日曉

東順靈夢

ことの葉をせどにも門にも植置て

いづれやくにはたちつてと哉

十歳 入學 大圓寺

十四歳 於堀江町一本草綱目寫

修治 主治 發明

十五歳 内經素本 易經素本寫

蒲生五郎兵衛需にて伊勢物語書之

右表紙出来 本多下野守殿へ献之

右之御褒美として刀申請

十六歳 草刈三越講筵

服部平助講述

十七 桃青廿歌仙

十八 延寶午 發句合 杉風五十句合作

秋洪水

二十 延寶申 次韵 信徳七百五十句對

辛酉

壬戌冬 朝鮮來聘

天和亥 みなし栗於芝金地院前

貞享甲子 於京蠶集



丙寅 新山家 木質の記

丁卯 續みなし栗撰之

四月八日 妙務尼卒 五十七才

元祿元 上京 季吟亭講三歌書

十一月廿二日宗隆尼卒於堅田一葬八十四

元祿三庚子 花つみ二卷夏百日撰之

四辛 雜談集二卷撰之

五甲

六癸酉 八月廿九日東順卒 萩の露撰之

七甲戌 句兄弟三卷撰之 上京

十月十二日芭蕉卒五十二 枯尾花撰之

栗津義中寺葬之

九丙子

庭竈牛も雜煮をすわりけり

十丁丑 うら若葉二卷撰之

十一戊寅 十二月

寛文 延寶九 天和四 貞享五

盧栗 蠹集

續みなしぐり

新山家

花摘 上下非人句 雜談集

句兄弟 上中下

枯尾花

わか葉合 末若葉上下

元祿十三 三上吟歌之夏

元祿十四 焦尾琴六月

右、其角翁書拾遺レシテ幕シテ爰ニ出ス。此外、類椀子一集上中下アリ、年記ニモレタルヲ以テ記之。淡々撰

旅ごろも早苗につゝむ食乞ん 會良

いたかの鼓あやめ折すな はせを

職人盡歌合に、いたか

文字よし見えもみえずもよくめくる

いたかの經の月のそらよみ

いかにせん五條の橋のしたむせび

はてはなみだ。ながれかんじやう

といふ事を書り。その文、

一時之所レ是トスル 未ニ必シモ是ナラ。蓋シ一時之所レ是トスル者ハ是トシ其ノ所レ是而非ニ我輩ノ之所謂是ニハ也。一時之所レ非未ニ必シモ非ナラ。蓋シ一時之所レ非者ハ非ニ其ノ所レ非トスル而非ニ我輩之所レ謂非ニハ也。燕石在ニ當時ニ則得ニ十襲之尊重ヲ、和璧在ニ當時ニ則逢ニ再別之毀辱ニ。豈燕石可レ寶トス、和璧可レ罪ス乎。不知者ノ顛倒錯亂ナル而已

自警七是

句をかざらむとすれば、必粉をほどこして腮にたらざる類、たゞ娟醜浴のまゝならんを是トス。

句にちからあらんとすれば、必牛馬の騰驤罵駑にひとし。唯穩にして勇悍ならんを是トス。

句をたはぶれんとすれば、必譬をたゝきて笑ひをもとむるにちかし。唯箕居祖楊ならずして、はなやかなるを是トス。

前句にすがりてあながちならんとすれば、或は衣を縫に膠漆をもて補ふがごし。たとへば襟裾は別にして縷のはなれざるを是トス。

とありて、その畫は僧のすがたにて笠を着、ちひさき卒塔婆を持つ体をかけり。いまの世にもある流勸頂などすゝむる、いやしき僧形の者に似たり。此事をいへるにや。されど鼓など持べき風情にはあらず。或人の云、奥 南部の邊、今の世にいたこと唱ふるものあり。それは盲女にて修験などやうの事をするものなり。すゝだま・野猪の牙などを糸につらぬきて襟にかけたり。脊におんだいじといふものを負ふ。それは竹の筒にて固く封ぜり。何物たる事をするものなすとぞ。また三春の俳士の語りけるは、我里にいたかと唱ふるものあり。それは攝津西宮の社人の配下にて、惠比須の社の札を配る者也。何故なるや、平民とは嫁娶などもせず。とにいやしまるゝ者にて、祇園の犬神人などの類なりといへりし。此二説の中の者の、元祿比には鼓など打ならして歩行けるにや。なほそのくにの人にたづぬべし。

一晶が獨吟千句をうつしもたる人あり。その自序に七是



前句にはなれんとすれば、或は襪を不脱して踵をさぐるに似たり。たとへば五指ひとしからずして、しかもあひしたしみたらんを是トス。

破れば矩をうしなひ、泥めば變化をしらす。やすらかなるをこのめば淡し。あたらしきを求めばと様なり。すゝむものは籠く、屈するものは鈍し。その是ならんを是トス。

いま一是は虫ばみて見えす、可レ惜。

原松が古き手帑をあまた持るものあり。その中に晋子雨乞の句、

夕立や田も見めぐりの神ならば

只今三圍稻荷の神主方、晋子直筆奉納のたんざく、寶物にて御座い。以上。

九月二日

狸と庵

都不覺様

とありて、其末に俳諧の論を書るものあり。その中ニ云、去來死後の傳書、去來妾是を秘藏す。支考、乾字金十

五兩出して買得て後翁直傳と偽り、其目六十條を作りかへて己が門人を誑し、多くの金錢を貪れり。十論并ニ古今抄といふ書を撰て、祖翁の流義なりと稱して自作の妄談を出す事數百ヶ條あり。嗚呼一人其虚を傳へて萬人實を稱す。死して何の面目ありて師に黄泉に見えんや。無間の罪おそるべし。去來妾、在命尼となりて、今下長者町油ノ小路西へ入町に住す。去來は向井元丹弟、今の向井元桂伯父なり。是故に去來妾今元桂孝養す。

按、原松、号狸と菴、加藤氏、江戸人、狂名烏鴉坊、また虎翼居士といふ。其角が高弟なり。後京師に住す。都不覺は比叡山大善院に住す、佛行坊といふ。

風俗文選に載たる松島の賦、こゝろみにおくのほそみちの文章と參考するに、はせをの書る處を前後に錯綜して、しひて賦の体につどりあらためたりと見ゆ。許六さしもの英才にて、しかもはせをの書るまゝながら、前後に引たがへてつどりぬる故、語脈のつどかざる所あり。學者

よくこゝろを付て考ふべし。

玉かづらなまりもゆかしつまね花 史邦

後猿蓑に上五字、佐用姫のとあり。つまね花は鳳仙花をいふ九州の方言なり。源氏物語玉葛の君は、豊後にてひとゝなれゝば、その方言の訛もゆかしとはいへり。松浦佐用姫になしても西方の國にて、寄せなきにはあらざれども、其事古きに過てをかしからず。史邦が自撰の小文庫に玉かづらとあれば、是を用ふべし。

不猫蛇に云、予、石臼の銘といふ戯の文かきて翁の許へ、あしかるべきは勿論、殊に聞にくき所は加筆給るべしと、京に居られし時遣はせし。翁の定めて書直し置れし處もあるべし。予も草案のまゝ名もかゝすつかはしたるに、翁滅後に左様の反古など渠が取しと見えて、文選とやらん文をあつめたる物の中へ、石臼の銘を翁と名書入たり。予むかし若き時書たる文にて、格別さわがしき文なるに、はせを翁と名づけし不調法さ、言語同断なり。と書り。不猫蛇は越人作にて、支考が十論を破したる書也。

今按るに、文鑑・文操、石臼の頌をのせず。これは史邦が小文庫にあり。越人みづからかくいへれば、此文章、はせをの造意にはあらざるべし。文中筆力似たる所は、加筆の處と見ゆ。されど、はせをに似ざる所多くあれば、越人が作として可なり。次でおもふに、小文庫に載し煤掃の説といふものも、ひそかにおもふに、はせをの筆力ならぬやう也。これらも支考が手に出たるを、史邦漫に書加へたるもしるべからず。文中つたなき語ども、交れり。殊に結句に、ほどなく暮て高軒とはなりぬ、と書て、その發句、暮ゆく宿の高軒とあり。これら決してはせをの造意にはあらぬ也。先達の此文章の事なにとも違論なきを、かくまで臆説をなす事はどかりあるに似たれど、しばらく思ふ所をしるして識者の評をまつ。

霜の後なでしこ咲る火桶かな はせを

此句大かた聞へがたし。按るに、火桶に撫子畫く事故實也と許六云り。またつれづれ草諸抄大成といふものにも此事を書りとおほゆ。されば火桶の畫をさして、



たどちに咲るといふとおほゆ。拾遺愚草に、

霜さゆるあしたの原の冬がれに

ひと花咲る大和なでしこ

定家卿の此詠をおもひ寄て、その霜の後も又火桶になでしこありといふ意なるべしとおもひて、人にもかたり物にも書付しに、ある人の説に、是はたどちに火桶に撫子植たる句なるべし。著聞集第二十九、草木ノ部云、延喜十三年十月廿三日御記云、仰侍臣令進進菊花各十本。分三番一相争つ勝劣。賭以申時各方領花参入ス。一番入自入自次第進花立庭中。一番種花以石洲形二番我火桶口一各藏人所二人取立御前火桶にももの栽る事、是を證とすべしといへり。此句の紅葉書に、古き世をしのびて、とあれば、延喜の菊あはせをおもひよせて作れるにもあるべし。又火桶には、時にあたりて何にても入べき物なるにや。順家集、天元元年十月はじめの亥の日、右大臣の女御の火桶にもちひくだものもりて、内裏の女房につかはす。大臣此火桶ひとつ奉らせ給ふ。しろかねして亥の子瓶の形をつくりてするさせ給へる云。これらを見れば、火桶にたどちになでしこ

を植たるにもあるべきにや。後の人思ひ定むべし。

ちる花になむあみだ佛とゆふべ哉

あら野集に、守武が辭世とて載たり。其角が雜談集に此句を論じて、神職の辭世として何ぞ此境をにらむべきや。たどア、と歎美して打おどろきたる落花なるべしといへり。此ころ荒木田家の説を聞しに、彼家記云、守武は文明六年九月廿日敍爵。同十九年二月廿日任禰宜。天文十年四月廿三日轉一坐。號蘭田長官。同八月八日卒。

辭世

あさがほにけふは見ゆらむ我世かな

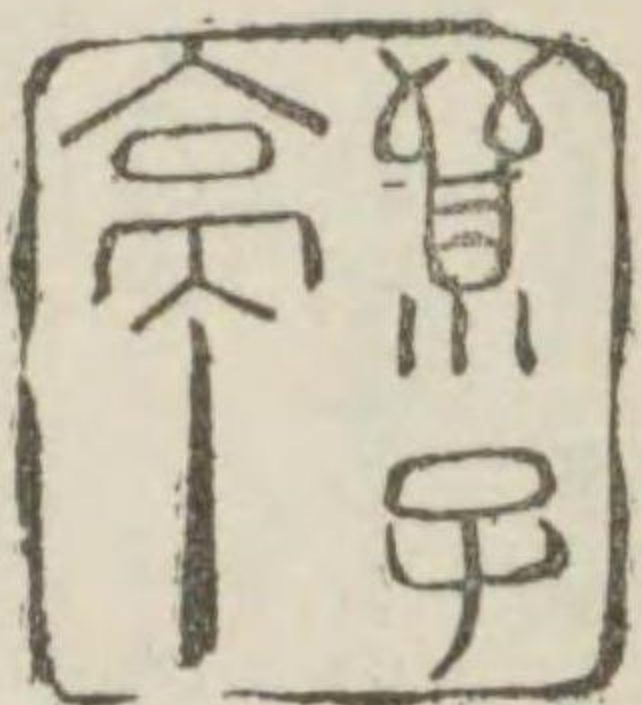
また

神路山わがこしかたもゆくすゑも

みねの松かぜ峰のまつ風

其角門人木といふ人は、東叡山内清水觀音の別當の御坊なり。其角後所持の印一顆を傳ふ。故ありて是を衰丁子におくる。丁子また嵯峨の重厚にあたふ。厚、東奥遊歴の頃旅囊にたくはへしが、南部の平角が數奇の志に

めで、是をゆづれり。今平角が文庫に藏して、十襲愛翫す。その印、



下の印文何とも讀がたく、久しく人にも見せ問ねれどもつひに解せず。此ごろある人の話に、是は其角が附句の意味を人にをしへるとて、常に八十人入といふ事を口ずさびけるといひつたふ。たしかにその文字なるべしといひし。いかさまにも見えたり。さて此文字を附句のをしへとするはいかにといふに、すべて附句は理にわたらず、たど前句よりの拍子をはづさず、心頭いさゝかの分別をもちひずして、たとへばノといへばへと附、一とあらば一とうけ、へといはむにはノといふやうに、前句の調子をぬかず、いかやうにも附べしといへりとぞ。是其角が活達の氣象、さもあるべくおほゆ。普化禪師の頌、四方八面來旋風打などいへるものと、同一轍の活法なら

ん。後世七名八体、あるひは二十四体などいへる案の疑網を、たどちに割斷すべき大光明の利鋸なるべし。

秋のくれ客か亭主か中柱 芭蕉

伊井家の邸に許六をたづねし時、許六たま〜家にあらず。依て彼が歸るを待ちの作なりとぞ。その中柱といふものは、今も猶伊井家にありといふ。

山田淺右衛門、俳号寛州が持る其角が眞蹟に、

景清が世帯みせぬやふた齋 其角

このくせもの、宵は大宮司が娘にかよひ、曉は五條坂のあこやにしのぶ。君につかへて寝食をわすれし兵なりけり。

此自註にて、句意よくきこえたり。五元集にはこのこと葉書なし。



隨齋諧話 坤

夏成美輯録

卯辰記行に、たれもくいふべくおほえ侍れども、黄哥蘇新のたぐひにあらずば、口をひらく事なかれ云。流布の板本并芭蕉文集などにもみなかくのどく書り。案るに、哥は書寫の誤にて、奇の字よろし。漁隱叢話に云、王荆公以巧、子瞻以新、魯直以奇。とあり。魯直は黄山谷、子瞻は蘇東坡なり。是をつらねて、黄奇蘇新といふなり。

素堂は甲斐國の産なり。酒折の宮の神人、眞蹟を多く傳へ持り。その中に、松の奥と梅の奥と号たる二冊の草紙は、俳諧の教を書るもの也。その序、

長袖よく舞、多錢よく商ふ。ぜになしの市立とや笑はれん。それも絲瓜の皮財布と、かたけて出たつ市も、わがまだしらぬ大和とはながら、俳諧の道芝

驚 寒<sup>シテ</sup> 似<sup>リ</sup> 惜<sup>ニ</sup> 聲<sup>ヲ</sup> 素 堂  
大氣なる春はいたらぬかたもなし 山口氏 元長  
下戸も流れにあらふさかづき 内田氏 吉賢  
驚<sup>ハ</sup> 波<sup>ナ</sup> 石<sup>ノ</sup> 間<sup>ノ</sup> 蟹<sup>ノ</sup> 森<sup>氏</sup>  
飛 違 野 等<sup>ノ</sup> 蜻<sup>ノ</sup> 吉 重  
河村氏 野田氏  
ゆふ日かけ残りし月の枝ながき 小野氏 長成  
粧 葉 露 無<sup>シ</sup> 情 助 元

元祿三年庚午秋日

貞徳居子<sup>(主)</sup>、老の後みづから標号<sup>ヒキョウ</sup>を長頭丸と書れし。かたへの人そのころを問しに、老ゆくほど目のみ高くなりて口は年々にさがりぬれば、さて頭の長くなり侍ると狂言申されしとぞ。

梅さくやしらゝおちくほ京太郎 はせを  
しらゝ以下はみな古物語の標題なりとばかりおほえて、たしかなる説なし。曾頭<sup>サイツゴロ</sup>小野のお通がつくれる淨瑠璃ものがたりといふものをつたへたる人ありて一見せしに、姿見の段といへるに云、まなの上手にかなの一、よみけ

わけゆく末の一助もやと、寒爐のもとにれいのつたなきを忘れて申にゆ。また曰、松と梅とはかの御自愛の木蔭なるをと、なぞらへて爰に冠させ侍るならし。

元祿三年十二月廿日

山口信章來雪みづから序

また酒折の宮奉納和漢篇あり。

さきの年甲斐住原田氏吟夕子、予が閑庭に入て折ふしの興を詠じけるに、その冠の句、暗に菅家の<sup>原</sup>虫損送る詞にありければ、漢の<sup>虫損</sup>損けらし。それより漢和相まじへて面八句となし、かのくにの境にいつきまつる酒折の宮へをさむべきよし、なほと葉をそへてしがなとすゝめけれど、我何をかいはん。抑此神所は新墾<sup>ニヒロ</sup>つくばねのうつりにて、日本武尊つらね歌のとはじめにてありしより、むかしの人は連歌の席には、尊のかけをかくまもかしこくあがめ奉りて、いまの天満神のごとし。しかれば願主の思ひよられし所、まことに故あるかな。

山口素堂 原田氏 吟 夕  
詩の家とあらん花遅き庭のけさの雪

るさうしはどれ〜ぞ。源氏・さころも古今・万葉・いせもの語・しらゝおちくほ・京太郎、百余帖のむしづくし、八十余帖の草づくし、扇流しに硯わり云々。この物語の眞偽はしばらく論せず、いかにしても今やうの文章ならず。はせをのころにもてはやせしものとおほゆ。此句たどちにその文句をとれるなるべし。

案るに、おちくほ物語はいまにつたへてあり。しらゝ・京太郎はつたはらず。中にもしらゝは古き物にや。さらしな日記に云、源氏の五十余巻、ひつに入ながら、在中將・とほきみ・せりかは・しらゝ・あさうづなどいふ物語ども、ひとふくろとり入れてえて、かへる心地のうれしさぞいみじきや。又、古今著聞集巻五に、しらゝといふ物語に、しらゝの姫君、男の少將のむかへにこむとちぎりて遅かりしを待とてよめる。

たのめつゝ來がたき人をまつほどに  
石にわが身はなりはてぬべき

かく見えたれば、しらゝも建長頃までは有しなるべし。



秋田の家士何某、其角が書状を祕藏し持る人あり。例の快澗なる文体、とにもしろくおほえて左に擧ぐ。

(原註)不明  
書、相認め處預<sub>レ</sub>御返章<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>淺拜見仕<sub>レ</sub>。其筆様倍御堅勝被<sub>レ</sub>遊<sub>二</sub>御巡政<sub>一</sub>之旨、珍重目出度奉<sub>レ</sub>存<sub>レ</sub>。下貴様御近膝不<sub>二</sub>相更<sub>一</sub>御勤之御事、重疊令<sub>レ</sub>存<sub>レ</sub>。下拙戸内無事相揃<sub>レ</sub>。去冬震中空地板を敷寐<sub>レ</sub>。霜雪、火事<sub>レ</sub>の逃筋とも氷風になやまされ、故疾と

もかひ餅・淺漬の風味かはりにつれて酒疝わづらはしく、諸事不性<sub>二</sub>相成<sub>一</sub>。松山のせがみ、遠近の連衆交遊かさなり<sub>レ</sub>而、二日狭の宿醉御察可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下<sub>レ</sub>。酒饌の招たどもかへさず<sub>レ</sub>故、折<sub>レ</sub>發句仕<sub>レ</sub>。檀泉も一向俳源に染<sub>レ</sub>て參會申<sub>レ</sub>。御屋敷御用之閑<sub>二</sub>對交御噂申出<sub>レ</sub>。例之桔槔屋幸八が簾を下させ<sub>レ</sub>而樂しみ合<sub>レ</sub>。秋航楓子のそ<sub>レ</sub>りもをかし<sub>レ</sub>、士農工商此春斗とぞよめき<sub>レ</sub>。七太夫は品川仕舞と傳へ承<sub>レ</sub>。式下太夫又三月二日の夜やけ申<sub>レ</sub>。大門通彌兵衛町は今度とも三度にて<sub>レ</sub>。先以雪の中ながらも御安慰に暫<sub>レ</sub>酔、山<sub>レ</sub>御羨敷御噂申出<sub>レ</sub>。破屋いまだ手も附

不<sub>レ</sub>申<sub>レ</sub>。類火のがれ<sub>レ</sub>を當日の樂しみと存<sub>レ</sub>て、一句心を和らけ<sub>レ</sub>。

此雨に花見ぬ人や家の豆  
王維が山水の畫譜に、丈山尺樹寸馬豆人と遠山を詠じ、目のなき人形の勢を申<sub>レ</sub>。自作は家の中に居たる人めありながらの豆人と存<sub>レ</sub>。花は例の冠里公より拜賞仕<sub>レ</sub>。

正月晦日の吟  
山吹も柳の糸のはらみかな

二月晦日の吟  
春雨のひしきものには枯つゝじ

三月の山吹つゝじは古歌、詩人の物、連歌の手玉。此二句、俳諧の的星と自讀いたし<sub>レ</sub>。花好の御眼中ひしきを能<sub>レ</sub>御心付られ可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下<sub>レ</sub>。尤其筆様へ被<sub>レ</sub>仰達<sub>二</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下<sub>レ</sub>。

一めうが屋太夫大内職、聖堂の大儒三七と申浪人<sub>二</sub>、桔槔屋久兵衛奥にてさし<sub>レ</sub>ころされ申<sub>レ</sub>。儒者は卒にて死罪。太夫心中の事、世始<sub>レ</sub>り<sub>二</sub>、これがはじめての事<sub>一</sub>て

いへるを、男ならぬ身とかや。是沙汰<sub>レ</sub>。

一糶町長門馬場のかど、堀小四郎殿御寄合なり。此屋敷化物出て、隣へも折<sub>レ</sub>參<sub>レ</sub>り。

大坊主目一ツ

右、客にても有<sub>レ</sub>之、賑やかなればなほ出<sub>レ</sub>よし。天徳寺門前日雇取吉兵衛妻、廿七にて三月十四日、一腹三男子を産申<sub>レ</sub>。名を三番叟と付申<sub>レ</sub>。公儀より御扶持被<sub>レ</sub>下<sub>レ</sub>御書、寺社方へ出申<sub>レ</sub>。

此きさらぎ團十郎又傷にうせぬ。一子九藏、俳諧のまねと予にちなめり。かれをいたみて、

塗顔の父はなからや雉子の聲

親子の赤づら此ものにて<sub>レ</sub>。年頃の句集<sub>レ</sub>。満昏途<sub>二</sub>精工<sub>一</sub>得<sub>レ</sub>ども、聊力足り不<sub>レ</sub>申<sub>レ</sub>。つくば山のほりかねたる有増分<sub>レ</sub>入<sub>レ</sub>御心、奥<sub>レ</sub>而、其元御補を相待<sub>レ</sub>。猶もやう次第珍敷重便可<sub>レ</sub>申<sub>レ</sub>述<sub>レ</sub>。恐惶<sub>二</sub>と<sub>一</sub>。

三月十日

又左衛門殿御一通之趣、被<sub>レ</sub>入<sub>レ</sub>御念<sub>二</sub>忝存<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>然御心得、委儀は合信頼入<sub>レ</sub>存<sub>レ</sub>。

紫孔様

い。三月廿四日の夜六時、四十余の女房を犬八疋にて喰殺し申<sub>レ</sub>。清六など立合、傘にてふせぎ得<sub>レ</sub>ども、傘をくゞつてしてやり<sub>レ</sub>。四月十日、あけ屋町より江戸町へ曲り<sub>レ</sub>川岸にて、三春と申らしやう門宿なし男に心中半ごろしにて、是も成敗にて<sub>レ</sub>。其外淋<sub>レ</sub>。米は百俵にて六十兩。七三郎・勘三良・霜月・竹坐・團十・勘三七・傳九・平九、山村へ幸左衛門・傳吉と入組申<sub>レ</sub>。

一搖泉院どの淺野内匠頭殿後室御哥之事、とし三月十四日、長矩三年忌の御法事、芝泉岳寺へ御參詣あり。内藏助はじめ四十六人の新墓所へ、手づから花水をくみかはし給ひて、

おくれじとおもふ浮世にながらへて  
なき數<sub>レ</sub>にこのはもなし

或人の申されしは、一句になき<sub>レ</sub>なしと二字、病歌と沙汰仕<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>ども、哥にくらきもの<sub>レ</sub>批判なり。

亡<sub>レ</sub>數<sub>レ</sub>に言の葉も無<sub>レ</sub>シ

と感涙にて、榮啓期が男に生れたる事を、樂しみと



虎吟(二字調) 御と傳申ゆ。其元の雪如何、死ナホに御暮被レ成ゆ哉。去年の刈田其外御作承度事(原註本ノマ、シヤツキ)し。下谷風、さぞ古くなりゆ半と御噂申ゆ。秋色も古着棚仕舞、そば切屋いたされゆ。さめぎはのけんどんは一盃進じ度ゆ。半右衛門様も御傳手次第宜敷く奉頼ゆ。堤亭、尤此間(原註本ノマ)もきくれ迄参ゆ而、折ふし御事申出ゆ。必江戸をなつかしいとおほしめすな。

或人いふ、俳諧袖といふ製は、伊賀上野の梢風尼といふ人の芭蕉におくりたる衣にて、物かくに便よきやうにとて、右の袖を左より一寸みじかくしたる服なり。彼尼の姪たる未塵老人のもの語なりとぞ。名月や持れてまはる椽柱といふ句は梢風の作なり。生涯の句集、木の葉と号す。世に流布せず。未塵老人は俗稱堀伊織、伊賀の家士にて秩祿六百石。江戸鹿子といふ双帯に、江戸の諸藝者を載る中、俳諧師の部に見えしは、

雪 柴 桃 青 一 晶 不 龜 雀

事なかれ。君父の讐あるものは門前にあそぶべし。いたゞきふまざるの道にしのみびざる情あればなり。一衣類器財相應にすべし。過たるはよからず、たらざるは悪し。

一魚鳥獸の肉好みて喰ふべからず。美食・珍味にふける人は他事にふれやすきものなり。菜根を咬カミて、百事なすべき語をおもふべし。

一人の求めなきに己が句を出すべからず。望をそむくもしからず。

一たとへ嶮岨ケンシツの境たりとも、所勞ショロウの念を起すべからず。おこらば中途より歸るべし。

一馬・駕カにのる事なかれ。一枝の枯杖ををのれが瘦臙とおもふべし。

一好て酒を飲べからず。饗應により固辭しがたくとも微醺ビクンにして止べし。亂に及ずのらん幽亂、起歳の戒祭にもろみを用るも酔るを憎みてなり。酒に遠ざかるの訓あり。慎めや。

一舟錢・茶代忘るべからず。一他の短を擧て己が長をあらはす事なかれ。人を誘て

西丸 調和 林中子 幸入 幽山 露言

とあり。按るに、龜雀は其角、西丸は才丸の誤字なるべし。此板本闕本を見し故、著作の年月詳ならず、大やう延寶頃の作と見えたり。其後惣鹿子と題せるものあり。是は元祿二年の撰にて、鹿子の誤をたゞすよしの序あり。序者は松月堂不角なり。惣鹿子にのせしは、

一庄三十四間 本町一丁目川岸 石町四丁目 山下丁 南小田原丁  
芭蕉 幽山 才丸 工 呷 蝶子  
日本橋一丁目 伊勢町 伊勢町 五郎兵衛丁 石町一丁目  
調和 不 卜 晶 角 山 夕 嵐 雪  
南傳馬町 伊勢町 本町三丁目 五郎兵衛町 徳

芭蕉行脚の掟といふもの、世に寫し傳るあり。半信半疑のものながら、ある人の、奥州高久角左衛門がもとにて、はせをの眞蹟を珍藏したるを、したしく見たりといひしその寫のまゝを左にのす。後人なほ正すべし。

一ひとつ宿に再宿すべからず。暖なるむしろをおもふべし。

一腰に寸鉄たりとも帶すべからず。惣てものゝ命とる

己にほこるは甚いやしき事なり。

一俳談の外雑話すべからず。雑話出なば居眠して勞をやしなふべし。

一女姓(性)を俳友にしたしむべからず。師にも弟子にもいらぬ事なり。此道にしたしまば、人を以て傳ふべし。惣て男女の道は嗣を立るのみなり。流蕩リウダウすれば心、敦ジュン一ならず。此道は主一無適イチムツクにしてなす。よく己を省べし。

一主あるものは一枝・二草たりとも取べからず。山川・江澤にも主あり。つとめよや。

一山川・旧跡、したしくたづね入るべし。あらたに私の名を付る事なかれ。

一一字の師恩たりともわするゝ事なかれ。一句の理をだに解せず、人の師となる事なかれ。人に教るは、をのれをなして後の事なり。

一宿・二飯の主もおろそかにおもふべからず。さりやとて媚諂らふ事なかれ。如是の人は世の奴也(ヌ)。此道に入るものは此道に交るべし。

一夕をおもひ且アシクを思ふべし。且暮の行脚といふ事は好



まざる事なり。人に勞をかくる事なけれ。しばく  
すれば疎せらるゝことをおもふべし。

以上

尙按るに、亡友五範かつて申せしは、芭蕉に俳かい  
傳書といふもの更になし。世に十七條・二十五條など  
いふもの印行にあれども、皆支考が門派より出たる  
ものにて、尤うけがたし。梧の一片といふ書は祇空  
が偽作なる事顯然なり。すべて生涯教へめきたる事  
をいさゝかも書ざる人なりといへり。是らをあはせ  
考るに、右の掟書も芭蕉の筆力に似ず。されば後人  
の偽作とおもはるれど、しばらくしるして明眼の人  
の批評をまつものなり。

信濃上諏訪李郭俗稱和泉屋五左衛門が許に、芭蕉自樂の和歌七首を  
藏せり。みな哀傷の作なり。

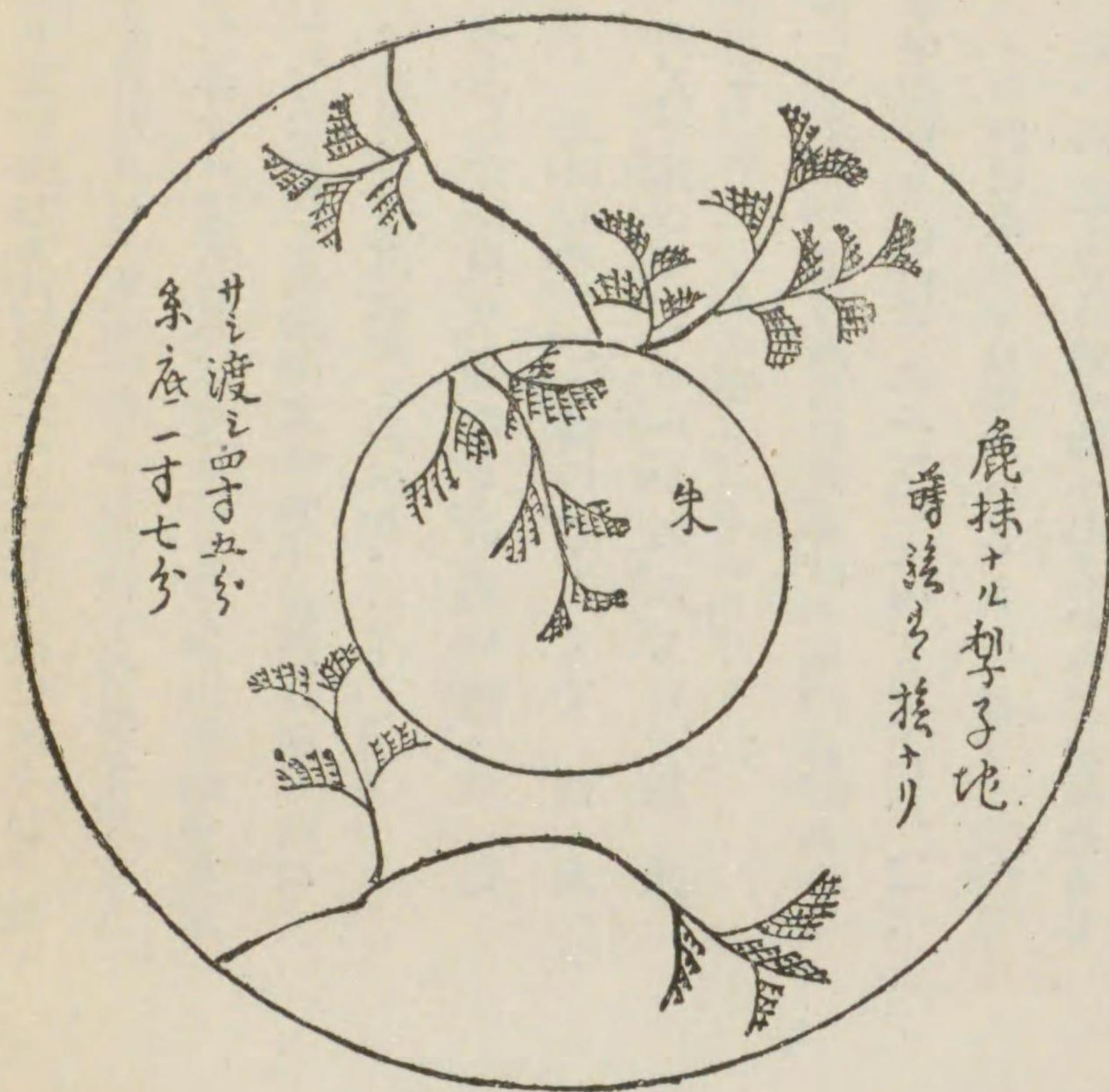
田中一閑身まかりし後、妻の加賀  
國に引こし侍りて、いまはとふ人  
もなければ、かの墓所谷中の新堀  
へはじめてまかり侍りて

とふ人もいまは夏野の草のはら  
露ばかりこそ友とおくらめ  
見ればかつむかしの夢のとくさを  
おもひしられて袖ぞつゆけき  
人の身のいまのなく日をありし世に  
しらで過にしひとぞはかなき  
のり姫の君みまかりし後、ほどな  
く鈴木主水身まかりければ

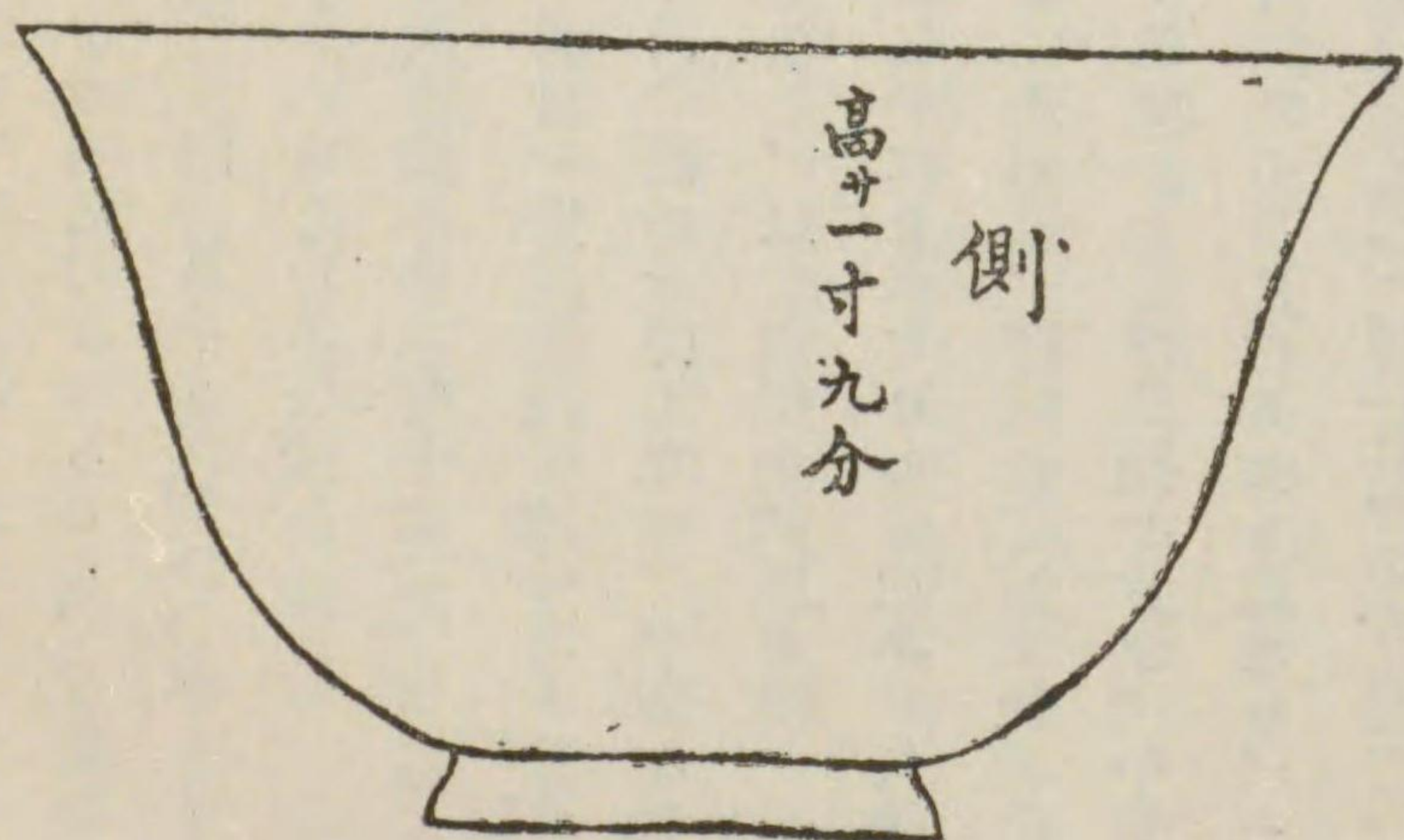
見し夢にゆめをかさねてかた糸の  
こゝろほそくもおもほゆるかな  
みるまゝとあなうつゝなやあだしのの  
つゆと消ゆく夢の世のなか  
五月十八日は、れいの講習にて、  
かのところへまかり、なき人をお  
もひ出で

かよひにし人は夏野のくさのつゆ  
その名ばかりはきえのこりぬる  
いつしかにむかしの人としのばれて  
とのはぐさに露かゝる覽  
また曾良が筆にてはいかい歌一首あり。  
としの夜の更ゆくまゝにとしけき  
みやこの市の音しづかなり

常陸國小川の里松江が家に、芭蕉留錫のころ常に食をす  
ゝめたる古五器二具あり。文化壬申の年、日向國眞彦と  
いふ神職の人、その住る所の翁が岡といふに、文明中に  
勸請せし翁大明神といふ有。所祭職田産神その社に芭蕉翁を合せ  
祭ると云事にて、諸國の句を勸進せし頃、松江が家に宿



して此あらましを語り出るに、主、この人の志の深きに  
めで、右の五器の中汁椀ひとつをおくれりとて、來り  
示してこれをよろこぶ。はなはだ古雅なる器なれば、左  
に圖す。





貞徳は細川玄旨法印の門弟にて、詩歌連歌にあそび、狂句殊にすぐれければ、法印のゆるしに依て俳道を興立す。時に寛永二年十一月五日、山本主として洛陽妙満寺本文坊において、はじめて俳諧の文臺を立、百韻満座し畢ぬ。連衆十人、須賀庄治郎執筆といへり。

つみわたかぬり桶なりの庭の雪 貞徳

火ばちめされよ雲のころもで 西武

天人や寒さをこらへかねぬらむ 親重

下略

按るに、或説に、玄旨法印紹巴を請じ連歌興行ありて退散の折から、紹巴たはふれに永種が袖をひかへて、

酒にゑひしゆのかへるさの袖

と、はい諧して是に句を繼べしといふ。永種遅くして句をなさず。貞徳父にかはりて、

ぬぎ捨し衣の棚をまくらにて

永種は貞徳が父、そのころ衣の棚に任す。

かく付しに満坐大に興に入、玄旨法印その才氣の神速なるを感じて、俳諧の道をあらたに興すべしと、

貞徳こゝにおいて和漢連歌の式にならひ、七句のもの五句、五句の物三句にゆるして、百韻連句をつらぬべしと玄旨法印へ事をうかゞひ、やうく世上に俳諧式目をふれおこなふと云。

又按るに、武徳編年集成卷十六、天正五年九月の條

云、一日 神君・信長對顔の時一老人豫參す。信長神君に云て曰、是松永彈正なり。公方を殺し、其主三好に仇をなし、以前南都大佛殿を焼。此三大事は古來人のなしがたき所なりとの給ふ。久秀、平伏して耻憤りて赤面し、汗流れて頭上煙のほるごとくなりしが、此度ふたゞび信長を背き、今爰に亡ぶ。

誠に大佛殿焼却の月日にあたる處なり。その長子右衛門佐久道、城を出て一旦死をのがれるが、搦捕られて誅に伏す。末子一人漸活のこりて永種と号し、洛の市中に寓居す。その子は俳諧師貞徳なり。

團水が團俗といふ集に、俳諧一言芳談といふを載て曰、

芦月庵云、はいかいはやさしき道なり。

案、西鵬は西の程が後な 西鵬云、寓言とうそとは異なるぞ。うそなたくみ

右の數語、一時のたはぶれに出たりとおもへど、また意味ある事も見ゆれば寫し出す。

猿蓑集、錢乙州東武行の卷半より末、江戸にて次たる俳諧あり、路通が勸進帳に載たり。

春の日にしまふて歸る經づくゑ	正秀
店屋ものくふ供の手がはり	去來
眉おもきさがり衣のうそよごれ	探志
戀のつくり繪つかうまつらせ	其角
しづかなる杉を拜めば三輪の神	路通
出し入やすきはやみちの錢	曲水
まぎれずに返す芝居のたばこ盆	其角
蟹の面つる家がさびしき	乙州
樂とやはらをしへて五人口	曲水
よめかぬれども日蓮の御書	路通
行月の牛に附たる塩だはら	里東
松にすゝきを二方荒神	芹花
畑のひと口茄子もぎとりて	其角

そ。つくり事な申そ。

如泉云、附句はつけてつけよ。

誰やら云、附句はつかぬやうに付よ。

我黒云、つくとうつるとをあぢはへ。

信徳云、おもしろきがおもしろし。

言水云、木綿布子に冠きたるやうの作なこのみそ。

誰やら云、はいかいは連歌にてもなく、また童戯方

にてもなし。

又云、鶴の眞似して水のみ給ふな。

芝蘭云、はいかいは俳諧らしきもので。

淵瀬云、連歌は連哥らしきものなり。

鬼貫云、口ひらけばみな句なり。

誰やら云、とかくおのれが風がおもしろし。

又云、あたらしきはめづらし、珍らしきはあたらし。

團水云、いづれもの申さるゝ段みな尤。

誰やら云、みづからを下手とおもふ者、聖武皇帝の御時高野山に一人あり。さらに米のたぐひを喰す、常に石臼のみかぶりける。



かりなるものは鳴原の坪 素葉  
 あそここぬひなほしたる戀ごろも 寒水  
 二番煎じは茶の花香なき 莎荷  
 ちる花にさそふて見れど誰も來ず 路通  
 しきりに雉子のほろまうつ朝 飛陰

案るに、猿蓑も勸進帳も、ともに元祿四年の撰なり。店屋物云の去來が附句まで京にて出來て、そのはしたものを乙州持下りて、江戸の作者を催して一卷となせりと見ゆ。はせをもまたそののこりを、伊賀の連衆に繼しめしものとおほゆ。

諸國嘶といふ書に云、初春の歳旦といふ事、慶安二年に長頭丸はじめて出さる。王城の地に在てその冥加を仰ぎぎ、都をとぶくとの事なり。はじめは都の中までの事なりしが、いまは俳諧も國々にわたりて、年々に三ッ物くくと出るは、めでたき御代の色なりとあり。此書寶永三年上木、撰者兩楓子と跋に見えたり。

はせを江戸より許六が方へ文通の中に、當方無レ恙、五句

附点取脾の臈を捫もてい。此脾の臈もみ破りたらんち、始てはいかい流行可レ申ゆ云。又猪兵衛といふものへ文音の中に、桃隣いかゞ相勤ゆ哉。暑氣の節、短夜といひ、會も心のまゝには成申まじくゆ。杉風・子珊心にたがはざるやうに實を御勤可レ被レ成ゆへと、御申可レ被レ成ゆ。京都俳諧師五句附の事に付閉門、俳諧さたひつしりと、蛙に塩かけたるやうにゆ様子、段々拙者口から申上せゆも氣のどく故不レ具ゆ。ケ様の所唯實を不レ勤故と合点をいたし、むさとしたる出合會等心得あるべき旨、桃隣へ御物語可レ被レ成ゆ云。此五句附といふ物、その頃都鄙にはやりたる事にて、いまの世にいふ前句附なり。大和國葛城山下良弘といふものゝ記したる事あり。曰、去ん方治年中に泉州堺に、池島氏成之といふ好士ありし。そのころ河州小山村に日暮氏とやらん、重興之と名乗たる能書有し。此人成之の前句を取、初て六句附といふ事を始られたり。四季の句に、戀にても名所の句にても加へて、六句に十銅宛集め、褒美といふ事もなく卷勝にして、河州の俳友これをたのしめり。是ぞ此道の最初なる。予是を興ある事に

と葉彼句などまでつりあふやうに、心してかくべき事とおほゆ。

勸進帳 是橋が剃髪して醫門に入るを賀すと詞書ありて、  
わが日那 野をこの 野をこの 野をこの  
 はつ午に狐のそりしあたま哉 芭蕉  
しらせばや くらせばや くらせばや  
 この是吉といふは其角が僕なり。年々置かふる僕を、いつも名づけてこれ吉とよぶ。さるはさまくにに名を付かへんもわづらはしとて、新古にかゝはらず、つねにたゞこれくと呼て埒せしといへり。キ角が滑稽おもふべし。

二十五條に曰、花は櫻にあらず、さくらにあらざるにもあらずといふ事、我家の傳受としるし云。許六云、唐朝の花は牡丹なり。我朝詩歌の花は櫻なり。連歌の花は櫻にもあらず、牡丹にてもなし。篇突にいふ、花は賞翫の惣名と註す。花に櫻付る事習あり。なんぞ花の句櫻ならば花に櫻付る事あらんや。茶の出ばな・藍の出ばな、正花たるべしと先師申されき。猿蓑のはいかい、名残の花に櫻あり。是を見あやまりて、正花に櫻をする人も有け

おもひて、同成之の前句を取て和州の清書をはじめけり。次に和州下田村に葦葉といふ法師、此道に妙なるありしなり。京都二條の住高瀬氏梅盛の前句をはじめて取下し、六句附をし次れたり。そのころいまだ京都にさたも無レ之時節なれば、点のいたされやう・脇書等までしどろもどろにて、初心なりし也。それよりして京も大坂も江戸も、諸國ともに此道さかんになりぬと書り。これらはさせる事なきとながら、そのはじめをば聞置べき事なり。

てふといふ詞は万葉集に、ちふともとふともありて、古今集よりこのかたは、てふと詠り。されど葉書にはかゝず。源氏ものがたりは大部のものなれども、一部にわたりて辭にてふと書る事なし。歌は文字數定まりてしらべあるものゆゑ、すべての詞をつとめても、のばしてもよむなれども、詞書はまたその例ならず。近世俳諧の詞書に、てふといふ事を書る人多し。これらはよくおもふべき事にや。しひて雅言を求めて此度を、こたびと書、十余日を、とをまりいく日などいへるたぐひは、前後の



り。櫻、正花にあらず、初心の人する事なかれ。口傳ありと云。今案るに、花とよめるは百花の事にて、櫻をたゞ花ともよめり。但、櫻をさして花とよむ時は、必詞書に櫻と書り。古今集などみな此例にして疑なし。されば花とばかりいふは百花の事なれば、櫻も又その中にこもれるなり。故に櫻にあらずるにもあらずといふは、この意なるべし。さくらとのみよめるは百花の心なし。されば花は櫻にあらずと云り。されど此詞むつかしくいひまぎらはしたるやうなれば、後學のまどひととなりぬべし。許子が説のとき、(數字題) はなは賞翫の物名と註せるは、今の世茶の出ばな・花よめ・花掣などのたぐひまで、正花に用ふる事になり来りぬる。その據をしらすといへども、流俗これにしたがひ来れり。但二十五條の奥書に、芭蕉庵桃青とあれども全く偽書にして、支考が手より出たるものとおほゆれども、いまの世に廣くもちひて、花の論などはみな人の口實にせる事なれば、いさゝかするしおくなり。花は百花をもよみ、櫻をも又花とよむ事、古今集の例格なれば論なかるべし。

明年五月集會の時、内臺の紙を出して、是に一句とありければ、

五月雨や天下一まいうちくもり

といふ句をまうけて、俳諧師になりしとかや。

案るに、宗因句集むかし口の跋に梅翁傳あり。撰者たれともしれず。近世のものながら、よく宗因をつくし、またはいかいの風体をも論じて、おもしろくおほえしまゝ、あらましをこゝに寫し出す。

梅翁傳

宗因は肥後國の人、姓は西山、諱、カッ豊一、俗名次郎作といふ。前の松代侯加藤風虎君の家士なり。寛永九年不慮なるかしこまりに、侯は奥の岩城にさすらへ給ひて後御暇を給はり、始山城の伏水(原)に隠る。往年風虎君とともに釋將寺の豪信法印といふに和歌・連哥の道をまなびしが、今はた世に立交るべうもあらねば、ひたすら月花の嗟歎(ナガサ)を事として、形をかへ名をあらためて宗因といふ。また號を一幽子・西翁・梅翁・野梅子ともいふ。その居を名づけて忘吾齋と云、また向榮庵とよべり。

冬之日 八十歳を三ツ見る童母もちて  
東國の語に、七十三になれば八十年を三ツ見るとはいふ也。さてその老人にまだ母あれば、わらはとはいふならん。たとへば五十二になれる者の、六十をふたつ見たり。六十五になれるものの、七十を五ツ見たりなどいふ。甲斐國などにて常にいふ事なりと、かの國人のものがたりなり。見るとは、他のうへをいふならず、みづからかばかりの老の世を見るといふ心也。さる叢集に、魚のほねしはぶるまでの老を見て といへるも、みづからの衰老を觀じたる意なり。三ツ見ると互に照らしあはせておもふべし。  
老談一言記に云、宗因はもと連歌師なり。よしみのありて加賀へ下りし。四月のころさくら咲てありしを見て、  
さればこそおもひこし路のおそ櫻  
また明年の九月加賀へ下り、十三夜に群會して、去年のおそ櫻の發句の事いひ出しければ、  
花ならば今宵の月やおそざくら

わきて連歌に志ふかく、かさねて里村昌琢の門に入て道の奥をも問きはめけるが、彼門には殊にぬき出たる作者なりき。さればこそ正保の頃西の國處々の連歌の便宜に、浪花の天満に居をうつせしとなり。連歌一代の發句は、西山三籟集といふ書に擧つくせり。

翁、連歌のいとまに松江重頼を友として、はいかに遊ばれしが、作意その頃の人にまさりしとて、都鄙一檀林といふ名目に出たひこの格調シラベにうつしなす。その門につどへる人

重頼も老ては西山のいま風をうつしなして、古風をやゝ忘れにたり。今の世になべて俳かいする人の評せるをきけば、西山の檀林風はあだとなり、はせをこそ心實マコトやかに、調はいと高しや。又云、檀林の邪路、正風に破斥セキせらるゝなど、語をきはめて褒貶するはいかにぞや。俳かいのみかは詩歌の体の代にうつりゆくめるは、ことたてゝ論ぜんも今更めきたり。いにしへ風は、たゞ連歌のなけきくしたる、興識キチにそこはかとなくいひもてたはぶれしは、犬筑波などをもむかへてし



れ。荒木田守武ぞ、この式目のはし二字題はおこせしなり。其後松永貞徳、高き御あたりの命をかしこみて、此あそびをみちしくなしませり。されど發句のたゞめるやうも、附なしたる心ばへも、大かた連歌のをしへにたがはざりし。西山の檀林ぶりも、姿はなやぎ詞うちくつろぎたるのみにて、その旨とせるは梯園のいにしへ風にとさらなる教へはなかりき。いでその頃までのはいかいすける人は、歌・連歌の席にもをさくたちまじはりて、その事かの事おろく心得られしも多かり。くだりての世に、そも我家のはいかいといふ人出て、達磨ほとけの教化、曼情マシヨらが滑稽のとはりに説まじへて、いにしへの俳かいとは百歩のたがひある教をなせしかば、朝ある雲・ゆふへの雪や、隔りて、未はた千里の外なる遊びわざとなりなき。それが詞に、はいかいだによくせば人間朝夕の働をもさとり、天下政教の道をさへあきらむべしとは、いかに狂マカれる教ぞや。さる賢き道は、さる書をよみてこそ學ぶべけれ二字。聖の教をさとらんとて俳かいを學ぶは、なには人の都

まうでせんに、雲なるいこま山の岩根かきよぢて、奈良の都をねり過つ井手の玉水に息つぎて、八十宇治川の板橋ふみとどろかすに似たりかし。翁がはいかいは只連歌のいとまなるたはぶれなりしかば、後の俳かいのみ學ぶ人の見給ひては、あだくしき方にいひそし給はん。かづらきや高間の山に春たつ霞をあはれむより、よしのよおくの櫻花、こせ山のよぶこ鳥、たち花のはなちる宿に時鳥の聲をとほしみ、須磨の菅屋のたびねにあかしの浦の月を見さけ、雪やしぐれや埋火のもとに年のくるゝををしみ、或はあづまの方にたのみし蔭のむかしをしたひ、または西の國の親はらから友がきを戀る心つくしの優なるあはれなるかぎりは、かの三籟集にかぞへつくせる千の句をみてこそ、翁が風雅の誠はしるべけれ。それがあまりのはいかいは折くのたはけごとと見て、さてなんほめもおとしもせむ人はともにかたらまく、俳諧のうへのみにて評する輩は、かくたけたる人のうへはかけてもさたすまじきぞかしこけれ。しかすがによき人の

たはれどは、今の人のひたすら實やうにあはれならんとたくめるよりも、かへつて世の教なるすさびも多かるべけれ。そはとばこそうちくつろぎたれ、心は歌・連哥のまともをさく劣らふべきものか。翁、齡七十八にて、天和二年壬戌三月廿八日に逝去せらる。法名を實省院圓齋宗因居士と申す云々。

いつぞやある方にて、文章法師が眞蹟を見し事あり。詩二首、

新涼寛句風光前 院落清陰竹樹班班ナリ  
笑テ指眼華酣醉裡 漫ニ求ル腹稿懶眠ノ間  
滿擔、山色連ニ長等ニ 一竇泉聲超ニ小關ヲ  
蓮漏何ニ如蓮沼ノ潔ニ 主賓對坐不レ離レ閑ヲ  
竹窗夜靜ニ鎖ニ春霖ニ 微醉幽吟屈ニ老襟ヲ  
灯盡香消テ高枕ヲ臥 却テ知ル詩酒兩魔ニ侵ムヤヲ

伊丹の鬼貫は肝のふとき者なりしとぞ。通稱三郎兵衛といひて、近衛殿の御領の造酒家なりし。かねて近衛殿へも御立入申せしに、或時御殿に御會ありて、何の宮・くれ

の殿上人などあまたつどひ給ふ。折ふし御勝手に三郎兵衛參れるよしを申に、それは鬼貫といひて、はいかい体の句つくれるものぞ。めし出二字題て句申させよなど、まろうどたち申給ふに、やがて御席に參りて平伏す。何にてもはいかいの句申せ、題など得せんかと殿の申給ふ。時に鬼つら頭をあけて御座敷をきと見めぐらすに、御床に土佐の何某が畫る小町の掛繪あり。あはれあの御掛もの給はゞ贊して奉りたしと申に、みな笑ひ給ひて、やがてさし出させ給ふに、御硯こひて、すこしもためらはず筆たぶくくと染て、小町のかしらのほどに先、あちらむけと五文字書て、さてしばしあるに、みなさしのぞき給ふ。其後よく案じて、しづかに筆をとりて、うしろもゆかし花の色と書付て、おそれ入風情してしさりぬるに、みなくめで興じ給ふて、けふの會は此三郎兵衛男にいひかたれぬればいと興なしとて、御會もそれまでにて止けるとぞ。是は浪花の大江丸がものがたりなり。

談林十百韵の序



御代ゆたけき餘慶に、此道甚さかんにおよび、その風俗まち／＼たり。あすか川のきのふの淵にふかくのぞきて、けふの瀬をしらす。今日の瀬をあさくふみて浮洲に首だけはまるも多し。こゝに八九人の佗(原註本のま)の非(也)やみ、久かたの天の御下あらかねの槌音たえぬ鍛冶町といふところへ時々會合して、向後の初心、惡にそまらん事をかなしみ、端々此事をのべて多くまよへるをたすくる其中に、この席をば我等どきの俳諧談林とこそ申べけれなどたはぶるゝよりおこりて、みな人談林といひならはす。この折節、難波江より道の名僧梅翁不斗下向し給ふ。是ぞ幸ひ渡りに船と、江戸の海の廣きおもひをなし、談林にこもるやつがれ、したしみする發句をこひ得て、すでに百韻を興行す。次而おもしろきに、人々發句せよ、十百韻どうなづきあひて、六七座にして終にみだし畢ぬ。談林へつとむる疎學の曰、此十百韻の事、ねがはくはそれがし体の新發意濟度のために板行して見せしめたやと乞。もとより談林のことくさ、辭すべきにあらす。ともかくもとゆるし

つかはす。凡市中に多年よしとおもへるふるくさきものと、今またあたらし過て一句のたゞざる二ツの惡を見れば、水火の二河たり。中に四寸の白道あり。此白道のあかりをはしらむとのみ立る處、談林の法也。見る人こゝを專に眼を付らるべし。

案るに、談林風といふ名は、宗因に權興するとおもへる人多し。此序にて見れば、雪柴等以下八九人の者の集會せる江戸神田鍛冶屋町に在し佛室に名づけそめしと見ゆ。年歴など追て考ふべし。

越後國高田今町聽信寺一向宗に、芭蕉行脚の頃の道服を藏す。地は紬のやうにて鼠色、同く帯一筋・筆一本・墨硯丸形等あり。白染のものはたんざく二葉、文月や・あら海や、又自畫の像上に、分別に花の鏡もくもりけりの句あり。その後支考、行脚の頃此寺に至りて、ことごとく審定の書付をそへたり。彼像自畫のよしなれども、或人のいひしは、畫は外人の筆なりとぞ。

素秋といふ事、連歌の家には習ひある事なるよし、俳か

いには野坡・杉風などが傳書とてつたへたる中に、發句か脇歎の中に他の季の月ありて、四五句めに至り芙蓉などの秋の句出されたる時は、冬にこそぬ秋季を考てたしかにする事なりとあり。さもあるべき事にや。月は折どにあれば、素秋といふはおほかたあるまじき事也。はせを一世の附合におほやう見えす。左に其證を擧。

雪の薄集

陽炎のわが肩にたつ紙子かな 芭蕉

此卷の二折表

行かへりまよひごよばる星月夜 嵐蘭

くんでこかせば案山子なりけり 嗒山

山風にきびしくおつる栗の毬 曾良

十一句め

狼の番して明る夏の月 嵐竹

案るに、杉風傳書に云、素秋は星月夜にかぎるべし。夫、秋は金神、節を按じ、天高く暑退き、衆星の光彩清明にして銀河きらめき、月なき宵も星の光、月夜のごとしといへる事なれば、月の字も天象も影輝

のあしらひの句なりがたき故に、素秋は聯るなり。その余にて素秋あるべきとも覺えず。

雪丸

文月や六日もつねの夜には似す 芭蕉

つゆをのせたる桐の一葉 左栗

朝霧に飯たくけぶり立わけて 曾良

案るに、此表月なし。文月と月の字あれども、月並の事にて月の心なし。されば素秋と云べし。

韵塞

けふばかり人もとしよれ初しぐれ 芭蕉

此卷裏七句め

宵闇はあらぶる神の宮うつし はせを

北より萩のかぜそよぎたつ 許六

八月は旅おもしろき小服綿 酒堂

案るに、これまた素秋ともいふべきか。されど宵やみといふ詞に月の意あれば、八月といひて月の字をあらはして月になしたるよし、古人の説あり。

鄙懐帝



野は雪に河豚の非をしる若菜哉 涼葉

まだ鶯のなききらぬこゑ 千川

門番の寐顔にかすむ月を見て 芭蕉

けさむきそむる前栽の柿 宗波

秋かぜにむしろをたるゝ裏座敷 此筋

虫も雨夜はねざめがちなる 濁子

肌寒く痞のかたを下になし 千川

案るに、是は素秋のやうなれども、月の句よりすぐ  
に秋を附出したれば、素秋とはいふべからず。

右の外に所見なし。此中、星月夜・文月やの二ツ、全く素  
秋といふべし。後人は是らによりてよく考ふべし。

去來抄三卷は疑もなき去來が筆記にて、後世に益ある好  
書なり。往年嵯峨の重厚、遊囊の中に秘藏せしを借受て  
全部寫し取て、予が文庫にあり。世上に刊行せしは、安  
永年中一音といふものに清書させて、尾張の曉臺が板に  
刻みしなり。それより世にひろまりて、その賜をうくる  
もの多し。彼の板行のをり、いかなる子細ありてや、古實

なり。

江州水口小坂町たばこ屋久右衛門、表号李風とい  
ふ人の許に、季吟の眞蹟を藏せり。即、季吟門人

芥船といふ人より譲り得るものなりといふ。その文、

きのふ松尾氏桃青來りて、予に改  
名をこふにいなみがたく、八雲鈔  
のはいかい歌にならふて、はせを  
と呼侍る事しかり。

月はなのむかしをしるのぶ芭蕉かな

とありと、殊に親しき人の語れり。眞偽いかなるにや、  
暫しして後の評をまつ。

増山井四季の詞十二月の條に、岡見すると有て、註に堀  
川百首に、とたまのおほつかなきにをかみすと梢ながら  
に年をこす哉 俊賴朝臣。師走の晦日の夜高き岡にのほり  
て、簑をさかさまに着てはるかに我宿をみれば、あくる  
年有べき吉凶の事見ゆるとなり。と玉とは明年の吉相を  
いふ也云。此説いかゞ有べき。盛衰鈔に、高き處に人  
をのほせて遠き所を見するを、うかみといふ、俟見と書

の篇を除きて上木す。故に流布の本には故實の篇なし。

されば此篇を書加へて全備せしむべき事なり。

浪花の大江丸が俳讎悔に書しは、

牡丹餅や赤小角豆のかたに秋の風

是野作なれば殊によしとはあらねど、此句においては  
等類はなかるべし。いさゝか新らしみをば得たるなりと  
自負して過せしが、ある日江戸の春來が東風流といふ集  
中の附句に、ほたもちの として、その外一字をたがへ  
ずあり。されば後の人句を作るとに、等類の難なきやう  
に思惟すべしとあり。されば昔より幾億万の句あらんに、  
僅に十七文字の中なれば、おのづから等類もあるべき道  
理なり。忠知が、白炭や焼ぬ昔の雪の枝 といひて舉世  
賞譽し、白炭の忠知とよびしよしへり。是らは一人一  
句の作ならんとおもふに、良保が彼枕集に、白炭はや  
かぬ昔か雪の枝 種友とあり。此集は寛文癸卯夏刊行な  
り。忠知同時代とおもはる。是はいづれが先なるにや。  
殊に名高き句に等類はあるまじきに、いかにも不審の事

たり。うかゞひ見る也。それを高き處にのほれば、岡に

て見る心ぞと心得て、人は皆をか見といふは誤也。侯の

字全く岡の心なしとあり。日本記にも間諜また侯ノ字と

もにウカミと訓す。さればうかみといふが本説なるべし。

こと玉は萬葉集第十三、志貴嶋倭國者事靈之所佐國眞

福在與共。契沖師の説に、事靈とは書たれども言靈の義

なり。第五に言靈と書るが正字なり。吾國は言に靈あり

て、いはへばいはふしるしある國ぞとなり。まさきくあ

れは字のどし云。加茂保憲女集序に、万代てらす日の

本の國、とたまもつにことかなへり云。大鑑に、村

上帝生れさせ給へる五十日に、

ひととせにこよひかぞふる今よりは百とせ迄の月

影をみん

御返し

御製

いはひつることたまならば百とせの後もつきせぬ

月をこそみめ

是らを引あはせて言靈の義を心得べし。但、俊賴朝臣の  
歌はいかなる意によりけん、いさゝか解しがたし。後



の人なほ考べし。

又曰、浪花の昌喜が説に、菓木の來年よく熟せんやうにと、いはひてする事ならんと云り。此朝臣、さやうの事をとり出て、上手の口にまかせて詠れたる事少からずといへり。

予わかき時、句讀をならひし師は西野老人也。そのころ古人の詩の解しがたき多くあれば、講説を承らまほしと申せしに、師の曰、詩は必講談をなすべからず。口に出して其意を講すれば、詩は一等わろくなる也。只よく熟讀して、みづから其意のある所を見るべしと也。此論ふかく感ずる所ありて、今にその詞をわすれず。俳諧の句もまたしかり。芭蕉の句の中、初心には聞得ざるもの少からず。是にさまの論辨をまうけて解なす者あれども、多くその意に的當せず。只みづからつとめて深くあぢはひぬれば、多年の後自然に豁然として眼のひらくる時あり。たとへば禪家にいふ大悟徹底に似て、門より入ものは家珍にあらずといふが如し。さて一句の上はたと詞を

えらむにありて、おなじ心ながらつゞけがらにて、よしあしは分れぬべし。大かた理をおして求めるものは其意を得ず。句々に心情をあらはし、また物々の形容を見るが如くにいひなし、山川のけしきはたゞに打むかふが如き作あるもの、皆辭のつゞけがらにて何となくよき句にはなりぬべし。俊成卿の詞に、歌はたゞよみあけもし詠じもしたるに、何となくえんにもあはれにもきこゆる事のあるなるべしと。又曰、うたはかならずしもをかしき節をいひ、事のとりわりをいひきらんとせざれども、元來詠哥といひて、たゞよみあけたる、うちながめたるにも、何となく艶にも幽玄にもきこゆる事のあるなるべしなど、かへすの給ひしは、その理を捨よとのをしへとおもはる。されば句意をとかんとすれば、必其理をいふの外なければ、たゞ吟じあけたらんより一等も二等も下りてきこゆべし。後學のよく工夫すべき處なり。

其角が艶詞録たゞき

唱 哥

うめの兒鬚そのまゝに、むすぶちかひはさくらさく、  
花の菩薩の數くを、ねがふ此身は雲水の、世を墨  
染の色かへぬ。ナムアマミダク

池の蓮の世を簑笠に、きつゝ三河の吉田の君が、と  
めたらまゝよひと夜さは、かりのなさけに衣ヌくれ  
ん。ナムアマミダク

身にしむつゆや朝がほの、松にかはらぬよはひをば、  
たれにまたれてついしほむ、月のみひとりむかしが  
ほ、人のなみだのたねふくべ。ナムアマミダク  
霜のゆふべにねをそへて、うかれ友鳥行さきは、た  
のしき國のつれづれに、かゝる茶の花目ままし草に、  
ひとつまるれよいざひとつ。ナムアマミダク  
この曉の一聲に、冬の夜さへもなくほととぎす、な  
くほととぎすいざきかむ。

聞人ぞ子規なりはちたゞき

壬子冬夜

晋如菊直賢

華晋

菊如

右其角眞蹟、大坂梶木町森三節所持、境の喜齋一覽の處、

晋子手澤無疑云。名号不審、されどもかゝる戯書なれば、時にのぞみて狂名を書るなるべし。喜齋又曰、此文章を察するに、哥舞妓子供などの追善の作なるべきにやといへり。さもあるべき歟。

乙卯

雜

龜の甲煮らるゝ時は鳴もせず 乙州

たゞ牛糞に風のふく音 珍 碩

ある人云、史記の龜策傳を引べしと。また一説に、すべて龜を煮る事なし。されば冬の藥喰を作して冬季なるべし。脇句も枯蕪したるけしきを思ひよせて、牛糞に風のふくとはいへり。第三に至り、はじめて季の詞をあらはして、冬は來てとは云る也と。今按るに、龜策傳の心ともきこえず、また冬の季をかくせるならば、雜といふ字を題すべきやうなし。古人、冬の句なるを、とさらにとばをまけて雜と書べきや。只雜の句なる事は疑なし。はいかといとて雜の句あるも、なんぞあやしむべき。さて此かめといふは、今の俗にすつぽんととなふるものとおほゆ。



新六帖

川越のをちの田中の夕ぐれに  
なにぞときけばかめのなくなり

何を音にすほんなく覽五月やみ 其角

これらを引合すれば鼈ならんとおもはる。和名鈔、鼈、唐音に并列反、魚鼈字、或作鼈和名加とあり。其外、鼈於保加米、攝龜古加米、秦龜伊之加米等ありて、龜の類みな通じて加米といふべし。田舎にてはいまもすほんの事をかめとのみもいへり。句意は只打聞へたる通りなるべし。ひそかにおもふに、乙州一時憤満の事ありて作れるかも知るべからず。但これらも臆度の事なれば、たしかにはいひがたし。すべて意のある處はその作者の心中、後人のおしはかりとはたがふ事あるべきにや。此句にかぎらず、人々の論説ある句ども、大かたは附會の説なれば、うけがたき事おほし。

猿蓑集、文章が跋に、

猿蓑者芭蕉翁滑稽之首韻也。非レ比ニニ彼山寺偷衣朝市頂冠笑ニ云ト。

是は猿の故事ならんとおほゆ。後に、庶幾、一蓑高張テ

有レト補ニ于詞海、漁人ニ云と止たり。これ猿みのといふ事を前後にわけて文章をなせりと見えたり。此猿の故事の出處、識者に彼是問試しに審ならず。しひて按るに、古今著聞集卷二十、魚虫禽部に、近頃常陸國たかの郡に一人の上人ありけり。大なる猿をかひけり。中略はやく此猿他の郡へ行てけり。或人の許に白栗毛なる馬をかひける馬屋に至りて、件の馬をぬすみてけり。いづくにてか取たりけむ、下藨の着るてなしといふ布着物を着て、鎌を腰にさして、あみ笠をなん着たりける云々。又、史記項羽本紀、人或説項王曰云々。富貴ニ不レ歸ニ故郷ニ如ニ衣ニ繡ニ夜行ガ。誰ヲ知レ之者。説者曰、人言楚人沐猴ニ而冠リス耳ト。果テ然リ。項王聞テ之ヲ烹ニ説者一。注張景曰、沐猴彌猴也。此ふたつの事をとり合せてかく書るにてはなきや。僻説ながらしばらく記して後人の批評をまつ。

落柿先生行狀

佐々木尙義

先生、氏は向井、實名兼時、姓藤原、河邊、左大臣魚名公の裔、その先肥州の人、其考より帝都にうつる。世々儒家にして賢徳を以て稱す。かつてまた醫術に達す。天

落柿の記は、芭蕉翁の來也、其後此處に記を載し居る

下の良醫なり。いまの益壽院法印は先生の兄也。落柿舎は嵯峨に在、先生寓居の處なり。往歲、芭蕉翁桃青此處に來て此舎の記を述しよりこのかた、此舎をさして落柿舎と号く。此故に諸友よんで落柿先生と稱す。去來は俳集に載る所の名也。後、洛東聖護院にうつり、幽窗のうちにかけをひそむといへども、春のけはひは東山の風景にあらはれ、月は加茂川の清きながれにうつり、時鳥の折にふれ五月雨の窓をうつ音、夕の嵐あしたの雪、自然に先生幽居の意にかなひ、山水のたのしびを枕として終焉の地とはなりぬ。先生もとより天資孝弟克養純固にして、平居恂々たる儒也。著述の詩賦も多からずとせず。和粹貞諒にして、智もつて偏く察するにたり、小なるものを詳にして、塞蔽のきざしをとどむ。はじめ紫陽に在てひとへに武事を講習し、弓馬の故實をきはめ、御術は大坪式部大輔廣秀が嫡流福山某にきき、和は笠原氏の門にならひ、劍術は安部の何某に學び、共に其大意をさとす。軍は甲州一流の奥をきはむ。其後洛に歸て又薄田某の門に

あそぶ事年あり。八重垣の神法および玉法陣の圖を傳受す。かつ橋家傳來神道の秘奥、三種神器五科十種神籬神垣風水盤坂干滿土金等の諸傳を相承す。かねて餘力あれば古今の人物を論じ、忠義純確なるものはみづから撰て監とせり。もとより風雅の道に心をよせ、よみおける和歌もすくなからず。そのかみ芭蕉翁によつてその道をきき、かりそめのすさび、起居の笑話も、自然に風雅一体の實に出ざるものなし。これによつて貴价公子もそのこと葉を味ひ其績をよみす。四方の俳師、遠き近き當世の墨客者流、才を挾、簡傲非笑するものといへどもその風采を感じ、惇睦、間言ある事なく心服調拜して席下にわしり、此道の先達とす。凡かくのごとく得る事の多く守る事の篤き、文武の才をいただき、貞諒人を感じるに至れども知るもの稀に、あけて薦むる人なし。先生もとより官仕の途をたち、退てもつぱら兄に仕るきはめて恭愛、其家事を治め、内外のかぎりわかち、財用の節を制し、使令を給する、おの／＼その役にたへざるものなし。誠意懇切其勞をゆるべず、



人のかたしとする處、みづから處する裕如なり。いはんや、その子弟・宗族・朋友の間にあるをや。たまく家にかへるの道、農夫野に耕し、私あれば、必その勞をとぶらはざれば過す。隣家比屋の艱苦をとひ、病をたづね、すくふて後やむ。その惻怛慈愛の心しのびざるにあり。命なるかな、秋葉零落し、曉の風をまたず山丘に去がごとく、病あらたにして寶永改元甲申秋九月十日、聖護院の寓舎に没焉。享年五十四。宗族・子弟聲をのみ、寢門慟哭す。遂に葬事を營み、東山神樂岡、北鈴聲山に葬り、先考の兆にしだがふ。

贊曰

先生爲人、孝弟貞誠、事兄竭力、處事必正、有文有武、風雅華英、存思其人、亡慕其名。

芭蕉終焉の時、次郎兵衛が記せし病中日記の切。

四日朝、木節申さるゝにより、朝鮮人參半兩、道修町伏見屋より取。同く包香十五袋取。天氣よし。之道方より世話にて洗濯老女をやとひ、師の御衣裝その外連衆の衣裝をすゝぐ。園女より御菓子并水仙を送る。支

考・惟然介抱。次郎兵衛とても手届かね、之道とりはからひとて舍羅・吞舟といふもの來る。按摩などうけ給はる。今日三十度余に及ぶ。度ごとに裏急後重あり。

右二條は、此抄淨書の折にあひて、塚の喜齋より寫しこせしによりて、幸にこゝに書くはへて筆をとどむ。

跋

先君以靈慧之資、授天地之慘舒、推遷人世之悲歡離合、而收諸俳諧。意匠開於無數幻緣、筆下洩於無盡化境。蓋其性情之真、與時相感、與事相觸、自然雄渾豐潤、使人恍然心醉焉。是以四海騷人、郵寄唱和而乞正者、推以爲一代宗盟。又遇先輩一時觸事、感發之於言、有不可知其旨意之所在者、則必徵之史冊、以迎作者之意、咀其華含其英、究其枝葉根柢、而後止。其餘先輩軼事及簡冊私牒、有足以傳世者、皆哀收而不遺。久之爲編凡二卷、名曰隨齋諧話。謹與家弟包昌包德等、比對校讐、鏤版而貽同志。雖未足盡先子學之底蘊、亦足以觀其浩博矣。

文政己卯仲秋

夏目包壽謹書

包壽印

# 嵐亭誹話

富屋著



(嵐亭誹話)

たのまれぬ哉あすは又、けふをきのふといはるべけれ。そもこのごろと覚えしも、ひととせさき文化九申九月廿五日、秋草をりふせて、いほりのちり立まふべきかけさへみえざるぞうたてき。さるは見しと聞し事ども、ともしびの花きりつゝ、ながき夜すが書集おかれしを、勁齊主人は兼てのちぎりすがたく、其筆のまゝ、それのたくみにまかせてつゞりつけらるゝを、おのれも因あればとそゝのかされて、いさゝかこのはしにかきつくるも、なか／＼のものけがしになん。

心 菴

枯尾華集に其角曰、天和三年の冬、深川の草菴急火にかこまれ。又曰、其次のとし夏の半に、甲斐が根にくらして、富士の雪のみつれなければと、それより三更月下入無我と書けん、むかしの跡に立歸りておはしければ、人々嬉しくて焼原の舊草に菴をむすび、しばしも心とどまるながめにもとて、一株の芭蕉を植たり。と書て、おのづからはせを翁とよぶ事になんぬ。又曰、貞享初のとしの秋、知利を伴ひ、大和路やよし野、奥も心残さず。と書たり。案に、此文の年月よりこと／＼く相違したる歟。其次のとしにては天和四年の夏にて、則貞享元年也。甲子紀行は實に貞享元年なれば、甲斐に遊ぶとしては合す。おもふに池魚災は天和元年にてもありしか。盧栗集の跋にも、天和三年仲夏日芭蕉洞桃青鼓舞書と書給ひ、又集中の句々もはせをとるして、其角みづからも芭蕉の夜と題せし句、芭蕉あるじの蝶丁く見よ などの風流もあれば、元來災ひありて二年甲斐に遊び、其としふたゞび歸り住給ひしならん。芭蕉の号は天和二



年の末なるべし。

賑給 シンカウとよむ。明經道の故實なりと、篠崎維章が東海談にあり。

膏藥 唐の音にして、唐薬とよむ事勿論也。中原家實録には、陽の音にして陽薬とよむべしと、榊原篁洲が榊巷談苑に見ゆ。

ひめはじめ

文來菴が風月帖に、寥松が記憶せし年山紀聞を引て出せり。なを愚考ヒメノメシとあはせてふたゝびしるす。

年山紀聞に曰、資兼王日記明應十年正月一日云、諸社之遙拜之後三獻有之、次看經、次ニ御コソ、次ニ比目始。

海人藻芥曰、公家御膳、飯者強飯也。執柄家等如此。姫飯全分略儀也。但人々依好惡用之。強飯時飯湯也。而ルニ近代姫ノ飯ノ時、チモユマイラセヨト召ス。不叶レ理者也。

按ニ和名集ニ糰糰和名比女。或説曰、非米非粥之義也。とありて、其次ニ別に粥を出して、和名之留加由、薄糜也とあれば、糰糰はひたすらの粥にあらず。曆にひめはじめとあるは、年始に糰糰を喰はじむる事なるべし。

以上、年山紀聞の説なり。姫はじめ、是にて明らか

也。扱このひめのめし、今のタキホシ飯なり。今川大草帟、三本立式の御飯の条に、三本立は姫の飯にばかり御手をかくる也。こは御物くら御物と云ふは、はうをば只まいらせ置までの事也。今時分はかやうの御物をきこしめすやうしりたる人すくなきゆへか。ひめの御物といふは常の飯の事也。下略 ひめのめし如此。按に今の世俗のならばしに、元日あるひは三ヶ日、朝かしぎをせず。前の記によれば、さらに忌ましき事なり。又、男女交會の事をひめはじめと心得たるもあり。尤笑ふべき説ながら、是も久しき戯言と知られて、寛永の俳諧犬子集に、

年おとこするはさほ姫はじめ哉 慶友

其後も糸切齒に、

高安の戀かしもじやひめはじめ 作者 しらす

なども見へたり。

盧栗集の

飽やことしの一巻五十四句あり。もと源氏行にてもありしか、六句脱せしと見ゆ。嘲ぞ黄金は鑄シ小紫ヲとい

ふ一句をはさみて、前後九句焮なり。こゝにて脱句せしとおもはる。

花摘集追善附合の後に、四十こゝのかにあたりぬる日、

五十句にみちたれば、とありて四十八句也。是も又二句脱したる歟。

芭蕉翁門人六感の語といふあり。そのうちに、實なる事去來に及ばず、と書て、

應くといへど敲くや雪の門

此句を出せり。是は翁迂化のとしの句にて、先師の聞給はざるを恨むと、正秀が歎し事まで去來も書置たり。又支考が、

そこもととは涼しさう也峯の松

此句も元祿十四年加州にての吟なり。翁、何とて去來をば感ぜられけん、一笑にたへたる語也。またこの句を、其許と字にて書て、ほとけたる事とあるより、そこもとを貴様・御手前などの詞に了簡をつけて解したる書も見へたり。非也。こゝもとに對したるそこもと也。句意は、老杜が苦熱の詩に、南望シ青松ノ架ニ

短壑。何得シ赤脚ニ踏リ層水ヲ。といへるにおなじ。幻住菴の記に、かの海棠に巢をいとなび、主簿峯に菴をむすべる王翁徐徐が徒にはあらず。

山谷、題瀟峯閣詩に、徑老ガ海棠巢ノ上。王翁ガ主簿峯、菴。と作れり。徐徐、道を樂しみて藥肆の中に隠る。家に海棠數株あり。巢をその上に結びて、時に客との間に飲す。王道人は四方に參禪し、歸て屋を主簿峯の上に結ぶ。嘗て毛人ありて、その間に至つて道を問ふとあり。

墓 春也、又雜。

這出よ蚕家が下のひきの聲 翁

此句、おくのほそ道五月の条に出たれば、夏季也といふ説あれど非也。蚕飼、この頃専らなるもの也。只見る所を先にして當季の論にはかゝはらず。されば曾良も、蚕飼する人は古代のすがた哉 と吟たり。又初懐帟に、友呼ぶ蟻のものうきの聲 仙化 かく作りて雜に用ひたり。

糸櫻腹一ばいに咲にけり 去來



蕉門、花に櫻をかゆるは、此句を始のやうにいへども非也。去來が詞もいぶかし。是も初懷帝に、

三たびふむよし野、櫻よしの山 仙化  
此句を權輿とす。

ヒユルとさへ言へば冷の字と合点して、焮に片づくるやからあり。寒の字の心ならば冬也。

百韻裏ウツリより神釋を出さずと。非也。他門は左も有べし。蕉門此説にかゝはらず。

朝まだき三嶋を拜む道なれば 舉白  
念佛に狂ふ僧いづくより 朱弦

玉敷の御堂は瓦下地なり 普船  
烏に出家三條の音 仙化

榛名なる大夫の御師に一夜寐て 舉白  
箒焚く牛の御前の森の中 嵐雪

行燈 書にもよむにもあんどんなるべし。是とても國音連のたぐひならん。あんどんと書たる、一二見へたれど、板本なれば違へたる事もあるべし。

濱名の橋にあんどんを出す 常之

あんどんとれば雨しきる空 才丸  
發句にも

油月はあんどんけなる光かな 春可  
あんどんの陰にみだるゝ柳かな 松星

夕月夜あんどんけしてしばしみん 才丸  
あんどんを消して引こむ夜寒かな 正秀

三字韻字留は、天和に始りて蕉門の新格也。  
刈しほを告るや早稻のほとゝぎす

土用に入ては音をとどむるなどいふを、させる理屈にもかゝはらず、古人の雅致おもふべし。けにもこの頃まのあたり啼事也。

翡翠 支考が徒に夏は定たれど、蕉門もそれまでは焮也。  
銅蓮の水に翡翠の影下りて 其角

かくも見へたれど、此鳥はいかにも夏季しかるべし。盛夏さかりにあるもの也。

蛸 いにしえば夏なりしとおもはれて、筑波集夏の部に、平等院の僧正行乘、語國修行し侍りけるに、つか

れておほへければ、麻つくりたるほとりによりふして休ける所を馬に乗て過るとて、誰とはなくて言かけける。

あさがけにする夕すゞみかな 國重

是を聞てとりあへず、  
日ぐらしのけさなく聲にばかされて

蛸も蟬も蟬の事なれども、これの國にていふひぐらし、蟬より殊にはやく出るもの也。詩に、五月鳴蛸。此字を訓じてひぐらしの名あれば、夏ならんもことばりあり。

雪村が柳見に行棹さして

此第三をさしあたり珍らしとおもふより、傳受口決のやうに言ふものあり。何事もなき事にて、他門に違ひて表に朱引の句作あるは、祖翁の延寶・天和の格也。

子路が廟夕べや焮とかすむらん 傾婦を蘭の肆にうる 魔神を使とす荒海の崎 などいへるがどし。中の句にも、今や角天地を樽と飲破る 蕉蕉あるじの蝶丁く見よ などもあり。是とても他門の誹諧に聞

ざる事ぞ。又傳受と言て可ならん敷。すべて古格によりて新格を立たる也。ざるをおのゝ一門戸を張り、相傳の祕説とて衆を愚にす。あるは又唐崎の吟のどき、其角・去來さへ感説を申て翁の案に違ひたる事、二子も書あらはしたり。其唐崎も今頃は傳受の沙汰せらるゝやう也。口傳がましきは、支考が徒、あるひは乙洲・木節・露川等數人より毒のながれて虚妄の弘りたる也。桐の一葉と題せる板本あり。祖翁の述作也とあり。とに偽書也。句作の法則・てには皆蕉門古集に叶わず。兩舌の論と謂べし。他門の古き法則の書に出たる事を、爰をとりかしこを用ひたるなれば、却て見劣せられたり。ざるを此書に欺れて、ことごとくしくてにはの教に引用ひたる俳書出たるもまゝあり。かなしむべし。

夕顔や焮はいろゝのふくべかな  
支考が偽作二十五ヶ條に、はと抱へたれば切字にならず、哉難なしと也。抱へ字ありて哉とまりは説までもなし、定りたる法也。さにはあらず。初焮中一、此所に遊びて、と端書あるを見るべし。 薺や扇の骨を垣根



哉 と吟じて其角みづからの解にも、現在過去たしか也と書たると句法同じ。

青葉 夏也 二十五ヶ條に、青葉、夏季にあらず、若葉とすべしとあらはしながら、自集の笈日記に、青葉して御目の雫拭はばや と出たるは何ぞや。おもふに翁も青葉とありしを、そのまゝかの集へ寫せしならん。へあら尊青葉若葉の日の光 へ目には青葉山ほとゝぎす初鰹 へ夕立に青葉がうへの若葉かな いづれも夏景をのべんとての青葉也。蕉門は夏なるべし。

黒雲の折くかゝる青葉かな 嵐竹  
なすび カシの轉語ナス、難し。簾中舊記、女房詞にも、なすび なす とあり。

初茹子や腮の汐のいそがしく 松荀  
萱が軒 萱葺 秣季勿論ながら蕉門は秣又雜也。

めづら見る揚屋く の萱庇 嵐雪  
四方椽なる 萱の辻堂 浪花  
冷麥 其角が  
酒の瀧冷麥の九天より落るならん

繪馬をエマといふも子細なけれど、古人おほくは繪うまと句作せり。

繪原の奥の繪馬たづぬる 仙菴  
繪馬をかくるとし越の宮 魯下  
冶郎の繪馬その紋にしる 其角  
牧の繪うまの時の間も見ん 仙菴  
北野の繪馬花見がてらに 其角  
荒神に繪馬かけたるとしの棚 嵐雪

發句にも  
初午や一町として大繪馬 專吟  
繪馬見る人のうしろのさくらかな 玄寮  
増山の井にも、齋宮の繪馬にエウマの假名あり。さらば砥井山集の其角が文も、時うつるまで繪馬をながめて、とあるも、エウマとよみたるがゆるやかなるやうにおもはる。

梅白しきのふや鶴をぬすまれし 翁  
此句に、林和靖が賛、と題せし板本あり。是は三井秣風にての句なるを、その頃他流の俳士が翁に瑾を付ん

此句に隨ふて夏季も可なるべし。

茶飯 二義あり。善を炊き交へたるは雜也。小大豆・角豆葉よりしてなべての蟲もの、あるひは藜藿・山草・野草、何にても刻入たるも、邊境にて茶飯といふ。是は夏也。

早乙女に替てとりたる茶飯哉 嵐雪  
夕の月に茶飯鼻出す 恕誰  
蟬のから 空蟬 蕉門は夏也。

蟬のからははたらくやうで哀也 句空  
あの蟬やもぬけと成て落所 沾荷  
しがみつく力や残すせみのから 此筋  
陰になけ小野、小町も蟬のから 千春  
折を得て古着ぬぐらん蟬のから 巴山  
空蟬や石の鳥居を鳴捨し 一井

初懷紙の心なからん世は蟬のから といへるは、秣はなれの附句なれば論なし。すべての蟄虫地より出れば、そのまゝに衣をぬぐもの也。死たるからとならば秋勿論也。

とて、詔へりと譏しより、吾が佛尊ぶやから、その言わけせんとて後に苦くしき賛の字は題せしとおもはる。梅に鶴の注文さへあひたらば、貶るも褒るも相互に林和靖との勘定せられしとおほゆ。さうではなし。白樂天が花樓に雪を望む詩に、

偷將盧白堂前鶴 失却樟亭驛後梅

樂天は雪のけしきにけおされて、鶴も梅もどうやらしれぬと也。此詩をすぐに爰へ用ひて、梅の一めんしろければ、居るべき鶴の影もかたち無ひは、盗まれたかと也。本詩をもとかず、直にそれにて、しかも一作つけにてかの山莊の即景也。林和靖に鶴を盗とは、さりとは浮たる雅客たちぞ。翁は詩にはくわしかりし也。其一代の句法、憾慨悲傷にあらざれば、寂寞無爲の外を出ず。是ぞ生涯杜詩を枕にし山家集を懐にし給ひしゆへん也。さるを大顛・佛頂の兩師に參じて悟道深微の句也など、さらに妄也。古池・唐崎、子細なし。道ばた・稻妻、何事かある。高木は風に僵れて、出る杭はうたる。木槿は馬にはまるべし。なま禪學は迷ひのた



ね、なま兵法は大疵のもとひ、悟らぬ人がましなるにや。老佛の常談にありふれたる是らの數句、何の翁が巧ならん。やまと哥・からうたの正しく雅なるにめで給はん人の心からは、誹諧何と歎おとしめられんに、それさへ翁の句よどもは稱せらるゝ事、志情の正しきに至つては、なを貫之をもひそかに高しとはし給ざりけん越人が譏はあり。しからばつとめても學ぶべくぞ。秋十とせ・夜着はおもし・殘夢月遠し などは、打出て本詩あらはれたり。舟に棹さして戴安道をおもひ、柳を掃て郭林宗を學ぶやうなるも又明らか也。是らの句法すべて翁也。俊成・定家の卿にならひ、西行・慈鎮にもとづくは、同じきながら知りやすからんも、またかたき所あらんなれば、深く心に搜るべくぞ。

月花もなく酒のむひとりかな 翁  
先頃ある人、雜の句格はとて、やがて此句の話になりて、扱こゝろを問れたり。もつけの幸ひにおほへて居たれば書てあたへぬるを、つひでにあはせてこゝへのす。

李白月下獨酌詩  
花下一壺酒 獨酌無相親 舉盞邀明月  
對影成三人 月既不解飲 影徒隨我身  
暫伴月與影 行樂須及春 我歌月徘徊  
我舞影凌亂 醒時同交儔 醉後各分散  
永結無情遊 相期邈雲漢  
この酒のみ居たる圖畫贊、はやくもおもひより給ひし腹のうちおもふべし。漫遊雜雅記といふあり。醫人永富鳳輔にかはりて山縣孝臚先生かの書れし也。其文のうちにも、南郭服子の詩における、雪山道人の書における、芭蕉の誹歌における、我常常に坐右に置てこれを見らんとあり。あの人たちの見て高しと定めらるゝ事、秘説の分際にあるべくや。おほく諸子百家により、まゝ一己の案をまじへて、くはだて及ぶべらぬ所あれば也。翁くとなへて虚妄の傳にたらされんより、西行・子美はせめても知れ。  
冬の日集に野水が、雉追に烏帽子の女五三十 といへるに杜國が、我月出よ身は曠なる と、四句去に春

を出したり。常式にはあらざれども、古式より出たる新式也。三句去たらば難あるまじ。況四句去勿論也。ひさご集・深川集などに、夏冬二句去にしたる新格、尤味ひあり。されど他門に對して論すべきにはあらず。鐻の道もしどろに春の來て

金篇編につくりたるは、雪國の山民は、かなかんじきとて、鉄に鍛へて爪ある具を草鞋の下へかけて履て、引廻して結ぶ也。谷をわたり峯をにゆるに踏むるまじき爲也。これをいはんとて金篇には換たる也。常の櫓の句作にはあらず。

雪踏とはいつの頃より書にや。とつと久しき誹諧つとにはや見ゆるに、蕉門には節たとも雪踏とも書たり。まそつと前にも季吟翁のへせちたにやいとすべし盧地口安靜のへせちた草履のおほき濱はた 等の句あり。

古池の吟、臆見を加ふるに、吳融が廢宅の詩に、放魚池涸蛙争と聚。といふより、案をもとめ給也もしもられず。此落句に、不獨凄涼眼前事。咸陽一火便成原。と作れり。燒あとの深川にふたゝび住給ひ

し頃の吟なれば、此感ありしかともおもはるゝやう也。鳶の羽も刷ひぬはつしぐれ 去來  
刷の字、物めかしくて元祿ならず。假名にてなりと書てあれしとおもへど、樂天が喃々トシテ教言語。一々刷ニ毛衣。とあるより、斯もつくり斯も書たりと見ゆ。されどあまりこのもしからず。  
唯牛糞に風の吹く音 と珍碩が雜の脇句は、卜尺が、冬枯の道のしるべや牛の糞 と吟ぜしを學びし也。

何某の家藏、はせを翁眞蹟詠草二卷

獨歩 岩泉  
此土手の筋や柳の片折戸  
くどまりるるは田にしとる賤 岩翁  
暈き日の赤きに鶴の足のべて 乎竿  
氣まゝにやれば旅もなぐさみ 路通  
商の有國くはすなを也 横几  
鼓の師さへもとは侍 沾徳  
十六夜の月迄酒の坐をかへず 遠水  
早稻米のけて置も孝行 尺中







淡路見かけて須磨および鹿  
雪降は塩屋に運ぶ稗のから  
敷ものとりにかへるかごかき  
抱きつつ袖をひかれつ市の中  
湯帽子かぶる顔の黒さよ  
花に酔て餅も喰さず朽木盆  
十日過ても笑ふ山科

石 通 角 船 化 石 船

かつみく〜と尋てその日もくれぬ、と書れたるものは是也  
とて、田字草とかやいふ四ひらの水艸を、近頃かの國  
の人の持來るをこひ得て、もてあそぶものあり。これ  
もかつみいへるにや、いにしへの甲冑・太刀・薙刀の類  
ひに此模様ありと、ある識者の語られき。されどあま  
りに事を好み過て、似もつかぬ説に成行たり。たゞど  
こ迄も菰にて濟たる事也。又、

かつみておしき焔の色かな といへるに  
風にちる野邊のちぐさの花かつみ 後鳥羽院 御製  
これらはいかゞあるべき。とかく淺香のふる事のない

ものなるやう也。  
橘やいつの野中のほととぎす 翁  
句撰などいへるいつもの板本にも見えず。卯辰集に出、  
花ちる里をたづねてぞなくとおもひたるに、いつの  
野中、あはれ深し。橘、加州の地名にあり。

水取や氷の僧の杵の音 翁  
是を、水鳥や氷と書、又、水取や籠りと書たるあり。  
共に非也。山谷が淨因壁に題する詩に、履聲、如、度薄  
氷フツ上ガ過ルガ。催メ粥ヲ華鯨吼ニ夜闌。

當季の詞たしかならずとも、決着の案ならば當季勿論也。  
柴の戸や蕎麥盗まれて哥をよむ 史邦  
稗と塩との片荷つる籠 孤屋  
發句にも

大口にまいるなむせる粟の飯 作者 しらす  
龜のるか鱸のさぶらふ衣川 慶友  
そば切や打て腹だに入らば 宗因  
鶴とばかりも焔に用ゆべし。聖護院道興准后の廻國雜記  
に、

霧ふかし鎌倉山のほし月夜  
あさなく鶴が岡のまつかぜ  
葛の葉の色づく野澤水かれて  
のんどり 春也。のどむるも、あるひは春に用ゆべし。  
のど〜といふ詞も又同じからん。  
のんどりと神垣ひろき宮所 可頼  
のんどりと古き駿河の町つゞき 嵐雪  
のんどりとしも鶴を見る袖 如風  
世の中を觀じのどむる詩の心 可頼  
うらく〜 春也。あまり用なき詞ながら、すつべきに  
はあらず。  
みづく 冬也。猿蓑撰の例に隨ふべし。  
木兎やおもひ切たる晝のつら 芥境  
みづくは眠る所をさゝれけり 半殘  
淡雪 冬也。  
ちらく〜や淡雪かゝる酒強飯 荷兮  
あは雪のとどかぬうちに消にけり 鼠彈  
支考が偽作二十五ヶ條以來、各門春に用ゆれども、あ  
ら野集に隨ふて蕉門は冬なるべし。

耕クガヤレ 雜、勿論也。又、春にも用ゆべし。  
畝立て耕す肩を打休め 梢風  
あけほのや白うを白き事一寸 翁  
一塩に初しら魚や雪の前 杉風

白魚大坂のしろき匂ひや杉の箸 之道  
この句は紛れもなき春なるべきを、炭俵集冬の部に出  
たり。案ずるに、西南海の國には、白うを嚴冬之節さ  
かりにて、とし明てよりはある事なしと。之道、かし  
この風土などの折にふれたる吟なるべし。又、

むつかしき拍子も見へず里かぐら 會良  
此句も猿蓑集秋の部に出たり。是も祭祀の見る所を先  
にして、秋冬の詞をゑらばざる也。此例諸集あまたあ  
り、一概に見るまじくや。さらば千梅が詞もことく〜  
く非にもあらざるべし。又、里神樂、打まかせては冬  
ながら、いつあらんもいふ也。  
宮司 大宮司は格別、宮司とばかりはマヤジとよむべ



し。

官司が妻に夜這するらし 正章  
松の木に官司が門はうつぶきて  
官司が妻に惚られてうき

支考曰、附はかならず一句に一句也。去來曰、附句は一  
句に千万也。場は多くなし、句は一場のうちいくらも  
有べしと。二子の語よく盡せり。支考が語ことに深微  
なり。此語に理ある一ツふたつをいはず、

經よみ習ふ聲のうつくし  
竹深き筍 堀に駕かりて  
梅まだ苦き句ひ成けり  
是に似通ふもの

塔にのほりて消るしら雲  
賣に出す筍堀ておしむらん  
茶時の雨のめいわくな空  
又

羅に日をいとほるゝ御かたち  
熊野見たきと泣給ひけり

是に似通ふもの

綾の寐巻にうつる日の影  
泣くもちいさき草鞋もとめかね  
又

馬に信する瀬田の焮かぜ  
花ざかり掛ならべたる首を見て  
是に似通ふもの

我跡からも鉦鼓打來る  
山伏を斬て掛たる關の前  
又

簑をくむとて寐ぬ渡し守  
火ぶりして歸るおのこは何者ぞ  
是に似通ふもの

雨氣の月の細き川筋  
火ともして薬師を下る誰が婢  
又

耳たぶを削るゝやうに横しぶき  
行儀のわろき雇ひ六尺

是を顛倒したるもの

伴僧はしる 駕の脇  
削やうに長刀坂の冬の風  
又

鳴子おどろく片藪の窓  
盗人につれ添ふ妹が身を泣て  
是を顛倒したるもの

焮をなを泣く盗人の妻  
明るやら西も東もかねの聲  
但し、鳴子おどろくと恐怖の体を、儉惡の

ものと定たる翁の妙所は、野水が及ばざる  
所ながら、附は一場也。

その餘のものも心を責て深くさぐれば、おほくは此論  
を出る事なき歟。

長命丸 今は尾籠なるものゝ名になりて、句にも結ば  
れねど、むかしは虫癖のくすりに此名ありしと見へて  
守武千句に、

腹のいたきもやすきはたもの

きりはたり長命丸やはすらむ

帆ばしらの蟬よりおろす雲雀哉 との其角が句も、例の  
もとめ過たるやうにおもふたれば、  
鳴かけの船の帆ばしら蟬ありて 旅の節都 永 運

秋雨 鐘の音 砧うつ

ともにすまじきは勿論也。されど俗談平話の誹諧とな  
らば、又限るべきにもあらざらんか。前に出せる五十  
韻にも、岩翁焮雨の句あるが如し。鐘のおと・鐘の聲  
は却て口なれ、耳にふれず。鐘のね、野人の常語也。  
尾陽のト枝が句に、斧のねや蝙蝠出る焮のくれ。此  
ね、いかどながら、へまりこ川沓のね高きこゆれば  
あすか井たまへさきにありく、とも聞へたると同じ  
やうなるねなるべし。天王寺の鐘の黄鐘調とかや、十  
二律おとは言ふまじくや。さらば鐘のね、又くるし  
からじ。衣うつ・うつ砧などは正しき詞也。されど正  
しき詞をのみ、中人以下の誹諧におしおほすべから  
ず。支考二十五ヶ條、鐘のね・砧うつとはせぬ事也。  
かねのおと・衣うつといふべし。アリアリ、さればよくし



りてするは、一座の扱ひによるべしと書たり。是又偽作、附會の説也。遠鐘ほのかにひゞき聞ゆるなどは、ねといはんも難なし。砧うちて我に聞せよや坊が妻は衣の有無にかゝはらず。砧は、きぬ板の義也。そのきぬいた、かたばかりにも打まねびて我に聞せよとなれば、砧うつ、論なしと敷。さにもあらず、やはり衣うつ事ぞ。是とても常談也。

初稿紙  
後住女きぬたうちく 其角  
湯殿山本坊興行  
北も南も砧うちけり 梨水

十年の學問を跡へもどりと誹諧せよとは、支考みづからの發明ながら、龍頭蛇尾の傳まゝあるにや。

山路來て何やらゆかしすみれ草 翁

箱根山の吟也とて、いづれの年にや、かの山中に碑を立たる人あり。是は其角が新山家に出たるより心得違ひたるべし。類柑子に匡房卿の、箱根山うすむらさきのつほすみれ、とよませ給ひたるなどおもひあはせて、筆力に書出たる迄の事也。甲子紀行に、大津に出る道、山路を越て、と端書ありて、かしこの吟也。此紀行、

ひ也。帝の字の如き、御にも門にも不嫌と定め給ひたるは識見也。すべてかくあらぬはおしむべし。

鳶に鳶の附句の前句の見やうの一ふしあるはいはず。格は古きによりたる也。翁にもあれ、言ひたきまゝの新格はなき事也。老杜飲中八僊歌の重韻、山谷が七言三句の詩などの珍らしき、前後にもなき事ながら、是また古格のあれば也。さればとて後の作者、ひたもの眞似んは奇ならぬを、未練の風客、鳶にひとしき附句まゝあるも見ゆ。

所を、トコといはんは、一卷一句のさまによるべし。常と心得たらんは非なるべし。

うら葉の柳 鞞の紋 所 氷花

この巻のもとめたる風流也。さればこそ表の月にも、

青空をつく夜になぞへ晝寐せん 擧 白  
かくも言ひ、又、

春もなみだの流れかんぢやう 李 下  
などもすねくれたり。  
錦から來て臺所に付て居る 乙 由

貞享元年八月に江戸を出て、翌二年東海道を下りに甲斐に懸りて四月末歸庵也。箱根ならざる事明らか也。

朝附日 貞徳翁の曰、朝月日と書也。朝附日ならびの岡、など枕詞におけるも、月日のふたつならびておはするといふ事なり。夕附日も同之。皆秋になりて面の月を持也。是正説也。うたがひ給ふべからずとあり。されど新式も限りての説にもあらぬか。賦物の朝何夕何に月日と取よしもあれど、只それ迄の事なるべし。その連歌にも朝附日といふ句出て、面の月外にあれば、誹諧もおもての月、限りて持にはあらじ。

うら枯 又曰、藺・野邊・原・庭などの文字を入る也。うら枯とばかりはせずと。下萌も同じ説也。理りながら、此説もひたすらに連歌により給ひたれば、誹諧には不自在ならん。枯るといひ、萌るといふふたつの名目、外物に混すべきもなし。あながちにかゝはるまじきか。いはど、へとさか哉 海苔明らか也。へ三ツ葉哉 芹としらる。打きこへたらば可なるべし。なべての説も、くらきはもとよりまどひ也。くわし過んも又まど

是もまた山玉の額を打たれば也。ゆへに、

一步に豆が四石八斗 季 覽

みな一卷の風体也。

發句にも

乞食の寐所かゆるやおほろ月 毛 統

彦根の手垂ながら、初句と二の句と詞釣合ひよからぬやう也。

蝙蝠や出所わすれて家のうち 會 友

白雪やよごれたとこが道通り 桃 先

これら其頃一變の流行にて、俗話の諷調也。五句七句のはこび、あるひは一卷のさまにて取捨あるべし。猶、許を、ばかといふも同じ。

竹の子やさてく酒もちつとばか 舍 羅

口ばかで見せておかるゝ祭かな 湖 舟

影法師の笠ばかになるあつさ哉 松 針

さらば煙を、けふといはんも、山東の鄙言とも片づけがたからん。場所により句体によれば、あながちの非にもあらじ。



ねまる

涼しさを我宿にしてねまる也 翁

ある書に、翁といへどもことごとく邊鄙の語には通じ給はず。ねまるを寝る義とし給ひしは、此作の謬也と見へたり。此説非也。翁はおもひ給はずしての作なればこそ、其角ちから艸の文に擧白集を引て、今暫しねまり申べいを、それがしが旦那のえらまからんとて立ぬる。かれがふるまひにつけて、と書て翁この記の詞により給ひたるよしをいへり。涼風、時に颯とし來るを我ものとして、此宿にかりに居るとのこころ也。

這出て落葉にねまる蛙かな 加州ツルギ 跡 松

今川大草紙に、馬上の人も馬よりをりては、弓を擽より少上を、弦を下へしてひつさけて持て、ねまるべし。

二四四

嵐亭俳話一卷、新月菴二世奚疑子做詩話之體例所著也。論議(前)簡明、援据正校、不唯便俳學、其辨乃斷二百年來之滯疑。先生有將傳之于世使覺來裔之志、而草稿纒脫、忽就鬼錄、可爲痛惜矣。先生嘗余之親戚有舊。且余姊有故幼時蒙先生撫養以至于成立。姊聞其凶赴也嘆曰、高恩久不報、幽隨此長局。烏虜哀哉。今茲癸酉春、阿姊遣先生之舊廬、搜遺書於几笈得此卷。於是命余以上梓事。余乃與姊戮力以出其費、以附剞劂。非敢謝覆育之恩也。聊以終先生之志耳。此書未嘗經再校、魚魯豕豕恐亦不少。余素非俳徒、不宜猥加手訂。姑以識歲月而已。若夫是正敢乞諸覽者云。

文化癸酉三月

勁齋主人

勁齋印

古學截斷字論

上下 北元著



總叙

神代の昔より。手爾袁波の道は天然の定りあれど歌の文字の數も定らで。三言四言五言六言にも。おもふ心をよみなせり。其歌の始といふは。伊邪那美命阿那爾夜志愛袁登古袁とのり給へば伊邪那命阿那爾夜志愛袁登古袁とのり給ふ是なり。其後須佐之男命夜久毛多都伊豆毛夜幣賀岐都麻基微爾夜幣賀岐都久流會能夜幣賀岐袁とよみ給ふ是三十一字の歌の濫觴なり。人の代となり神武天皇の御時の後までも。今のごと假名眞名の文字なく只口に耳言つたへ聞つたへし事ぞかし。日本紀十八代履中天皇四年秋始之於諸國置國史記古事とあれば。是より前にも朝廷には史士有て記されしとしたり。其頃も今の假名文字なくて漢の文字を借用ふ。古事記は四十三代元明天皇成姫帝と申奉る女帝の御世。年号は和銅大和國奈良の都也此御時稗田阿禮といふ者。神代よりの事をよく記憶に覺えるたれば勅して阿禮が口より聞とらせ（大）

臣安万侶といふ人。古事記を撰録和銅五年正月二十八日貢進けるよし。同本序に見えたり。凡是まで千四百余年を上代といひ。神武天皇より前を神代といへり。此上代の哥を集録て万葉集と言漢の文字を我國の音訓に借用ひて。馬はいと啼故に。馬聲と書ていとよませ。蜂はぶといふ故蜂音と書てぶとよます。手爾袁波のかもには鴨。つるには鶴と借用のる。擧て算がたし。かく不自由に文字の開けぬ時にだに。てにをはの自然の定は。言靈のさきはふ日本なればなり。古今集までは。てには詞の活此所にひたきとあれど別にいふべしなどいさゝかもたがへるよしはあらぬを。其後の集には歌の上にも。てにをはのとよのはざるが有よしは。本居翁が詞の玉の緒にも擧其外にも見えたり。中昔の頃より手爾波詞の道のあれこれ亂たるは。前々太平記前太平記平治の亂哥の仙定家卿のまします頃は平家の世。保元の春の花壽永の秋のもみぢ葉と物さわがしく。續て源家の世になり。南朝北朝足利應仁の亂。永祿天正の頃迄によりての事也。有難き今となりては世の中靜謐上代にもためしなく。泰平に治りて。四民安堵の思



をなし。各我等念せずして極樂に生れ出たり。恐多も悦ぶべし。恐多も悦ぶべし。往昔靜かならざる世のうち。正しき上代の詞も手爾袁波も家々にかくれ廢たるやうになり行し乎。有難き世になりて開けにひらけたれど。我道の祖翁の頃迄は。今のごとく微細にひらけ有故にや。翁の俳諧に手爾袁波截斷字の事ををしへおかれし梧一葉。支考が古今抄などを見るに。發句切字の事は十八字の品有て。哥にも連歌にも其沙汰あれど。何故と其事秘すれば。意さらしにしれず。只童の心經をよむ心地ぞせらるゝと書れたるを見て知るべし。其の教への目安には。挨拶切中の切無名切心の切玄妙など。いろ／＼に名目をたて。かれはかれにて切。是は是にて切るゝと教へられたれど。二師もしかと心に分明ならざるが故に。一坐の衆評をうかゞひ。猶百世の明監を待と。所々謙退の詞を述置れたり。此事此書を見ておもひあきらむべし。是以祖翁支考其外七部集に有人の句に。てにはのとゝのはざるあり。是等の人の句におきては。曾て誤なしと思ふべからず。一々後に擧て其誤を見す。叔祖翁の世に鳴給ひしは。

外に見しを見た。行まじを行まい。寒きを寒い。あくるをあける。あたふるをあたへる。合するを合せる。敲るゝをたゝかれる。はるゝをはれるの類。又一段俗に下りて。どうする。かうする。さうぢや。なんぢや。めつさうなどんだ事拵遣ふ詞又へねめまはずいやがるへはんなりとへめつたにへひだるき拵。又物の名に竈の火を搔物を。江戸にては。じうのう京にては塘かき。ざるをいがき。ながしをはしりのるる又國々の方言。皆俳諧に用ふる所也。矧や古今集にも甲斐歌とてへかひがねをさやにも見しがけゝれなくよこをりふせるさやの中山此しがとふはいかいしの常にけゝれなくは。心なく也。かひの是にならひてや風俗文選に近江ぶりとてへ驚にきどろはさふいみなべらのうらゝがこと所軒にけよやれ。何れも擧るにいとまあらず所謂俳諧の俗言正例とする所也。又嬉し。久しと言べきを。嬉し。久しと遣ふは一向の誤也。輝やかしゝ残しゝといふべきを。かゞやかせし。残せしと遣ふは詞の活きをしらぬ誤なり。玉川の水におほれ そ女郎花そはと、十八種記高欄のもとに鶺鴒飼するなど誠にめ

貞享元祿の頃なれば。彌世の中治り々て廢れたるを興し絶たるを嗣給ふ御政事にならひて。古へ學びする人出たるは。難波に契沖法師ありて。万葉代匠記を著し。君に奉り。世に和字正濫抄を出す。是假名遣ひの書の濫觴也。續て荷田東麻呂。加茂真淵。不二谷成章。本居宣長。同春庭。前後數有。此翁達は古學の先達。古學といふは。世の私に立たる學にはあらず。正しき考据有事也。鈴の屋翁古事記日本紀万葉集より古今集迄の哥の手爾乎葉を考合せ。詞の玉の緒なれり時代のうつりかはりて。今の世の有難く開けたるをも知らず。芭蕉支考の申されし事のみ。頑に守りるる人あるは。無下に怯き事ぞかし。たま／＼開けたる今の世の考をもて。てにはのこをいへば。それは歌のてにはなり。俳諧には俳諧のてにはありなど聲高に言りいふめるは。愚なるうへにもおろかなる本性なれば論におよばず棄置べし。哥のてにはは俗言を一ツも遣ふ事なし。俳諧には雅言俗言ともに遣ひて。自在なる物なり。されば祖翁の著されしといふ梧一葉に。切字十八字のかなけりらんといふも皆雅言ならずや。此さましき見物なりけらし。鹿島記に誠に愛すべき山の姿なりけらし。共にけらしといふてにはかなはず。なりけりといふ。けりを延てけらしと遣ふとならば例もなし。文にも不叶又支考私によしと振舞に馬ではゆかじ雪見哉。此書は本文生挽哥に。ことしはいかなる年なればか。かくあぢきなき人をのみ見るらん。らんとなくて是より誰が身の上をや。鳥もなくらんと。はかなみいひしが。去來はいはるゝ人の數に入て。かくいふ我斗残り居たらん。こつぐか。のこ沖の船の友を失ひて。老の浪のよす。るかたなき心地ぞせらる。あはれとは思ひけ。驚くほどの悲しさにはあらす。かたなきとせねば。とのはず。よするに何なり。此所は支考が自にしていはるゝ所なれば。よるといふべき信也又心地ぞせらるゝとせねばならぬ。なるをせらるゝはす。印は。てには替たき所なり。是等はてには。詞の誤也。前にいふ雅俗のたがひは論におよばねど、詞の活の誤はよく學んば紛れ安し。一向の誤と言は發句詠ほどの人にはなき事ながら。やゝもすれば名ある人のうへにも有事なれば。本文に擧て其一二を見す。てにはの上にては芭蕉支考とても誤は誤なるべし。抑俗語を正例とするうち。なるたけはいやしき詞を遣ふなと梧一葉にあれば。



芭蕉翁の流は雅言の方を多く遣ひて。俗言のかたはすくなしざるを心得ひがめ。俗言を一向にきらひ。句のすがた艶にせんとて。連歌やら。俳諧やら。何やら分らぬやうになりたるも。又俳諧の邪道といふべし。比論ていはゞ。佛の道は八宗九宗とやらに分れて。浄土は浄土。法花は法花と。其教化する所の趣は替りたれど。其説所の言葉てにはにおいて宗旨はなし老子孔子の道も同じ。唐土の詩をよむにも。我日本のてにはをいれてよまねば其意解せず。言葉の道は歌連歌俳諧狂歌舞句女わらべの赤本。うたひものには。神樂催馬樂謡淨留理下まのはやりうた。いろくさまぐ高く低く品替れど。てにはにおいては只ひとつなり故に天疎人等。俳諧には俳諧のてには有といふ事をやめよ

文選盧子諒詩曰。崇臺非ニ一幹。珍裘非ニ一腋。いふ心は家を建るに一本の木にてはたゞす。皮の衣も一疋の狐にてはならぬといふ事なり。今著はせる此抄も我一人の力

俳諧古學臺表抄

一名切字論

檀之本北元著

芭蕉翁著述梧一葉といふものあり。いづこの人か偽作せる。上の巻は俳諧の式目を擧。下の巻は截斷字手爾平波を教たり。段々に寫し取たる物にて。殊に予が持る本は寫し誤多き惡本也。寛政八年芦の丸家藏板二冊世に行はる

梧一葉 古寫本

芭蕉庵桃青著

句口にかなひ。心にも叶ひ侍れば吟心より來り。心吟よりに行と古人も申されける也。されば猿丸太夫哥に、奥山に紅葉ふみわけ啼鹿の聲きく時ぞ秋は悲しき。ぞといへるには。えかせてねへめれの留りの掟なれども。此哥きと留りたり。心と吟ひとつになりてかくつらねたれば。何の子細かあらん

と云れたるはいかにぞや。此哥はぞとばかりてかな

もて。私に推あてがひあみなす書にあらず。前にいふ先達のいろく考おかれし書籍を繰返し。猶道の委しき人にもたづねもとめて編る抄なれば。俳諧古學臺表抄となづけつ

一名切字論とせしは名を呼に安からん爲なり

天保五甲午年六月

檀之本北元

凡例

- 一行より上より書下したるは。擧る書の本文なり
- 一字下て書たる發句は。本文にある所の句也
- 一又一段下て書たるは。此抄の論なり
- 一〓点掛たるは。論に引所の發句古歌。又は詞のわかちなり
- 一〓〓〓かなげりかくの如く字のかたはらに点掛たるは。其所によりて要とする文字の。見安からん爲なり

しきと定りたる格にて留たるをいけせての掟などいふめるは。一向にてにをはの事は。しらぬいひざまなり。文の内世の中の俳師のことを。今世首俳師といひ。其外俗俳師と言たる所も有。翁の口より人をさしてかくの如。今の世の自僭といふ俳師のやうに拙くのたまふ物かは。是にても梧一葉は偽作なることを知るべし。此書有也無也の關は。支考が古今抄に言れし如く。祖翁の夜話を后に門人誰か書集て翁の著述とし。世に残したる事あきらけし。上の巻のうち。五尺の菖蒲夜の柱 乞食袋 人の兒はせ。其外式目の事はいはず。此抄はてにはと言葉のみによればなり

一手爾於葉の事

手爾袁波の乎文字を。於と我古寫本にあるは全く寫し誤と思ひ弁しを。あしの丸家の藏板にも於の字を書れたり。こは古寫本のまゝを書いれし物か。其後寛政九年の板本白雄寂葉にも於の字をかけり是も古寫本の儘とおもへど。此抄を補へる拙堂老のいかゞ



おもはれけん直しも改めず其まよおかれたるはいかにぞや。是を見てや。初學の人の今にあやまる事多

一切字は かなもがな やしじぬ はね字 かけり

截斷字くすつぬむゆるの事はいはで。斯十八字とをしへられけん。此内やかよせれ

へけいかに杯は切字ならで。詞とてにはなる物を總ての俳書に切字と教へたるは。大かた此十八字

杯の文字を一句の内に入だにすれば切ると心え。やといはれぬ所をやといひ。かと置れぬ所にかと

置。殊にやの字は遣ひ所多きゆゑにかといふべき所も。よといふべき所も辨へずやとさへいへば切ると

と心え。切や疑のやの差別もなく。宗匠兒する人までも遣ひ誤る事多きはいかにぞや。ひとつく句を

擧て初學の爲に見せんと思へど。まがつひの神の祟も恐しければいかにせん。とにかく此誤多きは。此

やの事はくさん多ければ別にいふべし

一し 古來三世のしといふ事

此名目も弁べし。未來のじといふはずの將に然する詞にて。ずの轉用なり。見せじこゝろを。みだり

一人をよせじ物をやと。躰言へも續く詞なれば。しとは違へり。此事は古今抄にいへば合せ見るべし

一けり 落着の詞なり

へけり 下に置ときは。中七文字の末にの字を置てへけりといふべしへけりへけらしへきけりの反きなり

へけらしはらしの反りなり皆けりと同意

とあれど皆捨べし。をだ巻にも此事をいひて。へ初夜と四つあらそふ秋になりけりへ荷ひ茶屋も花見

る人になりけりといふ句を引て教へたれど是にも限らじ。の字との字に意の替る事はあれど。てに

はのととのひにかはる事はなし。又阿佛尼のけりと

いふ事あり吾妻問答爲 相卿之母 九月晦日會連哥のほくにへけふはや秋のかぎりになりけり。同十月朔日の會にけふはや冬の始となりけり とあり。是もにと

梧一葉 有也無也の關 貞享式 新式をだ巻 芳山が曉山集 白雄が寂しほり 或家の抄。是等の書の教のみ真心に用ひて。其余は大かた是は是にてよからんなど。私に推量てよしと定め。てにをは。詞の道は。さまん入組て紛らはしき事あるを露しらで。只輕はづみに鹿くおもふから今の世に聞ゆる人達の文章發句にも誤多ある事ぞかし。へてらし見よ本末むすぶひも鏡三くさにうつる千の言葉をとへ鈴の家翁のをしへ置れし本末結ぶ事も三くさにうつる事もしらで。只私によしと定しよりの僻事也

一かな 切字十八字の事

ふるむくしつ の留りにては哉と留らず。落付ぬ物也

此説は捨べし。浮哉といふ事なり。奥に生得の哉といひたるぞよき

一や 古來七ツのやといふ。へ切やへ中のやへうたがひのやへはのやへすみのやへ捨やへ口合のや

中のや 切やといふ名も古學の方にていふとは違り。

とに意こそあれ 是を二句共にけりと。あれ 扱けらし 此の語にあるはいかさたづぬべし けりき此三ツの事は此書を始曉山集にもいへり。其をしへたるは十七字の内けりと遣ひて。一字あま

るときはきと遣ひ。一字たらぬ時はけらしと遣へよといひて。同意のよしを教たるはいかにぞや。き

けりけらしと遣ひて三ツながら意の替る事は知らずやけりは來ると書て言定 けらしは 推察 きは現在と過

去の二品あり又次にいふべし

一が

が切字にならずさりながらへ見しがへきししがへいひしがといへば切なり

傳書のをしへといふにはいと鹿し。へ見しがへ聞しがへいひしがは。上に過去のしの字添たれば。只の

がとは異なり。しがといふは。へ見しがなへにし哉の上下を省きたるものにて願ふ意なるもの也又へ見

しかへ聞しかと。か文字清てよめば常の哉なり。又しかと清てはこそその結詞なり。俳師のほ句に作るは多く此格に外てもをといふ辭にあたりて。下に詞



をふくみ切るゝ格と。又上のしの字過去より受たれば。俗言たの字に轉用してたがといふにあたり。然るを初學の輩もとの意をしらす。しがとのみ言て截斷たる心に濟しめるは拙わざなり。又しがと濁と。しかと清て讀とは意も替り有事なれど。今の人の句を見るに多くしがとのみ濁り。しかと清てよまねばならぬ句も。口にはしがとにござりてよめり

一はね字 へ一字ばね 二字ばね 三字ばねと。いふ事有へきん 見んの類一字ばね 咲らん 縫らん 別つらん 右へうくすつぬむゆるに通ふ二字ばね也 やらん ならん へらんを三字ばねといふ 皆切字也

一字ばね二字ばねといふは中手早き教へかたにてよし。三字ばねは然らず。やらんは疑のやより受たる也。又やらんをやらんといふも有。早乙女に結びてやらん笠の紐 なり。ならんはなりなるなれの將然言より受たるなり。けんてんなんも同じ。るらんは截斷言辭より受る二字ばねなり。總てんといふは活く詞の將然言を受て。連用連躰截斷の三ツ

鳥梅櫻等の景物などを置てよし。是もならひの切字なり

連歌 一聲は思ひもあへずほととぎす  
俳諧 御簾からおもひもよらず雪礫

是等のとは取にたらず。別巻にいふべし

一よ かるき下知なり又かれよこれよと片付たる下知なり

よの字かくいひてはあらし。よはやの裏なりやといひてもよしと思はるゝを。よといふと有。義利替れり。恨みずや 思はずや いふや 聞や 笈士や 七夕や 此類いくつも有べし。是を呼出しのよといへり。又てよとよよな そよなども有へえけてねへめれへいきちにひみるの下によ文字を添て皆下知なり。

別に輕き下知もなし

一れ 下知にもおのづからの心にも。雪もこそふれ自れたど自しめりふれ下 急でかへれ下

氷れたどはいかにも自。氷らすれといへば他なり又氷とくれど 氷とけけんつんといへば自にて氷とけ

をかぬる詞也

一らんとはねいにはやと疑いと古來よりの法なりらんは察する詞。疑の詞とのみ思ふは。少したがへり。上に疑の詞のやいつれいかにたがいくかなどの詞あれば。それに引れて疑の詞となる。なきときは只察する詞也。察するとうたがふは些の違有

一つ

へ花は見つ 鶯は聞つの類なり。心なういふべき切字にあらず。鶯は聞つ。何はと外へうつる時の詞也。つるといふるをつめたる也 花咲ぬるといふるの字をつめて。花さきぬといへば則切るゝ心なり。聞つるといふるを添れば語絶せぬなり。いづれも下のるをいはざる所にて切字になるなり

見つる 聞つる 咲ぬるとつづく詞も。そのや何よりかれば定りたる結びにて切るゝ也

一す

古來まれなる切字なり。五七五の留りに置字なり驚たる詞。切字の下に心なき字を置ては留らず切れず月雪花時

どど 氷とかでぬましといへば他なり。此のい詞によりて自他入替る也 集と散と寄と放と也 よくせずんばまざるべし。以下せ へけも皆同じ

一こそてにはれといふをあましたる作例

しばしこそ人も影せし花ちりて かげせしなれ

道あればこそ雁の來る空 空なれ

しばしこそ人も影せしと過去のしにてこそを結び。

花ちりてと遣ひたり。影せしなれと意をふくむにはあらず。

右切字十八字也 初心の人あやしき切字用事なけれ。上工のうへは心が句になり。句が則心なり。此故に切字なくとも語絶するなり

あまり大まかにをしへられて初學の爲にならず。あやしき切字を用る事勿れとはいかにぞや。切るゝか切ざるかはしらねど。大かたこれにて切るゝで有うと推度て遣ふ人もあればなるべし。又上功のうへにては心の句になり。句が心になりて切字なくても語絶するなりと有ては老俳にも初心にも只ほんやりと



してはきと分らず。かの十八字は皆截斷字の目安なり。大まかなる教により遣ひ誤ると多し。や截けりしぬなども上のかゝりによりてとゞのはず。又つづく詞も上のかゝりによりて切。又上のかゝりにかゝはらず切もし。續きもする辭あれば。是を切字と定る文字なし猶次にいふべし

一に留

現在有過去有 おもはぬに現在 おもひしに過去

是はぬとしにこそよれにの字のあづかることにはあらじ

一過去のしにて留る事法あり。過去のしは。下に詞なくてはせぬとなり。近來の人の句を見るに。過去のしにて留たる句あり。一向にせぬと也 其句に

見ぬうちに花に鐘鳴日の暮し

此句を擧。切れぬとて難ぜり。此句はのとかゝり過去のしにて切たり此頃の人は此格をしらでかく難ぜしか。此は紐鏡にいふ春の日秋の夜などいふ常のとは異なり。鶯のなく。月のかくるなどいふの

にて別なり

一むかふしは留る也 松青し 雪白し 言葉嬉し  
嬉しとはいはれぬ詞なり。よく人の誤る所。此抄の文の中に。片輪の噂など好みていふ事あし。浮哉とてあし。此格を見てや名高き人の句にも。嬉し。久しと遣ひたるも有。是は詞のはたらきといふ事をしらぬひが事なり

一あなはかな あなたうと うたて あやな  
是もやノしをいへば切れず

かくあれど。や文字を添れば歎息にて切。しを添ふれば現在のしにて切なるべし

一二字切三字切といふ名あれど一字ならでは切字なし上の切字やくにたぬやうにする法なり

風すゞし何とてもてる扇かな

此かなばかりが語絶なり。上は問答なり

此句作なればやはりかなとは留らず

一浮かな 光る哉 見ゆる哉 開く哉 匂ふ哉の類あし

此事は前にもいへり。捨べし。浮哉とてあしきは

幻住庵有也無也の關

古寫本

芭蕉庵桃青著

元祿の新式ともいへり

序に曰わかし花の本に於る神代八雲の和哥を始中虚を實に綴るを是とし實を虚につづるを是とす。實を實といひ虚を虚と顯すも俳諧の道にあらず。正風は虚實の間に遊んで虚實に止らず。是我家の秘決也中口中に曲を食るとなけれ。心中に曲を捨る事なけれ。口曲は他門にして。心曲は正風也

月を柄をさしたらばよき團扇哉 宗鑑  
青くとも木賊は千々の見物かな 文鱗  
あの雲は稻妻をまつたより哉 はせを  
是らは七部集の内の句なれど浮てよろしからず。此外へ大廻しへ玄妙切へ二段切へ三段切へ押字へ見ゆ留は有也無也の關 古今抄 貞享式 蓼太家の抄など大かた此梧一葉より出たる物にて引句の違たるはあれど。一ツとなれば次の有也無也關に擧て見す。註の違たるは梧一葉はへキリ 貞享式はへ古と合印を付て見す。是等の書十に四ツ五ツ僻が事有故。今もほく文章のてには詞のあしきを常に和學家より笑はるゝとの多かり。されど片田舎の人の言事をきけば。俳諧には俳諧のてには有など強情をいふめれど。和哥の手爾波俳諧のてにはとてふたつなし。是日本のてにはなりと祖翁も申され。支考が古今抄に百世の明監を待といふとを幾所も書したれば。是にても悟べし。かく同じ事所へにいふをうるさしとなおもひそ

此文によりてや芭蕉翁自正風を立るといふと諸書に見えたり。案するに正風正門正流といふは。祖翁が門人の心より師を敬いて言る名にて。蕉翁自ミツカラ僭して正風正門と申されしにはあらじとおもへど。此序實に蕉翁の自作ならんにはいかゞならん。故に松屋与清が俳諧歌論に。芭蕉翁に一棒をアチ与たり。ある人それに答へしかどよしとも聞えず。又是等の人松の家ノの學にもしかず。されど今芭蕉翁の俳諧四海に廣りて熾サカんなれば。たとへ邪風なりともいかでか松の



屋がいひごとに降参すべき。予がおもふ今も正風正門といふうち。蕉風蕉門蕉流などいふもあり。かくいは何の子細かあらん

發句切字の事は十八字の品ありて。和哥にも連歌にも其沙汰あれど。何故にと其故秘すれば意さらにしれず

支考が古今抄に貞享式といふは。前にいふ梧一葉有也無也の關をあつめて貞享式と号け出しよし同本に見ゆ

昔より切字の事は十八字の品有て。其ゆるをあかさねば。童の心經をおほえたるやうにて自己に分別するにあたはず

かくの如く此頃は事開けぬによれば也。かくいへるはかの十八字のかなもがなしじぬかけりなど。總て十八字の切字の其解をしらす童の心經を讀こゝちすといふめるは。かなといふ義利も。けりの譯も。もがなしじとは何の事やらしらねども。斯いへば品切字になるところえしものなりかし。今の世にて見れば蓮二坊はづかしけもなく快き事を世

に書残し、物とおもはる。かなもがなけりなどのくはしき解は。初學の人にもよく分るやうに次にいふべし

挨拶切

いざらば雪見に轉ぶ所まで

挨拶切は他に對するの一ツにして。挨拶を天とし、挨拶を地として。いざらばは天也。雪見にころぶは地なり。此類の上下の詞、主客の隔を以て一句の切とす。是あいさつなり

此句の截断とする所かくむつかしくいひては初學のをしへにならず。いざらば雪見に轉ぶ所までと動かぬ詞にて留りたり。切字といふは。彼十八字ならで。くすつむむるが截断字なり。此文字が切たりつぎきたり。遣ひやうによりて自由に活く。早く元祿頃の臆度のをしへを棄て。正しき古學にならふべきなり。扱此句は曠野集員外にいざゆかんと有。かく有ては切字の論なけん。士芳が赤双紙にいざらばと後に直されしと也

自他切

人に家を買せて我はとし忘

此切は全く新製なり。貞享式には引句たがへり

いかに蕉翁とても切字に新製といふ事の有べきぞ。

此句ははとかりて。年忘と動かぬやうの詞にて留りたり。忘と活く詞を。うごかぬやうの躰言にいひなして遣ふ一格。何の子細もなき事なるを。天ぢやの地ぢやの新製ぢやのといふめるは。無下につ

たなきいひざまなり動かぬ詞にて留る哥の例を引て見す。あら玉の年立かへるあしたよりまたるものは驚のこゝろ又文字をへて。さびしさはみやまの秋の朝ぐもり霧にしほる。横の下露。かくの如はとか

ればはの字の意の下迄至るなり。はの字に限らず。總て首とする辭のてで。をばはものものと。へ。是等を一ツに合せて。紐鏡に徒としるせり。

續く詞の首たるは。ぞの疑のやなど。なぞ。たれたが。いかに。いかに。いづれ。いづら。いつ。いく。此

るを合せて一ツに何としるせり。以上の文字を辭の本とも首ともいへり。是等の辭を上にて置て。下

を結にかゝはらず。動かぬ詞にて結ぶ一格なり。こ

は元祿のをしへにいまだいはざる所。不思議にもお

もふべけれど。此格を遣ひながら此格の事を知らざ

れば。挨拶切中の切心の切無名切玄名。

口傳秘授などいひて初學の用にたす

中の切

猫の戀やむとき。閨のおほろ月

猫の戀止時は言明也。閨の朧月は立春の後にして。物と物との七文字の中に。心言葉ともに替るを。中の切といふなり。貞享式引句同じ和哥にもかゝる句讀有て習ひとやらん有識の人に聞傳へ侍りき

是もむつかしく言て初學の爲にならず。只うごかぬ詞にて留りたり。此抄にいへる挨拶切自他切玄妙

等の引句に。印付たるくすつむむる名詞の所に意を含め切るものと。續く方に用ひて。下を躰言に結ぶとの二品有。そは句に依て辨ふべし

心の切

秋風に折れてかなしき桑の杖



註取にたらず、<sup>古</sup>貞享式には追善の格として、この句かなしやとも歎息のやを用べけれど。追善は情を先にして平話の儘に演たらん。そこを俳諧の實なれば是の句格を鑑にして切字の有無を論ぜざれ

此るる皆かくのどいひて。しかと留る所の自己にも知れざれば。いろ／＼あやなし書ちらして用に立ず。是全く十八字の切字といふ。其切字句中になき故。さま／＼なづみもてあつかひていへばなり。是は支考の申されし如く。悲しやとありてもよき所なるを。かなしきとつゞけられたれば。是もによりかゝりて。杖と動かぬ詞にて留りはすれど。格別意のふくめるとも聞えざれば悲しやのかたまさりて聞ゆ。又追善の格と一格立ていはれたるもをかし。悲しなとあらばよからん

<sup>古</sup>わづらへば餅さへくはず桃の花  
眉はきをおもかけにして紅の花  
老の名のありとも知らで四十雀

煩へばの句は喰すにて切。紅の花の句はてよりかゝ

り。四十雀はでよりかゝり。動かぬ詞にて切たり。初學の人やよもすればて文字にて切るゝとおもふは違へり

押字

何の木の花とも知らず。句かな

押字はのとの狭き紛らしき切也。是は上にて押。下に浮。一句切たり。貞享式、何の木の花とも

前にもいふがどく。すはぬの轉用。しらぬにほひ哉共いふべきを。しらすとして深き意をこめ。歎息なり。源氏桐壺命婦の歌に、鈴虫の聲のかぎりを盡しても長き夜あかすふる涙哉。哥は文字數あれど。ほくは文字すくなき故、何の木の花とも知らずヨキ、句哉と。稱歎の辭なり。此句は皆人の知る所、何ごとのおはしますかはしらねどもかたじけなさに涙こほるよ。西上人の歌より出たり。又此哥は中庸の文末に文王の詩を引て。天下之載、無聲無臭、至レルカナ矣、是より出たりと

抱字

夕がほや秋はいろ／＼の飄哉

右のやは切なり。しかし五文字のいひやうふがいなくして不切。秋はとはの字にて抱へたれば上のなり。彌きれず。よりにかなと留りたり。哉はうき哉にて不切、一句分るべし

かくのどくやを切といひ。又不切といひ。又浮哉といひ。一向にわからず

<sup>古</sup>此やは疑のやとしるべし。秋はと句を切て。下に心をことばるなり

支考が此やを疑のやといひしは。いかに物に狂ひけん殊にをかし。此や、哉の事は不二谷が手爾波抄にいへるをよしとおもはる。いかにもやと哉の心をよく辨へてのうへはくはしく分るべし。何丸が七部大鏡に。此哉を未來の哉といひしも珍らしき説なり。前にもいふやもかなも何ゆるゑにと其譯しらす。童の心經讀如しといふ心よりは解しがたき管なり。此や、かなの事を具にいはずといふはもと切字にあらず。嘆息にて切也。歎息といふは。嬉しきにも。悲しきにも

も。よきにも。あしきにも。月を見ても。花を見ても。何にもかにも。物の至極したる時の事を歎息といふ。扱此夕兒やのやは歎息にもあらず。總て此類の夕兒や、明月や、白雪や、梅咲くやといひて。たんそくになるも有。又ならぬも有て紛るゝ事有よくせずんば有べからず。此夕兒やのやは。や文字の本義なり。成元がいへる。やは内のもやうの他を添せんとすれど。あははざる事を思ひ入るゝてにはなり。夕兒のとしてもよき所を。のにては内のもやうの付そひがたきを。おもひ込込にはかゝらぬ也。かくいへば初學の輩は蒙朧としてわからぬやうに聞ゆれば。予猶もくはしくいふべし。夕兒の花を見れば皆同じやうに白き花なるが。秋ふくべとなりては。長きみじかきいろ／＼の象に變るといふ事の。外の花にはあらで。此夕兒にのみあるといふ心を。かく永といはで。只やの一字にこめたるてにはなり。是を成元が他を添せんとすれど。あははざる事を思ひ入るゝてにはといへり。夕兒のやの字、截斷切ざるの



論にかゝはらず。秋はいろ／＼のふくべになる事哉  
といふ心なり。是にかぎらず。すべて上の五文字に  
元日や、明月やと。題よりうくるや、文字には是と  
歎息のふたつ有。心すべし。是やの字の正義なり。  
猶此事は饒舌録の所に言は合せ見るべし

無名切

咲みだす桃の中よりはつざくら

無名切は一句の立所なし。何を切字ともしれずして吟聲  
に切あるを。無名切といふ

是も咲亂す桃の中よりと躰言へつゞけて。初櫻とう

ごかぬ詞にて留りたり。吟聲に切有などいふめるは。

取所なきいひどなり

四方より花ふきいれて鴉の海

明月や花かと思えて綿ばたけ

家はみな杖に白髪の墓參

此解もおほろ／＼として前に同じ。前の二句はてよ  
りかゝり。家は皆の句。はの字下までいたりて。墓  
參と留りたり

玄妙

春もやけしきと月のふ月と梅

赤く日はつれなくも秋の風

玄は玄也。妙にして心も詞も及ばず。詩に觀見庭前梅  
与松ならべ返してよめる心なり。是玄妙也

むつかしくのみいひて是も用いたす。始の句は同

じく上より言つゞけて。月と梅と結たり。此事元祿の

教にはいはず。赤くといふ句は。つれなしと切たる

を。つれなくと詞を活し。もと遣たり扱もの字は

切字にあらず。歎息にて切ともなりやの字なども切

字にあらず。歎息にて切るとは同意也。猶此外

にも歎息にて切るゝ文字あり。後編にいふべし。但

し是も夫もなど遣ふもにはあらず。此もは我おもは

ぬ事をいひて我おもふ事に思ひよせさんとする心

なり。故に歎息の詞となるなり。作者はかくまでく

はしき筋を知て遣はれたるにはあらねども。我日本

の人が。我日本の詞を玩ぶ上から假令知らずもよく

叶ふとの有ものなり。今の初學の人の言へるはくに

袖の花にむかしを忍ぶ料理の間

桐の木に鶉なくなる塀の内

袖の花の句はしのぶ事と意を合切たり。此抄の註はくだ

くしければ畧す。古今抄には

へうづらの句は田莊の酒屋といふ題ありて。こなたより

其家の富貴を思ひやりたるやうなりとぞ。然ば五文字に

句を切て。桐の木やともいふべけれど。さいへば桐の木

ならん。是は桐にも鶉にもあらず。田家を稱するほくな

れば。鶉なくなりと句を切て塀の内を隔つべきにもあら

ず下畧かく長くと斷れたるは用なし是も

を廻し

青くても有べき物を。たうがらし

米くるゝ友を。今宵の月の客

心に赤くと見る余情を。をの字に含て下の轉ずる所すく

なれども。上へ返して切侍るなり。何底心なければ切

れず。殊に裾がれなどいへる病句なり

這コラシヘホキチ教梗よしと聞えたれど。下の轉ずる所と書るよ

り以下。事のわからぬやうにせし言事なり。此句意

は。青くても有べき物を。青くはあらで赤きたうが

小まはし

とは異なり  
ならん此もはつどくるもにて。前のつれなくものも  
れど。切るゝ所とてはなし。是を二段切とはいかゞ  
夕にも朝にもから鮭も空也の瘦もと。ふたつ物はあ  
は詞の双關にして。爰に句法を稱すべし

水無月の暑日にも。瓜の花のみ露けて。夕兎にもあら

ず。朝兎にもあらずとは。髓に二段の差別成につかずと

も。切字手爾波詞の活杯はしらすも天然と十に六七  
はよく叶へるが有如し。然れば知らずに遣ひ中と。  
知て遣ふとは。大なる損徳あり。祖翁此てには知り  
て遣はれし事ならばたれ／＼にもよくわかるやうに  
教へらるべきに。其事はいはで。玄は玄と妙と心詞  
も及ばずと。其上詩まで引れたれば。中々知り給は  
ざるに等しくて。人の爲にはならじ

二段切

夕にも朝にもつかず瓜の花

空鮭も空也の瘦も寒の中

二字切 三字切 句讀切きしたる事な



らしと。裏へ返る詞を合たるてには也。ものをといふてにはは。皆かくと。心うべし。上へ返りて切侍るなりといはれたれど。此てにはは上へも返らず。切も侍らず。米くるよ友をのをは。歎息のをなり。米くるよ友をといひ。客といひ。此をの一字に。いろ／＼の心籠れり。故に歎息にて重きをの字なり。然るを何底心なければ切れず。殊に裾がれといふ病句とはいかにぞや。

大廻し

幸崎の松は花よりおほろにて。

行春を近江の人とおしみける。

天地未分の切にして初心の人知る事なし 口傳

あまり大いなるいひごとにてをかし

芭蕉門には秘授なるが。是は正しく哉の治定を恐れて。

にてと心を返されけん。然れば心詞の残る所は下の五文字の句絶にして。是を下段の切とや言ん

蕉門の秘授といふもこと／＼しく。大躰秘授口傳などいふ物は。自己にもはきと分らぬ事を。分らぬや

蕉門の秘授といふもこと／＼しく。大躰秘授口傳などいふ物は。自己にもはきと分らぬ事を。分らぬや

うにては。文をなさざる故に。秘授口傳と書紛らしたるものなるべし。哉の治定を恐れてと書るも。をかしきとなりにてと留るは。上へ返るとかへらぬとの二品あり。此句のにては上へ返らず。はとかよりて下に詞を合切たる也次の行春の句は定りたる格にて。おしみけりといふべきを。古學には變格といひて。けるの下へ。事よ。事哉などの辭をふくみ。意を深くしたるもの也。何の子細もなき事なるを。蕉門の秘授口傳天地未分の切にして。初心の人しる事なしとは。いかにぞや。此外いく所もいひたきとあれど略す。總て是迄にいふ。へ挨拶切へ中の切へ自他切へ無名切へ玄妙へに回しへを回しへ。大まはしへ心の切へ句讀切へ押字へ未來のし。杯の名目は捨べし。前に具にいふが如く。僻事のみ多く交れり。今の世には是等の名目用る人なしとおもへど。返すへも俳諧には俳諧のてにはあり杯ひひて。是等のをしへを證とし用ふる事なけれ。祖翁の詞にも俳諧に古人なし。いにしへをもどきて今をつしめと申されしにても知るべし

古今抄

貞享式 東花坊

東花坊支考著

芭蕉翁十九ヶ条を。貞享式と題せしは。減後門人の稱なるよし序に見えたり。享保十四年板本蓮二房。

前の有也無也の關にあらかぢめ引上て言は合せ見るべし。此抄の要とする所。てにはの事にかゝはらざれども其ひとつをいふ

東花坊序に曰。俳諧は五倫の交を和らけ。諷諫に談笑の用なるをとしるべし。中器はせし庵序に。聞ずや聖典の掟にも。道は日夜におごそかならん事を思ひ。法は年月に安からん事をおもふといひ。中器世法は五倫の和を本として君父の善を進めんに。婦弟の惡をこらさんにも。善を善とし惡を惡とし。直言を以て直諫すれば。其時其人の機嫌をまたず。夫を一音の大道とはいふなり。略楚の子西が王の惡を和けし故事を引出。又所／＼百世の明監を待といふ事を學。學べきは俳諧の機變にして。恐べきは俳諧の高擧なるべし。下器

東花坊序に曰。俳諧は五倫の交を和らけ。諷諫に談笑の用なるをとしるべし。中器はせし庵序に。聞ずや聖典の掟にも。道は日夜におごそかならん事を思ひ。法は年月に安からん事をおもふといひ。中器世法は五倫の和を本として君父の善を進めんに。婦弟の惡をこらさんにも。善を善とし惡を惡とし。直言を以て直諫すれば。其時其人の機嫌をまたず。夫を一音の大道とはいふなり。略楚の子西が王の惡を和けし故事を引出。又所／＼百世の明監を待といふ事を學。學べきは俳諧の機變にして。恐べきは俳諧の高擧なるべし。下器

即興躰

景清も花見の坐には七兵衛

這段は二師の金言にて返すくも味べき所也。丈艸猿蓑跋曰。猿蓑者芭蕉翁滑稽之首識也。史記姚察曰滑稽猶俳諧也。屈原卜居之語曰。突梯滑稽。王逸註轉。隨俗也。如脂如韋。柔媚曲也。以契極乎。謂同語。誤也。されば俳諧は。人とむつまじくするの媒。此抄にも諷諫をもて道となし。談笑をもて法と語り。人の上にていはば。學んで學ばざるが如く。才ありて才なきがごとく。高擧ならず。人を妬まず。人をあしざまにいひ下さず。禮を正し約をたがへず。常にをかしきみを持たる人。則是を滑稽とも俳諧とも言べし。然るを世の俳師の中には。萬これに反し。學ずして學びたる兒を。才なくて才ある兒をし。自憐にて情強く負をし。有。然して后。己が拙は露し。常に人を快く言下す癖あるにより。今迄むつまじき朋友も。俳諧故に中器敷なりゆくものまあり。此輩は此道の不正門といふべし



むかしきけ秩父殿さへ角力取  
右二章は一坐の談笑にして切字の論に不及

ふらずとも竹植る日は簑と笠  
當歸よりあはれは塚の董艸

爰には切字のさだかならで。蓮二等が管見を加ふ發句に  
何躰何格とは減後の推量なれば。例の明監を恐るべきは  
是なり

切字といふとに苦勞あるにより。かくのごとくいへり。  
定りたる切字はなしとも。意の留りだにすればよき  
となり。秩父殿の句は下知して角力取とまり。余  
の三句ははとかまり。動かぬ詞にて留りたり。はと  
もは殊に譯あるてにはなり。依て紐鏡にもはもと  
して。其余は徒と一ツにいへり。はは物を分る意。  
又也葉也齒也くはしくは後編にいふべし

二品のかなの事

かなといふとは何故といふとをあかさざればしれず。漢  
家の字書にも。哉の字は疑と稱歎と二用。倭には只かと  
訓すべし。歎は疑の重きをいひ。乎と哉は輕きをいふ。

き咄嗟かなしき於痛き咨たのしき。杯いふが如く嗚  
呼といふ。惟歎息也。新撰字鏡に。阿者嘆聲也阿  
は五十員の始。言靈にいふ所。永ければ略す。櫻哉  
月見哉光哉思ひ哉といふも。よい櫻ぢやなあ。よい  
月見ぢやなあと。いふ心かなといひたる物なるべ  
し。かなの反かかの反あもと皆あの一字になる。  
あを重ねてあゝと歎息なり。やの字も同意。反あな  
り。物を響るに俗語。やんやといふ。則歎聲なり。  
故にかなやの三字同意別訓なることしるべし

古式の名目に願のかなといふ事あれど。漢文には決て其  
字なし

東花にも蓮二にもせよ。いかにひらけぬとさぞとて。  
あまりつたなきいひごと也

三品のやの事

古抄よりやの字の事は。七品八品の名目あれど和漢に通  
用をば。只三品に過ぎらん。第一疑の那といふは。和漢に  
やの字の正義なれば。一用にして餘衍なし。第二に稱歎の  
哉は。漢家の字書にも多用にして。彼いふ一名二意にも限

やとかは同意なり。哀やなども。哀なる哉とも。なの字  
は日本の助語にして。漢には那の字を用る也。是を詠嘆  
の餘韻といへば。那兮と詞を詠べし。倭眞名には哉那の  
二字なるや

漢家の字書にあてゝ。歎乎哉の輕重。那の字のと言  
出たるより。總て此抄にいへる。日本の手爾波の事  
を。漢文に引當て言るは。何れもよろしからず。い  
かにもかなはかといふ辭になを添たる物なり。故に  
かなといふべき所を。かとのみ言たるも多し。万葉  
にはかなといふ所をかもと有。又かねとも訓す。又  
やとかの同意別訓なるはよしと聞えたれど。漢には  
那の字を用ひ。倭には哉那の二字ならんといへるも。  
よからず予が考にかなやの事は。いまだ先達の發  
せざる所なれば。いかゞと思ふ人も有べけれど一説  
を備て言ん。かなといふ心は。此抄にも稱歎なりと  
いへる如く。治定歎息したる所を哉と語り。歎息と  
いふとは。前にもいふ。月にも花にも物の至極したる  
所を歎息といふ。歎きの意のみにあらず。嗚呼よ

らす。第三に口合の也は。漢文の常にして。爲道也。回也  
白也。韻會の言る間ならん。然ば也の字は句勢のみにて  
切字にならぬ時もあり。春雨や秋雨やの類は句躰により  
て哉と留るべし。名所の也に留るは論なく古式の常法也。  
疑のやをやの正義といへるは大なる僻が事也。漢文  
に中てよからざるは前にも言り。春雨や秋雨やのや  
の事。かくの如いひては。初學に感安し。猶やのと  
は。有也無也關。夕克やの段。饒舌録冠のやといふ  
所にいへば。合せ見るべし

三ツのしの事

助語の中にも。三世のしは明らかならず。連俳の兩家と  
もに。現在未來は切字にして。過去は切字にならずや。  
夫にはタイの口傳あり。暑い寒い喰まい飲まいと。いに  
通ふを切字となし。見た聞たと。たに通ふを切字ならず  
と。古抄にはかくいひすてゝ。例に其二字の道理をあか  
さず。口傳古實とは言り。未來の喰はじ飲まじとは。眞  
名には不喰不飲と書て本より文句の用にして。助語に  
あらざれば。切字に用べき道理なし



かく言はるは。切字を助語と思ひたる誤成べし  
我家の式目には。現世と過去は切字にして。未來のじは  
切字にあらずといはんか。是等は一部の大騒にして古式  
の名目を減ずるに似す。我家の學者は心々に或は用い或  
は捨て天理の一統に任すべし

東花云此一段は大切の沙汰にして。漢土の文字に音韻の  
あまりならんとは。一發百中の的言と言べし。猶撰する  
に未來のじの字は。驢馬に乗たる東坡の畫賛に

振舞に馬ではゆかじ雪見哉

とせしに切字重なりておだやかならずと。其時は人の難  
ぜしが。今思へば故翁のいへる衆儀はおほえず。東花坊  
に定りて天理の冥合に叶ぬるやと尊とし

すのいまだ然らぬをいふ時はじといふ。俗言にじは  
まいといふ詞。此抄にもタイの口傳と有是也。す  
と定ていひがたきとき。じといふ辭也。すは強くじ  
は弱し。すはすぬねと活き。じはすの將に然する  
詞にて。留りの格はずに同じとあり。又じは。有也  
無也の關。三世のしにいふ辭言にもつゞく詞なれど。

(古學切字論 下)

をだ巻

元祿十年板本

洛 溝口竹亭

自序に古人の式にしたがひ。かつみづからが趣をも童蒙  
のたすけにもとおもひ出る折下略

をしふる所。前の三書にるるしたれば略發句切字と  
して切るゝ所に、印を掛たりそは

何 五月雨へ何を茶にくむ淀の人 鞭石  
子をもたば、いくつなるべき年の暮 其角  
ぬしは、たれ木綿なだるゝ秋の雨 尙角  
扇折、いかに持たる汗のごひ 千那

かくの如く、印を掛て。此所を切字とをしへしはひ  
がどなり。故に初學の人の誤ると多し是等の句は  
皆上に疑の詞ありて。下に其結びあれば。其結び  
にて調ひ切たる也。其結びと言は、何を茶にくむ  
いくつなるべき、ぬしやたれ木綿なだるゝ、いかに

かなの打合よろしからず。とにかく此句は。時の人  
切字重なりておだやかならずといひしぞよき。作者  
の心には。振舞に馬ではゆかじトオモヘドモヤツ雪見哉  
といふ心をのべられたらんなれども。さまでには詞も  
はぶかれず。外に句の作り方も有べきを。然しては  
哉と打合す。天理の冥合にも叶はじとぞおもふ。此  
抄の、心切、中の切、挨拶切、二字切、三字切、を  
回し、大回し、玄名等妙のとは有也無也の關に引上  
古、印を付ていへば畧す

持たる、かくの如く△印付たる所を結びといひ。切  
ともいふべし。此抄の切るゝ所とて、印付たるは。  
皆詞の首なり。△なきは動かぬ詞。又言かけにて結  
ぶなに、切るゝ何。又結びに抱抱はらぬ何 外にさま  
ぐ、格有

けれ

我こゝろ鞭におそけれ櫻狩 松木

なく鹿もさかるといへばをかしけれ 團雪

此二句切るゝとをしへたれど。上にこそとなくては  
とゝのはず。啼鹿もさかるといへばコソをかしけれ  
の。社社を省きたる物といはど。笑べし。こそを省き  
て。けれとのみ遣ふ例はなし

下知そ

ちらすほどきはどなきそ花に風 道村

是は下知に似てすこし意違へり。禁イしむる詞也 勿ナカレ

のなといふ。な何その。なの字。なきなるべし。  
此例なるは、玉川の水におほれそ女郎花。芭蕉翁に  
もかくの如きの誤あり。此例にならひてや。今の世



の人の句にもあれど。こは其人の罪ならず。古人の罪なり是も、玉川の水にナおほれそとの如くなの字を省きたる法などいふ人あらば笑べし。下のそをばくは定りたる例なれど。上の首たるなを省く例なし、玉川の水におほれな女郎花と。な字ばかりならばよろし一段強く禁る意也

數ならぬ身となおもひそ玉祭 はせを

皆かくのごくあらまほし。万葉に、いもがあたり我袖ふらん木の間より出来る月に雲なたなびき。かくのごくたな引そといふ。そを省は定也。夫木集源仲正哥に、ちりぬとも外へはやりそいろくの木のはめぐらす谷のつち風。此哥はな字なくてその字ばかり也。依て此うたも誤なり

切字なくて可有分別句

是はくとはかり花の吉野山 貞室

余の草にたとへおとるとけふの菊 和及

にくまれてながらふる人冬の蠅 其角

かへすも初心のすべき事にはあらず

かくのごあれどさにはあらずはよりによりへてよりかよりて。下は動かぬ詞にて留り。外に分別もいらす。とかく切字といふ物になづみもて煩ふ故。いろくむつかしう言て用いたす

やは福壽草やは明がたの梅の花 富丸

かはくらべ馬神の科かは負の方 周木

やはとかはとは些の違ひあれど。大抵同じ事にて。

共に意の裏へ返る辭也、くらべ馬神の科かは、テハガニ

シ負の方といふてには也、やはとすれば、神の科や

は、トガニテハといふほどの違のよし。福壽草のやは、

一格あり、福壽草やは明がたの梅の花カヤといへ

る辭のよし北邊翁の申されたり。やはかはの事委

敷は後編に舉

煤ハクやはくにごれる京の流哉

口傳にいふ後に置たる五文字なれば。上に切字有ても哉

と留るなり

是は圖のごく。上は上にて辭とよのひ。哉と留りた

り。口傳といふほどの事はなし

曉山集

元祿二年板本

應々芳山著

下の卷百二十八丁メ。てにをはと言事

ひとりのいふ手爾於葉、今ひとりの言。於にあらす袁

なり。又はにあらすばなり、荅て皆よろし皆あし。しら

ぬ人の争ひ也。假名四十七字共にてにをは也。其内てに

をはの四字は。殊に近く活き侍る故に。四十七字をちよ

めて呼て。てにをはと言、自の名となれり。又畧して。

てにはともいふ

予が考も是に同じ。荷田訓之が國語考ヲと云物に。

てにをはといふとの考あり經緯終始の四言を一

語にして。てにをはと名づく。てにをはは骨也。

經緯とは。アイウエオの五言をたてとし。アカサタ

ナの十字をぬきとし。終始は萬にあると。此四言一

語にするとは。タテの反て。又キの反に終始の頭

の。をはの二字を取て。てにをはとし。又ハテ

の反ホ。ニテの反子なれば。てにをはを骨とせし

物なりと。よくこぢ付たれど。是は猶曉山集の説よ

たるぬるつありなりけにばかりが

是等の字いづれも切れずとあれど。たるぬるはぞのや何よりかゝれば切る也

つは上へかへりて留ると。下に詞を含て切る

と。てに通ふとながらに通ふとあり。いかにも切れ

ず、ありなりは七部集の所にいへば合せ見るべし

けにばかりは元より切字にあらず。詞なり。是に

よらず。一切の詞動詞と動かぬ詞あり。名は元々

動かす山川の類。山は山。川は川にて事すみ。切も

し續きもし。躰言にも用言にも續くなり。是は

是はとばかり。こゝに意を含め躰言に續け。花の吉

野山と留りたり。余は皆是になぞらへしるべし定り

たる切字の外なり

へが 見しがといへば。見しがなの畧にて切なれど

我が君がといひては不切。是を一ツにたるぬる

つありなりけにばかりが切れずとせしはあ

し



しと思はる伸縮家にはよく此やうなしひどをいふ物ぞ又假名四十七字共に。てにをはといへるもよろしからず。別に條を立ていふべし  
事替りてりいする切字の事  
へ涼しへ嬉しは切へ涼しきへ嬉しきは不切へつへぬは切へつるへぬるは不切へ思はるへ恐るは切へ思はるへ恐るは不切。是に紛れて切れざるはへ替るへ溜るの類なり。

替る溜るの類切れぬとあれど切もし。つゞきもする辭なり。初學にもよく分るやうに。紐かゞみ詞の玉の緒に教へられたるは。推に闇き夜に挑灯の出たる如く。ひとつも誤るとなく。有がたき書なるを。夫さへ見ずて世に僭上し。又潜に紐鏡。玉の緒。八ちまたを見ては。只譯らぬといふ聲聞えて。解らぬ所をわかる迄に學びたるも聞えず。句をよみ文を作る人々は。よくこれらの書を譯る追學すんば有べからず。さて此翁のへはも徒へそのや何へこそと目安を三條に立。始て世に出しし時は。世の人さら

よく格にて。そのや何よりかゝらねば不切。余は皆前の三書に引上いへば暑す

手爾波抄

文化三年板

不盡谷成元

此書は言靈の學を元とし。五十韻を正し。古學より出て七部集發句附句により。てにはを教へたり。宣長翁のをしへ方とは異て。又一見識有一派の書也  
さればこそひなの拍子のあなる哉  
上にこそとあれば。けれと受べき句なり。然るを哉と言たるは。こそこの例と哉の例とふたつをひとつに遣ひたるものなり

かくいはれたるは聞えず。是はへ花すゝき大名衆を哉と祭いふ。嵐雪の句の前文にへさればこそ鄙子のあなる哉神田祭の太鼓打音。拍子さへあづまなりとやとあるを取出。季立もなく靡の哉といふ引句に出されたるはをかし

第二例名の哉

にうけがはであしさまにのみいひふらし。書林に活れざるは我親の嘶に聞たり。近き世となりては。彼紐鏡玉の緒。神佛の御作のやうに尊みて。風雅の道に遊ぶもの。机の側をつかの間も放たず。既に玉の緒板磨減先年再板せり  
へあなたうとへあなたうとやへあなた笑止へあなた笑しやへあなたうと春日のみがく玉津嶋の句を引てあなたうとやと。やの字いはぬ所に切たりといへどと

かく遣ふ例はなし。前にある思はる思はるといふ例とは違へり。たふとゝは一ツの詞なる物を是はみがくといふ縁に。玉と續け動かぬ詞にて留たり  
神垣にふりて久しき松の雪  
此句切字なしとて。久しと改めしよしなれど。宗砌もとの久しきとするかたよしと申されき  
有也無也關に言。秋風ををれて悲しきといふ句の格と同じ。元より久しととはいはれぬ詞也此句は久しやと正例に遣ひて難なし。翁の追慕の句も。秋風にをれてかなしやにてしかるべし。しきといふ詞はつ

檀の木の花にかまはぬ姿かな 翁  
雲折く人を休むる月見哉 全  
山吹のあぶなき岨のくづれ哉 越人

如此引たるが。則下の哉へつゞくべきが其間にへ姿へ月見へ岨の崩と言事の狭りたる也。是をもてとは靡の哉が正例たる事を知るべし  
靡の哉といふは。いはゆる浮哉といふかな。是を哉の正例といへり。かまはぬ哉へ休むる哉の類也  
心は言。花にかまはぬ哉姿をといふ心也。さればかまはぬ姿哉とも詠べけれど。下上になすは深き理ある事なりといはれしは返てむつかし  
細くごみたく門の乙鳥哉 怒雅  
團扇うる侍町のあつき哉 野坡

へごみ焚門へ團扇賣侍町。上の詞直に名につゞきたればしからず。打合詞をやがて哉に含たる例なりと可知  
是はへごみたく門の乙鳥ナル哉へ侍町の暑哉と言心にて。元は靡の哉を正例といはん爲に。かくいはれたれども是もうるさし。是等皆物の名よりかゝりた



る哉にて子細なし。

大峰やよしのの奥の花のはてナラシ會良

五月雨にかくれぬ物や勢田の橋ナラシ翁

大峯やのやはやの正義。かくれぬ物やのや文字は。

歎息のやなり。是を中のやとして。疑のやの格に

いれ下にナランと詞を含むよしいはれしはあし

あやまりてぎとぞおさゆる鱗哉 嵐 蘭

此句の遣ひかたよからぬ也。是はもとより下にかなとい

ひたる事なれば。その字は置るまじき事なるを。しひて

遣はれたるは。哉の上に遣ひても苦しからぬ物と思はれ

けん。されど是は上古以來例なき事なれば。たとへ此事

有ともゆめく遣ふべからず

かくのごと永々書れたれども。成元が見誤にてぎとぞ

にてはなし。本書にもきと書て有をぎと濁

りを付ぞと有てかなはよからずといはれしは。大なる

見損じ也ぎとぞにはあらずぎとぞ也鱗又鱗俗に

ぎと鱗と同じく山川にるて。針の有物。よく人を

刺ゆるに誤てぎとぞおさゆる鱗とあるを引

とそとよく字形の似たれば讀違へて叱シカしはをかし

ほととぎす啼く飛ぞいそがはし 翁

此句哥にはかやうにうち合せぬ事也。いそがしきとい

はでは。正例にはあらざるなり

かくいはれたれど違へり。自他の事有。歌にも發句

にも。我彼に暫カシくなり替りてよむは常のとなり。此

句我彼に暫カシくなり替り。時鳥の上を察して。時鳥啼

るをいそがしきと定りたるぞの結びを付られては。

我と彼。自他ひとつになりてとよのはず。やはり祖

翁の申されしいそがはしにてよく和トク合ヘり此ぞはつ

むるぞなり

いづくにかたふれふすとも萩の原 會良

いづくにかといふかの字。あたらぬとなり。いづくにか

といへば。たふれふすべき。たふれふすらん杯こそい

ふべけれ。もし又かくのごとく。たふれふすともといはゞ。

いづかたにといはではすまぬ事也

といはれたれど。かく言はいづくにかと疑ひたる辭

の結びには叶ひたれど。會良が句意には叶はず。此

句意は會良が行脚の身の上。もし倒れ死なん時は。

いづくにもせよ萩の原に倒れ死なんといへる句なれ

ば。かく定りたる結にて。いづくにかたふれふすべ

き萩の原。又はたふれふすらん萩の原。かくのごと

せよといはれては。萩の原が倒れふしたいといふや

うに聞えて。會良が萩の原に倒れ死なばやと願ふ意

には叶はず。もし又たふれふすともといはゞいづか

たにといはではすまぬとといはれたれど。是も聞え

ず。かくいへば。いづかたに倒れふすとも萩の原は

いやぢやといふ心になればなり。此句はとにかく會

良がともといはれしが叶はぬ也。いづくにか倒れふ

しなば萩の原。又倒れふすならなどこそ有べけれ

山は皆蜜柑の色の黄になりて 是を

此句發句のやうにはあらねども。附句にあらず。珍らし

く遣ひ捨たるての字なり

是は伊賀の猿雖が家にて。興行有し五十員の内の附

句なるものを。かくのごといはれしはいかにぞや。

成元和學者にて俳諧師にはあらざる故の誤なり。是

を思へば此附句を發句と心得違ひしたる例は。明和

五年の板本伊賀上野養虫庵が著はせる。蜜柑の色と

いふ集の序に曰。其頃も此句を發句と定め第三とし

るせる沙汰聞えければ。其懷紙の儘を梓アツサに上せて。

祖翁の爲に此句の忠臣となり。同門の好士の爲に百

世の惑を解んとをしかいふと桐雨がしるせり。初折

は雪芝が執筆。二の折より支考執筆せしとなり

戊九月四日會猿雖亭

松風に新酒をさます夜寒哉 支考

月もかくるく石垣のうへ 猿雖

町の門追るく鹿の飛こえて 翁

道場の門のさし入だぐきさに 雖

一里の船も腹のすきたる 望翠

山は皆蜜柑の色の黄になりて 翁

日なれてかゝる畑の露霜 考

下略

寂 栞

古寛本有 春秋庵白雄著

文化九年板本 拙堂増補

凡例に拙堂曰安永本寛政本二品有よし。予が持る寫

二七五



本は雪門夢阿が持しを。若年の時寫し置たれば安永本なるべし。初學の輩見るべきもの。道に於て徳をうるの書なり。今文化の板本を見るに大むね違はず。此書世に弘まりてよく人の柱となす書なれば。其内誤ある所を取出て珍重する人を驚かす

初丁に おとろひや齒に喰あてし海苔の砂 翁

おとろひとはいはず。おとろへといふべし。書損とも思ふべけれど。下の卷九丁メにも同句を引ておとろひと書れたるはいかにぞや

●とあるは拙堂が増補せられしなり、古哥を見るに先抄を見るはあし、姿をあしといふにはあらず

など書り。是は詞の活きをしらぬ誤なり。あし

あしきあしくと活てあしとははたらかず

手爾於葉の事

こは梧一葉の誤を傳へしものなるべし。てにをはの字だにしらで。人にてにをはの事ををしふるは。紙の橋を渡るよりも危きわざ也

下の卷十四丁 浮句の事

控木やうらがれの秋を立盡し  
冬川や燕ながれて暮かゝり

吟じてしるべし。立盡す暮かゝるといはゞ子細なし發句の收り肝要は。切字といふも一句を收めんが爲也

かく難ぜしもあたらす。是は活詞を躰言に遣ふといふ一格なり。立盡すといふよりは。立盡し暮かゝるといふよりは暮かゝりといふかた。丈高く聞ゆる物也。其例句を引て見す

水風呂の下や案山子の身の終り 丈草

初汐や鶴の羽白う暮かゝり 荷兮

余はなぞらへしるべし

きりくす腕しびるゝ添乳かな

宗匠なりをもせし人の句なり。もとより女の自の句ならば論なし。男の句ならば添乳いかゞ。他より見たる句といはゞ腕しびるゝは自なり。いづれ自他さへ辨へざる身にて人の師たるは

と笑はれたれど女の自の句を。男の女になり替りて作するは常のとなり。又男にても添乳せぬとはな

し。稚子を抱へ寐かす事は。我ゝが身の常なれば乳はなしともどりや己が添乳してやらうなど眼前なれば。乳なくて男が添乳すると言は俳諧なるべし。難ぜしは利屈なり

同員外二丁メ 浮哉

月清し今宵は汐も満るかな

浮たる故に上に切字を遣ひしなり

此いひ事もよらしからず。此句は二段に切たれど満る哉を一句の切とす。はもにてには心を付べし

梅柳さぞ若衆かな女かな 翁

拙堂曰饒舌録に古寫本に有と偽て、梅柳さも若衆哉女哉と出せり。梅と柳を若衆と女にたとへたる意にて。さもと作り替て。人をたぶらかせり。此句は延寶天和の吟なり

さもと直せるはあしけれど。句の聞はずも是に同じ

此句は。其頃の風俗をよく述たり。其時代は人派手にして。伊達なる形容をなし。途中にて雨などに合たるとき。傘もさゝすぬれながら歸るをはれとせしなり。中略取わき

衆道大に流行。故に梅咲柳みどりせしを見て。嘸若衆や女の立派にて物見に出るならんと其世のさまなり。さぞといふ詞にて思ひやりたるおもむきを重ねしなり

此説さぞといふ詞を推量の詞に取たるなり。推量とはさぞ暑アツク、さぞ寒カラクといふ則推量也。春秋庵が句の聞かくの如し。前に言る如く。梅咲柳みどりせしを見て。さぞ若衆や女などの立派に物見に出るならんといふ事ならば哉と留ては。てにはとゝのはず。故に此句。てにはとゝのはぬとて。饒舌録の外にもあれこれ人のいふ事也。そは皆さぞといふ詞を推量の詞にのみ取たる故の事なり。嘸といふ詞。もとはそのやうにぞといふ詞也。さもは其やうにも也。後に轉じて推量の詞ともなれるよしは不二谷が考おけり

引哥に、あづま路やはまなの橋に引駒もさぞ待わたるあふ坂の關へ歸るさをよしや恨みじ春の雁さぞ古里の人も待らん

轉じて推量の詞といへど。きつと推すべき故のあるか。又はこなたに引くらぶるものゝ有て。夫も此や



うにぞあらんと知る心なれば。饒舌録の方聞よしと思はる。扱此句のてにはのとよのひは梅柳ソノナウニソト切テさざ。若衆哉女哉と三段に切れて留りの哉を一句の切とす。よく遣ひ給ひしてにはなり。

同五丁メに 饒舌録といへる書は。詞の玉の緒といへる哥のてにはをあらはせし書を其まゝ俳諧のてには無理に合せし書なり。詞の玉の緒を用ひざる和歌者流もありいはんやこゝを以て俳諧を極むべけんや

かく言れたれども。上の卷二十二丁に古人の語をつみて。和哥のてには俳諧のてにはとてふたつなし。是日本のてにはなりと書れしはいかにぞや。是は尊とき遺語也

腰折の哉

何鳥の卵か落し野松かな

何といふ字をかと受てさて哉と留たり

何といふ字をかと受て哉とは留らず。何鳥の卵か落し。何の字を過去のしにて結び。野松哉と二段にとよのへり。是てにはの定なり

しこそとのみあるは。こそに打合辭を省きたる物也

らん留は上に疑の詞を置べし。さなくては留らず

夕霞染ものとりて歸るらん 冬文

此句上に疑の詞なし。染物取てやとやの字を句中にこめたる也 哥にはへ久かたの光のどけき春の日にしづ心なく花のちるらん。しづ心なくイカデ花のちるらんとイカデの詞をこめたる哥なりと。哥の傳にも見へたり。然れば。上にうたがひの詞を遣ふに子細なし

かくいはれたるは。らんの事にくはしからぬ故の事也 らんと句を留るに。上に疑の詞なくとも遣ふなり らんは察する詞。疑の詞とのみおもふは違へり。桐の一片 らんの所にいへば合せみるべし。此句は。夕霞染物取て歸るであらうと察したる句也。又染物とりて歸る哉と。かなにも通ふてには也。是に久かたの歌を引るは意違へり。此哥は花のちるらんと。のよりかゝりて。らんと留りたり。らんと結びたれど其事を疑にはあらず。然る故をうたがへるてにはなり 故に是も花のちる哉と。かなにも通へり。然る

捨や

としの暮女のめがねすさましや

如此上にてはなき五文字を居へし。上に切るゝ心ありすさましやは切やなり。すさましと切たる下に置やなればなり。てにはなき五文字とは何事ぞや

口合のや

是や世の煤に染らぬ古盒子 翁

吟じてしるべし。口合のや。切字にもなるに限らねど此句は一躰の治り有故に切るゝ也。先にも出せし如く。口合のやは句によりて哉とも留るなり

是や世のゝやは疑のやなり。染らぬと不のぬにて結たり。如此定りたる格をしらぬ故に。此句一躰の治り有故。切るゝといへるは。どこにて切たるやらしかとしらぬやうの出格なり

五合帆に蚊もあらばこそ沖の月

是はいひ放つ詞にして。こそを切字にせしなり。こそれの差別にあらず 此をしへ殊によろしからず。抑こそといふ切字はな

故を疑とは。花のちる事は疑にあらねば。花のちるかなと言意なるを。其やうに花のちる故をうたがひて。何とて花のちるらんといへるてにはなり。夕霞の句とは意たがへり

饒舌録

文化元年板本

元木阿彌著

此抄に上の五文字に置。冠のやともいふやの字。へ明月やへ白雪やなど發句の題より受るやの字 又名よりうくるへ君が代やへ曉やなどの。や文字を詠のやとし。此や文字を一向に切れずといへるは違へり。や文字はくさくの譯あり。有也無也の關。夕兒やの条にも。又此次にもいへり

十八 灌佛や目出度事を寺參ス 反考

十九 君が代や筑摩祭も鍋一ツナリ 越人

二十 あかつきや灰の中よりきりくすイッ淡

かくのごとく。動かぬ詞にて留りたる下へハッ。一字入て手爾波合するを。十八のてにはといひ。二



字を十九。三字を二十のてにはといふとは古人の説  
もあれど弁べし

かけはしや命をからむ薦かつら 翁  
是は薦かつら命をからむと切たり

かくのごとくいへるはよからず。棧やのや文字はや  
の正義。命をからむにて切もするを直に躰言へつゞ  
けて動かぬ詞にて留たり。かくの如薦かつらを中へ  
やり。命をからむを下へやりて、棧や薦かつら命を  
からむにて切たりといへるはあし此句自他とよのは  
ず。別にいふべし

六月や峯に雲おくあらし山 全

前に同じ。爰にや文字の正義をいはん。棧やの句は  
棧に。六月やの句は。六月はとしてもよからんな  
れど。棧や六月やとや文字を遣ひたるは。棧は木會  
の棧にて。千仞の深き谷の上に。藤蔓などもて。か  
らみ掛たる橋なれば。命をからむと作せしは余の所  
にあらず。此木會の棧に限るといふ。あまたの詞を  
やの一字に籠たるてにはなり。是や文字の正義なり

六月といふべきを。六月やとしたるは五月にも  
七月にもあらで。六月に限るといふ事を。やの一字  
にこめて歎息也。此抄にもいへる如冠のやにて切る  
よといふにはあらず。今の俳師かくのごと遣ふや文  
字を皆切るよと思ふはひが事なり。もとやの字は切  
字にあらず。歎息したる所にて切るよ也  
元日や神代の事もおもはれつ 守武

此句は諸集に。おもはるよとあるを。此抄には。お  
もはれつと直して入たり。思はるよにては切れざる  
により。例の寫本にありとして。思はれつとせられ  
しも中よにあし。やは前に同じ。此句はおもはるよ  
事よと詞をふくむ意。何のてにはにても。かくのご  
く。續きたる辭の下は。詞を舎といふにはあらず。  
上へ返るも有。よく辨ふべし

玉の緒の、ぞのや何の。のよ字の事をいひて

春の雨日和になれば風のふく 宗夏

かくのごと引句を見せたるは、よ正例なれど  
京筑紫去年の月とふ僧中間 文草

鳥籠のうきめ見つらん時鳥 季吟

此のは、ぞのや何ののにはあらず。徒ののなり

梅一りん一りんほどのあたよかさ 嵐雪

變格といひて出したれど。變格にはあらず。うごか

ぬ鉢の詞にいひなして遣ひたる一格なり

山路来て何やらゆかしすみれ草 翁

此句てにはとよのはぬといひ寫本に有とて、何かゆ

かしきと直し見せられたるはよろしからずやはり

何やらゆかしにてとよのへり。何やらは何とさすべ

き物なき故に何やらなり。結びにはかよはらず。何

やらは何やらなり 俗語なり

朝霧や宮より神も出るやうに 朋水

霜月や鶴のイならびるて 荷兮

二句とも切字なし、神も出るやうぞ、ならびるつとも  
ありしを寫し誤たるならん

といはれしはよろしからず。句意は朝霧やとて。

題より受たる歎息のやなり。さてかく朝霧やとて。

すさまじき霧のもやうを。宮より神も出ますやらん

と朝霧の註したる句作なり歌には常に言事。發句に

も其題の、梅さくや、明月やなどいひて。其もや

うを思ひ、に註するは常の事なれど。此註すると

いふ事は。俳師の教へに言ざることなれば。いかにと

思ふ人もあらんなれど註したるが常に多き物なり。

是一つの句作の目安なり。朝霧の句のてにをはの事

は。宮より神も出るやうに見ゆと辭を舎て聞もよ

し。又神も出るやうに見えたまふと一句心に添見る

もよし。發句は字數すくなければ哥の例にならひて。

かくのご作るは常の事ならまし總てに留て留は。上

へかへると下に詞を舎と二品あるは。てにをはの定

たる法なり

霜月やの句は直されたる如く。居つともいふべきを。

骨折て居てと置れたるてにはなるべし。それを又る

つと直されては。てにはの骨折見えすなりていかに

ぞや。此辭の骨折、木阿彌には見へざるやうにおも

はる。此事七部集の所にくはしくいふべし

鳴むろに茶を申こそ時雨哉 其角



此人數船なればこそすゞみ哉 全

此句も寫本には、時雨なれ、すゞみなれとありて。此方よろしとあれど。此抄にいふ寫本といへるは偽なり

此二句は、その下へよきと。打合の詞を捨てかなと留りたる句意なるべし。さなくては社と有て哉と留る例なし。欲得と有て。現在のきと結例は。古今集このかたにはなしとあれば好みてすべきにはあらず。されど發句は字數すくなく不自由なるともあれば。ゆるす方もあらんかし。万葉に、玉釧巻ぬる妹もあらばこそ夜の長きもうれしかるべき、なにはびと声火たく家はすゝけたれどおのが妻こそとこめづらしき。

袖にこそちぎれ花折野分哉  
さればこそ花におもひし野分哉

へしたにこそ人の心もうつろふを色に見せたる山櫻かな  
是は下にこそ人の心もうつろへと結ぶ意なれど下へ結びながらつゞくるには。人の心もうつろへとは。いひがたければへをふに活かしをと受て。下へ續たれば。下に

哉ともいはるゝなり

かくのごとく云れたるはあし。是は下にこそ人の心もうつろふをと結び。下は徒のかゝりにて哉と切たり。此を、はものをををなり。玉の緒にもかくのごと有を。木阿彌の見損ひて出されたり。前にもいふ上の、明月や、白雪やのや文字。詠のやとして切れぬと心得違ひせられしより。此書を見て初學の輩大に迷ひし人有よし。此書所、里語と目安を付て。願ひのなんは、テラレ 畢ぬのぬぬるぬれの里語は、ウツナカ など元阿彌の書れしはいかにも初學の人には。大なる徳をうることにて。雅言を俗言に直し。手早くおほゆるの術なれど。是は今より昔六十年ほど前に。かざし抄。あゆひ抄といふ書に。京の不二谷が始ていひ置れしを。元阿彌が生捕にし。詞の玉の緒をよくも見わけて柱とし編たる饒舌録なれば。よき所もありしき所も雜ある書なり。

明月や北國日和定めなき 翁

是はもやの意の疑のやにて下のきは結也

かくいへどさにはあらず。此やは稱歎のやにて。なきは前にいひしがぞし

じねん此藪ふく風ぞ暑かりし 野童

本書には。じねんこのとかなにて書り。萱といひて竹に病の付て枯たるを言り。皆赤葉に成ていかにも暑き姿なり。然るをじねん此と書ては自然と此藪ふく風があつといふ事になりて。わけも分らず。發句にもならじ

かくの如人の誤をしかりながら。我もかく誤りしは。成元が、神田祭、ぎどぞ、みかんの色と同罪なるべし。かくいふ我臺抄も又是に同じ

七部集の内てにはとゝのはざる發句

集中へ春の日は、へ炭俵はスへあら野はアと句の上に印しつ。△印は切るゝ所。文字を□此中に書たるは本文てにはのとゝのはぬ所。片はらに細字もて書たるは。かくあらましかはとの意

いづれの俳書にもや文字を切字とをしへしよりやと

だにいへば切るゝと心え。やといはれぬ所にやと遣ひ誤る事多かり。やは、歎息のや、疑のや、切や。其外くさんゝのや文字有て。今の世に聞ゆる人の發句にも誤り多く有事ぞかし。何と疑ふ物にうたがひのやを遣ひながら。疑の意にならぬや文字の句作あり。又治定したる事を自ら治定しながら。句作には疑の意のや文字を遣へり。是今人の誤ならず古人の誤なり。古人の誤擧るにいとまあらず。今人の誤はいふ迄もなしわづかに七部集の内や文字の行ちがひたる所をつみ出してこゝに擧

寐道具の片、うき玉祭 去來

疑ふ事なき物を疑のやの遣ひざまなり。ゆるに不<sub>ト</sub>和合<sub>ハ</sub>此類いくつも有。此ぞは疑のぞにあらず。結ある。中のぞいふぞなり

一袋是、鳥羽田のことし、麥、之道



いひてはとよのはず。是ぞといふべき辭なり。前のぞとおなじくに通ふぞなり。一袋是が鳥羽田の麥といふ句なり

サ 今世を頼むけしき や 冬の蜂 且 藁  
や文字居らず。つむるぞといふ。ぞ文字の行へき所なり。前のぞとは又異なり。是を見てやとぞの行ちがひたる事を辨ふべし

ソ 流れ木の根 や あらはるゝ花の瀧 如 雪  
ス 麥跡の田植 や おそきほたる時 許 六  
ア 喰物 や 門うり歩行冬の月 里 圃

やの字居らずかなり。是を中のかといふ。結びて切るゝかなり。皆おしあて問ふかなり。喰物やの句疑のやとしたる説あり。然してはやの置所あし。かにて難なし。おしあて問ふなり

サ 山鳥のちつとも寐ぬ や 峯の月 宗 比  
ス けうときは鶯の栖 や 雲のみね 祐 甫  
サ 三葉ちりて跡は枯木 や 桐の苗 凡 兆  
ソ 其の蔓 や 西瓜上戸の花の種 沾 圃

此や何れも切れず。又やの字。遣ふ所にあらず。常に人のよく遣ひ誤る所。皆かくのごと。切るゝかもしなるべし又是に二品有。後編にいふべし。是に似て正しきはアへさみだれにかくれぬものや勢田の橋。是は切るゝ稱歎のや也。前のやと紛れ安し抑疑ふに。やと疑と。かとうたがふとのふたつはいとも紛れ安し。皆定りたる格あり。今も古も高名なる人の句を見るに。此差別なく遣ひ誤る事の多きは。扱もく杜撰なる事ぞと驚かしおく ソ 青柳のしだれや鯉の住所一吸 是は正しき疑のやなり。疑の結び有は。切るゝやと紛れねば擧す

サ 芭蕉葉は何になれと や 秋の風 路 通  
何になれとやといふ詞とよのはず  
ア 旅寝して見し や 浮世の煤拂 是 せを  
やの字居らず自旅寝して世の煤はきを見たる句ならば。見しとすべき格。人に問ふ句ならば見しかなるべし。見しやと疑ふすぢはなき句也  
ア 簞虫のいつから 見るや 歸花 昌 碧

いつから見るやといひては。てにはとよのはず、鶯になじみもな きや 新屋敷 夢 々

新屋敷にて鶯が人になじまぬといふ心ならば鶯のなじみもなきかといはねば叶はず。人が鶯になじまぬといふ心ならば。鶯になじみもなしやとせねばかなはず。なきやにては切れず。總て如此見しや 見ぬやなきやと續く詞より受るや文字は心すべし。皆疑の中に置やなればなり。

ス 秋風 に 蝶 や あぶなき池の上 依 々  
是も疑のやの扱にてとよのはず。秋風にといはど蝶のあぶなしとすべき格なり。

ソ 夕立 に 傘 かる家 や 眞一丁 圃 水  
前の句に似て異なり。やの字おらず。切もせず夕立やとして論なし。いはゆる稱歎の切やなり  
ぬげがらにならひて死ぬ る 秋の蟬 丈 草  
死ぬるにては切れず。歎息のやなるべし  
餅みかん吹革祭 や つかみ取。かくやの字を遣ひ誤れることむかしも今もいと多し此集にも

、小米花奈良のはづれ や 鍛冶が家 万 乎  
發句に切字なくてはかなはぬ事と思ひ。やとさへいへば切るゝと心え。何の差別もなく入たるやうのや也。此やの遣ひさまよく有事也。たとへやの字にて切るゝとて。此所にて切ては句とよのはず。續かねばならぬ所也

サ そよ く や 藪の中より初嵐 且 藁  
ア ちら く や 淡雪かゝる酒強飯 荷 兮  
此やもかなはず 是に似てよきは  
ア きぬ く や 余の事よりもほととぎす 除 風  
ソ 折 く や 雨戸にさはる萩の聲 雪 芝  
ア 稚子やひとりめしくふ秋の暮 尙 白  
題に詠する物下る有ながら。上の五文字一句の要とする所なれば。や文字よく叶へり  
ソ す く は きや御敷一まいふみくだ き 惟 然  
、松茸やしらぬ木の葉のへばりつ く き は せ せ  
ア ほととぎすどれから聞ん野 く き 柳 風  
、何となく植しが菊の白 き き 巴 丈



活く詞を躰言に遣ふ一格。句のたけ高く聞えて。天然なる物なり。くはしくいはば。すまはきに御敷一まいふみくだくといへば。何故にふみくだく事ぞ。ふみ碎かねばならぬやうの事にも聞ゆ。依てふみ碎く哉ともいはるゝ也。碎きとすれば若者の元氣に任せ。俳に碎きしか。怪我に碎きしにもなる。又句により。碎く。へばりつく。とせねばならぬ所も有スへ竹の子や兒の齒ぐきのうつくしき 嵐 此句など。うつくしきとは遣はれず

白雲や垣根をわたる百合の花 支考

白雲の垣をわたるやと切るゝやならでは不叶。又垣根の根の字も作には劣て聞ゆ。是非垣根といはんとならば。白雲の垣根をわたるといはでは馬かりて竹田の里やゆくしぐれ 乙 菟

是もよく人の遣ひ誤るやなり。此や切もせず。又やの字も居らず。

連立や従弟はをかし花の時 荷 兮  
此句は連立ながら従弟はをかしといふ句なれば。て

ねぶたしと馬にはのらぬ 菫草 荷 兮  
續く詞なるにより。然しては菫草が馬にのらぬといふやうなり

里人の臍落したる田にし哉 嵐 推  
なき事を有やうにいひたるは聞へたれど。しかしては詞たらで哉と留らず。里人の落せる臍か田にしはといふやうならでは

青くとも木賊は冬の見物哉 文 鱗  
月に柄をさしたらばよき團扇哉 宗 鑑  
あの雲はいなづまをまつたより哉 はせを  
杜若生ん繪書の來る日哉 釣 雪  
藪の雪柳ばかりは姿哉 探 丸  
皆かなとゝのはず

同集中

てにはとゝのはねやうに  
聞えてさにあらぬ句

や文字のくさぐさ  
行人や堀にはまらんむら薄 胡 及  
梧の葉やひとつかぶらん秋の風 圓 解  
撫子や蒔繪書人をうらむらん 越 人

文字なるべし。ながらといふをての字に替て遣はねばならぬてにはなり。てはながらに通ふ

右行ちがひたるや文字の条考へ合すべし。猶くさぐさのや文字集中句に見えざるは後編にいふべし

萱草は随分暑き花のいろ 全

もといふてにはにて。此外に晝兎凌霄百合などいろく暑きさまの花有事を余情にこめしものてには

也。其中より萱草を見付出したる手がら有べし

昌陸の松とは。盡ぬ御代の春。利 重

いひたきとあれど御代と有にはどかりて暑

サ 鶏の聲もきこゆる山ざくら 凡 兆

切字なし。桐一葉にいふ所なれば暑す

サ 鼠ども春の夜あれそ花靱 半 殘

此てには前にいへば合せ見るべし。是にてはとゝの

はず

ア ちるたびに兒ぞ拾ひぬけしの花 吉 次

物いはじたどさへ秋のかなしきよ 舟 泉

しかして上へかへるてにはなり

桶の輪やきれて啼やむきりくす 昌 房

うたがひのやなり。切るゝやにあらず

松の葉や細きにも似ず秋の聲 風 國

やはのとも有たきやうなれど。秋の聲をつよく聞せんとてのやの正例也。すは別格也。すしてすけり恨

みずや杯遣ふ。言結るすは又違へり

サ 夜神樂や鼻息白し。面の内 其 角

鶏頭や雁の來るとき猶赤し。翁

白しは白き。赤しは赤き。とも有たきやうにおもは

るれどさにあらず。霜夜のしんくと物寂たるに。

神樂の面の息見ゆるがどし。是句の魂なり。白きと

遣ひては句をなさず。上のやは。くつろけたるや

にて。やの正例なり。夜神樂にとせば是も句をなさ

ず。けいとうの句も是に同じ

ソ 明月や灰ふきすてる陰もなし 不 玉

明月や遠見の松に人もなし 圃 水

切字二所有やうに思はるれどしからず。かくのどき

の句作。常よく有事にて。今も点取などの懐帯を



見るに。なしをなき。赤しを赤き。など加筆せし判者もあれど。そはてにはにくはしからぬ故の事なり猶次の條にいふべし

、初雪や門に橋あり夕間暮 其角

是も切字二所有て。ありはあるとせねばならぬやうなれど。ありといふも切字にてはなし。詞なりありとの字に引れて。有り無しと活て一ツの格となりたる物なり。其角はよく此事を知て門に橋ありと手づよく遣はれしなり。是に紛れて前の白し赤しは又異なり。白は白。赤は赤にて語をなせばなり。有はあと斗にては語をなさず

サ 大比叡やはこぶ野菜の露しけし 野童

、七夕やあまりいそがばころぶべし 杜若

前になぞらへしるべし後へん又講義にいふべし

フ 霜月や鶴のつくく並び居て 荷兮

此るてはつむるてにて切也。つといふべきを。つと活したるなり。ての活てつとなる。又重ねてつともなる。つはての居たる也。是等は祕傳口授と

やらんいひてもよき所ならんか。一ツいふ事をかくして遣ふ。てには此外にも數とあり。其かくれたるをしらで。表にあらはれたる所をのみいひ。彼是理非をいふは。童の如しと古學家にて笑へり。されど荷兮も此意もて作られしかはしらす

ア 凧の松の葉馬ふんかきかきと連立て 野水

是も前のとて同じ。意は連立つといふ句なるべしさなくては切るゝ所なし

サ 風流のはじめや奥の田うゑ哥 翁

ソ 無葉花や廣葉にむかふ夕すゞみ 惟然

中のやといふ一格。切るゝやと思ふべからず

、春の野やいづれの草にかぶれけん 爲紅

ア 野の宮や年の且且はいかならん 掛什

サ 佐保姫や深井の面いかならん 鼠彈

野の宮のやは正例なり。野の宮故元日にはきつと元日らしき事があるかいかならんと推したる句也佐保姫の句は是に似て少し違へり

ア 菜の花や杉菜の土手のあひくゝに 長虹

此類は下に詞をふくむ意

ソ 行としや親に白髪をかくしけり 越人

、蓮翹(蓮)や其望の日としをれけり 胡及

行年に蓮翹も。ともにすべきやうなるを。やの正義を立かく遣へり。やの正義は切の事にかゝはらず一ツのてにはなり。されど此頃は此教へ見えす。やと切ていはゆる二段切といふてにはにして見れば。行年の方はよけんなれど。蓮翹の方はいかにぞ聞ゆ。傳なくもかく變格にてとゝのひしは自然なる物也

ア 初雪やおしにぎる手の奇麗也 傘下

ア 永日や鐘つく跡もくれぬなり ト枝

二句とも歎息のやにて切。たりなりは言放したる輕きてにはにて心なし。歎息のやとて。俳書の教にいふふいたはしやうらめしやはかなやかなしや物うさやなげなや此類のみ歎息と思ふべからず。嬉しきにも面白にも感心したる時の事を歎息といふ。歎きの事のみにはよらず。かく同じ事幾度も言を。うるさしとなおもひそ。戀といふ事にも是に似し事有。戀の葉にいへば略。此事我友老俳に語り。

不請こは古學を學びざるが故なり

、物好やむかしの春のまゝならん 越人

サ 春雨や屋根の小草に花咲ぬ 嵐帟

是はくつろけたるや也。切の論にかゝはらず。松嶋や鶴に身をかれほとゝぎす 曾良 是も歎息のやなり。名所のやといふ名をかし名所にあらで遣ふものを

右や文字のくさくは是になぞらへしるべし。此外にもよきとあしきとあれど。うるさければ不舉余は後編又講義に

ス こねかへす道も師走の市のさま 曾良

ソ 田植哥までなる兒のうたひ出し 重行

ア あゝ立たひとり立たる冬の宿 荷兮

ス ほとゝぎす啼々風が雨となる 利牛

ソ 職人の帷子着たる夕すゞみ 土芳

此のはがに通ひ定たる結びにて切るゝ也

ア 肩つけはいくよになりぬ 長閑也 冬文

七下大鏡曰津守の哥いしくよになりぬ玉津しまひめ此うたの詞をつみしといふさも有べし。てにはの事は圖の



ア 舞姫にいく度指を折にけり 荷 兮

どく二重にとよのへり 此なりはありのなりといふ俗に長閑ぢや長閑であるといふ心也  
同大かゞみに元日より白馬 踏哥 端午 豊明と五度也 爰にて治定したればけりと留りたる物なり。古往今來珍らしきてにはにて。中々凡慮の及ぶべき所にあらずと書れしは。此作者てにはくはしからぬ故のとなり。古學にては變格として常に遣ふ珍らしき事にあらずをしむらくは此句。舞姫にいくたびもと。の字あらば。いく度と察したる詞は濟て。五節の事も慥に含めり。是又字あまりの正例也。凡慮に及ばぬといふ程のてにはにてはなし

同集中定りたる切字なくしてとよのひたる句

サ 藏ならぶ裏は乙鳥の通ひみち 凡 兆  
、うき友にかまれて猫の空ながめ 去 來  
、欄干に夜ちる花の立すがた 羽 紅  
、おちつきは魚屋任せの櫻狩 利 牛  
ゾ 伏見かと茶たねの上の桃の花 雪 芝

右に擧たる句と定りたる截断字なし。上のかゝりてにをばとどものよりかゝり。下は動かぬ詞にて結たる物なり。のよりかゝるのうち。ぞに通ふのあり。がに通ふのあり。にはのに有。物をのをあり味ふべし。皆徒のかゝりにて下に請る切字なければ。是等を元祿のをしへには玄妙 心の切 無名切 中の切 挨拶切。に回しを回し或は天ぢやの地ぢやの挨拶の挨拶ぢやのと言て用に立す迂遠なり。皆うち捨て。安き古學にならひ給へかし

ア 袖すりて松の葉契るけさの春 梅 古  
、さまぐの過しをおもふ年の暮 除 風  
ス 初雪にことしも袴着て歸る 埜 水  
ハ ちり椿あまりもろさに繼で見ると 野 披  
、百姓も麥に取つく茶摘唄 去 來  
サ 人に似て猿も手をくむ秋の風 珍 碩  
是等の句前に似てさにあらず。定たる切字あり教にいはざる所なれば其一二を擧

ア 澤庵の墓を別れの秋の暮 文 鱗  
、門松を賣て蛤一荷ひ 内 習  
ゾ 余所に寝て團子の夜着の年の暮 支 考  
ス 踊べきほどにはゑふて盆の月 李 由  
、鋸にからきめ見せて花椿 嵐 雪  
、なじませて鶯一羽としの暮 知 月  
サ 常齋にはづれてけふは花の鳥 千 那  
ア すびつさへすごきに夏の炭俵 其 角  
、上下のさはらぬやうに神の梅 昌 碧  
、からながら師走の市にうるさとい 越 人  
サ 雑水の名所ならば冬籠 其 角  
、待中の正月もはやくだり月 揚 水  
ス みなぐに咲揃はねど梅の花 野 坡  
サ 此暮も又くり返し同じ事 杉 風  
ア 曉をむつかしさに啼蛙 越 人  
、いそがしき春を雀の柿袴 酒 堂  
ア 柿のなるもとを子供の寄處 利 牛  
ハ 霜寒き旅寝に蚊屋を着せ申 如 行  
ア 玉敷の衣かへよとかへり花 荷 兮

いろは四十七字皆切字といふ説

古人曰。いろは四十七字皆切字なりと。古人は誰去來抄曰先師曰。切字に用る時は四十七字皆切字なり。蓼太が雪の幸に幽齋法印。白雄寂葉には許六云とあり。こは古人の説あるを。許六のいはれしなるべし。支元がいろは切には羽官と有。羽官何人か知らず。此事あれこれの書にも見え。予も若き時より聞しとながら。いかにおもひめぐらせども。あまりあらしきをへにより用にたゝず。たまぐ老たる人に聞ば。遣ひやうによりて皆切字ならざるはなしなどいひて蒙朧たり。今は昔三十年程跡。切字四十七字辨といふ物有。おのゝ引句を擧。折本にし書肆に出たり。今求るにさらになし。近頃それに類し。いろは切といふ物あり。此書わけもなきひが事のみ書載たり。是等の書爰に取出いふべくもあらねど。四十七字皆切字といふ事を頑に思ひ信じて。かくのごと板本にさへ出したれば。初學の人々天疎のたれかれ。十人に一人は。是等の事に心迷はざるもあらんかと思ひて



書出たるなり 惜いろは四十七字。皆切字なりと教へしをハをカをシへと言下す故は。五十韻五十字の内 い う え の文字ふたつ宛あるを一ツ取のけ。高野大師の作りたまふ。いろは四十七字残らず切字といへど。切字にはあらずかなもがなけりらんましのどく。二字三字組て切といふにもなれり。又一字にて。くすつふむるやかぞなども。くは咲すは任と。上の活きによりて切となる。やかぞなども。上のかよりによりて切となれば。一字にて切るよといふ文字なし。四十七字皆てにはといはどハ内にも論すくならん。此てにはといふうちにも。あいうえおの五文字はてには遣はず。遣ふのは。い えは。や行うはわ行也。又わるちの三字も遣はざれば。てにはと言も四十七字の内彼カこれ四十二字には過ざるを。皆切字と古くいひ傳しよりあらしといふ也 然るを皆切字とかたくなに思ふにより。さまざまのひが事も出来て。板本になりたる其始に。是も手爾於葉と書誤る。支元支考が門葉ならば。支考は古今抄に手爾遠波とかゝれしものを

いろは切に羽官曰。伊呂波四十七字ひとつとして切ざるはなしと有により。句に作りて見せたるは  
イ ちるに 咲花の 文臺。二見 浮  
ロ 夜をそ ぞろ。身に 初秋の 天津 風  
ハ 黒かちも 實。角刀取の 身の こなれ  
ト 夕立の物く づるよと。見えて ゆく  
ル うきも 春。めでたの 空を 雨に 風  
ワ 我三ツ 輪。ぐみも 果さぬ 氷 風  
ウ 草庵に 搗米 五斗。としの 暮  
エ もまれく 裂る松が えちる ふどき  
オ 緞にらん 横にうるの お。窓の 秋  
マ 走れ馬。麥刈 空の 片くもり  
かくのごと。文臺のいの字。春のるの字。くづるよとのの字。松がえのえの字に。印を付。是を切字とせば。いかにも四十七字皆切字ならん。中にもをかしきは。うののおのの字。此字外に切かたなるべしと傍註せり。まの字は不切。走れのれの字の力にてまの字切字になると註せり。松がえ 此え誰どのへなどいふへなり。へと

通ふといへり。つたなきにもかぎりの有もの。かばかりの事は。彼支元が俳友の内にも誰か有て。早く絶板すべしハ杯諫言も有べきに思へば彼連も皆心よしと見えたり。かく思ふなかに大宗匠と名乗老人此書の跋に曰  
いろは切は支元が切字をあらたに句作せし也是はかの四十七字皆切字なりとあるにもとづきての巧言と見えたり。いづれも初心の爲には錦囊キシノウの賜開卷有益の先言見ずんば有べからず  
と書添しはいかにぞや。此外にも書くにいひたき事あまたあれど。いかに我門の初學の爲に道を教へんとて。我に敵をもとむるやうになりてもと筆をとどむ



俳諧茶話  
願言



刻俳諧茶話序

茶惠

俳諧者小技也。然且有道存焉。詩也歌也連也俳也、雖各異其名而其致則一也。是故四者皆至其精妙之域、則感鬼神動天地矣。無他晉子所謂句中之魂吏之能然耳。譬如風雲月露及人物禽獸山海艸木無一而不俳諧中之物也。今人動輒以俳諧爲戲玩、遂至僻慮邪思而墮落于俳之魔道。悲夫。我東杵顧言先生、蓋刀圭之暇、值雪曉則嘯其體、值花晨則吟其郁。或誦月之清輝、或詠霜之嚴肅、賦煙霞歌雲霧頌多風。而歡欣憂苦愁悶悲傷發之言舒其情。然皆不失蕉翁之遺韻。且以其道諄諄諭其門人。吾儕從而筆之輯成一卷、名曰俳諧茶話。今又刻之以省臆寫之勞云。

嘉永甲寅四月佛誕日

可磨齋一柯誤再書

義保 一藝 卿

雪のあした月の夕毎に師が庵を訪ふて、誰彼が書集めし茶話を、こたび同門一柯の上木するになん。こはもとよりの一時の間に應ぜしまでの事にて、猶あたらぬ解の多かるべけれど師はゆるさざれども、壁に耳あれば(二字題)ら高野の餘所にもれて、人々が貸してよと望まるゝも詮かたなし。やがて魯魚のあやまりも心苦しと、ひそかにかくははからひしなり。かの茶てふものは、よく人の渴を止むるなれど、あながち茶のかはきを止むるにはあらず。堀井の水のよければなり。茶話も又よく俳諧の渴を止めんや。是茶話の渴をとどむるにあらず、蕉翁の眞流を汲めるによれり。さはいへど、人の口にはあふや否や。我もしらず、師もしらず。後の陸羽を待んとす。

嘉永七年彌生

不物菴許一述



俳諧茶話

東杵菴顧言先生口述 門人筆記

一問云、當時蕉門・雪門・其角坐、其外にも一派く有て各々自門他門と申事、いかなる趣意にや。

一答、詩人唐に比し明に擬し、あるひは宋元に比する、作者詩家の常也。皆その繩墨を出る事あたはず。我が俳諧に至て又しかり。貞徳にあらざれば必ず宗因を稱し、芭蕉にあらず其角也と稱し、伊勢・美濃・雪門・杉家・葛飾と一派くにわかれたれど、他門はしらす其・嵐・杉・素は蕉翁の風を學べるものなれば、伊勢も美濃も同じ流れの水とおもふに、門戸の別くになりたるは、その人々蕉翁後後に、おのれくが見識を立て教えしまでの事にして、別に趣意あるにはあらず。されど其門人流傳して、おのづから一派くのやうに云なせる事、是自然の勢ひしからしむるものなれば、唯それのみにてうち過んはよかるべし。ことく敷自門他

門と臂を張り、別派也と心得んは非が事ならん。

一問云、貞徳・宗因はいかど。

一答、貞徳・宗因は蕉翁の風にはあらず、是は一派也。其作意みな本歌に俳諧歌あるが如く、其頃狂歌とてもてはやつたるを移して、連歌の狂句を宗祇の門人宗鑑作り始めし也。次で伊勢の守武、専ら是を世に弘めたり。その後松永貞徳、此一風を盛に興して、御傘といへるものを著して、その式を連歌に習ひて、連歌に二つのに準じて差別を立たり。是よりして俳諧の式始て定まれり。されば歌の俳諧体より連歌の俳諧体興りたる也。夫は宗鑑が老て思ひ付たるなるべし。同時に守武壯年にして此才に長じ、今も守武千句といふ書刊行せしもの残り。眞偽はしるべからず。宗鑑は師の連歌に及ぶ事あたはざるを看破して、別に洒落に作り出したる也。さるによつて筑波集并師の新筑波に習ひて、犬筑波といへる集を作りたり。則その名はや俳諧集の名に成たり。爰に古人の風流は深きところありてその

味ひあり。

一問云、許六が滑稽傳に、守武・宗鑑と次第したり、いか

一答、いかにもさう也。され共宗鑑、實に俳諧の權輿也。守武は是に次て行はれしもの也。宗鑑は隱者也、守武は伊勢の神職也。世に立交ると、世をいとひたるとの差別ありて、宗鑑は守武の跡に付たるやうに世の人く思ふ也。

一問云、晋子の句は解し難き事の多きに、幸に空然翁の五元集小鷗ありて、あらまはしは分りたれど、いまだしかと會得せざる句共まゝあり。先ッ、

日本の風呂吹といへ比叡山

此句、小鷗の註に、日本天台根本三千坊、比叡山といふことを斯興じたる也とあり、いかど。

一答、小鷗の解は、たゞそのあらましのみにて、猿蓑・炭だわらの注解のやうに委しくは書れぬなり。されば其餘意を黒案だけに説申べし。此句は晋子が句の中にても殊に解し難き句也。空然、始て此註を下せり。扱比

叡山は、傳教大師唐土の天台山に受法して飯朝の後、延暦中に日本へ始て天台宗を弘る根本、最初の山也。坊數三千坊あり。是よりの作意にして、晋子が弟子淡々なぞが好みし句風也。世に謎句といふ。されど晋子が滑稽洒落より出て一興の句作と知るべし。坊の字、ほんと讀の例也。されば風呂吹の句にはあらず、比叡山の句也。それへ風呂吹大根の洒落はたらきを見るべし。三千本の風呂吹と心裏言外に見えて、日本の二字動かすと知るべし。

一問云、

いざよひや龍眼肉のから衣

此句、小鷗の解に、十五夜明る迄月を賞玩して十六日の夜は、もはや專一と見る所の目もつかれたりといふ句なるべし。夫を例の洒落に龍眼肉のから衣と作りたる也。龍眼肉とはよくも思ひ寄たる手段、文字に力あり云。其文字の力といふところいかど。

一答、此ものゝ肉こそ薬にもなれ、売は不用のものなれば、我が眼もきのふは月の肉をよくく詠めたり。今



は眼も心も草臥たれば、龍眼肉の売も一樣にて十六夜の月はきのふの賞に及ばずと也。仍て龍眼肉の文字に力ありと云れたる也。

一問云、

芭蕉翁の沙彌かけものほしがりて、

繪讀を乞けるに

せめてもの貧乏柿にんめの花

此句、いまだ會得まいらず、いかゞ。

一荅、小鶺にいわく、蕉翁の沙彌乞けるに井ノノなるもおかしからず。扱、歌人の家のこのみにはと心寄たれば柿ひとつ畫がきて、人丸の垣ほの柿・窓の梅と讀したるなるべし。貧乏柿とはあやしき垣と云んとなり。

有<sup>レ</sup>梅山家得<sup>レ</sup>春の意也。通小町の謡曲に、歌人の家のこのみには、人丸の垣ほの柿、山の邊のさゝ栗・窓の梅・園の桃といふを取て一作せし也云々。今案するに、柿・垣・書、三字いづれもかきの訓ありて皆その意を含めり。餘響猶味ふべし。實に作中の作人と稱せられしもむべ也。

一問云、

氷肌玉骨とかや

昔見し花にも香にも梅の皮

此句いかゞ。

一荅、氷肌玉骨は李益が青梅の詩に、青梅如<sup>レ</sup>豆試<sup>ニ</sup>骨<sup>ニ</sup>新<sup>ラ</sup>。脆核虚中未<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>仁。勘<sup>ニ</sup>破<sup>ス</sup>レバ收<sup>レ</sup>香<sup>ヲ</sup>藏<sup>シ</sup>白<sup>ラ</sup>處<sup>ヲ</sup>。氷肌玉骨是<sup>レ</sup>前身。と是也。句意と題書とよく味ふべし。昔は氷肌玉骨なりしも、今は枯瘁の老木なりといふ意也。梅の皮とは力ありて尤絶妙といふべし。猶小鶺の注にて見るべし。

一問云、

芭蕉庵をとひて

鶯や十日過ても同じ梅

此句いかゞ。

一荅、端書にて思ひめぐらすべし。鶯はもはやはつ音を啼に只此梅は、すでに十日を過るといへども猶同じ姿にて、いまだ得開かざる花あり。されば老木とは聞ゆ。扱、小鶺に云、其角おのれを鶯に譬へ、翁を梅にたと

へし也云々。此解にては其角が自負のやうにも成るべくや。愚案にては只翁をさして作れる句なるべし。しか

らば翁平常跌坐靜心自若の有さま、無爲自得、三百六旬猶一日の如し、と言外に深く味ふべし。

一問云、

うぐひすに藥教ん聲のあや

此句いかゞ。

一荅、鶯は聲をもつて人に賞せらる。人間に音聲をよくする藥あれど、鶯に音聲の藥なし。もし鶯によき藥を我知りたらんには、此うへいかなる妙聲も發せしむべきものを、人と飛鳥と生を隔つれば、只此鶯を聞く度に歎息すと、洒落せし句意なるべし。あやは文にて猶艶といふが如し。

一問云、

腕押のわれならなくに梅の花

此句いかゞ。

一荅、人は欲あるゆへに争て衆人に冠たらん事を欲すれども、此梅は無心にして、おのづから百花の魁とも

てはやさるゝ也と、觀想の意にして、腕押は俗に腕たてといふが如し。猶小鶺の解にて味ふべし。

一問云、

鶯の身を逆にはつねかな

此句いかゞ。

一荅、うぐひすの立春に至りて樹上に來り、轉々反側してはつ音を發するは、まさに人の聞あらんを欲するに似たり。一聲既に發すれば人皆これを賞す。凡物事歎賞を得るには劬勞して始めてこれを得る也。角が句を作るも亦然り。身を逆にとは、一聲すでに力を務むるの意也。句の頭書に止丘隅とあるは、鶯は其とどまる處を知りて、かえつて人よりもまさる事のあるものをといふを表せり。猶小鶺の解見るべし。

一問云、

茶抄にとまりたる繪に

うぐひすの曲たる枝を削けん

此句いかゞ。

一荅、鶯の曲たる枝は餘の木にてはなく竹をいふ也。其



鶯の踏、曲たる竹を以て茶抄を作りたるやらん、さなくば今又來て此茶抄にとまりはせまじと打興じたる意也。

一問云、

待乳山こよひ満り棹のふとんにのる鳥

此句、待乳山よりの眺望、眼前体也と小鷗に注あり。猶こまかに承り度。

一荅、こよひ満りといひて十五夜を含めり。月光あきらかにして白晝の如きに、鳥もいまだ森に歸らずして、猪牙舟の小蒲團に人なきをうかどひ寄りたる様を句作れる也。棹のふとんといふにて舟を含みたり。晋子が句作如し此所多し。よくその境に入らざれば聞得る事かたし。

一問云、

しかぞすむ茶師は旅ねの十三夜

此句、小鷗に、是は宇治の茶師といふ事を、鹿ぞすむと句作れる也とあり。其外に何ぞ意味ある事にや。

一荅、別に子細はあるべからず。晋子の滑稽大概斯の如

し。上林某などの旅寐の頭を思ひ出せし句也。

一問云、

茶もらひに此晚鐘を山ざくら

此句いかゞ。

一荅、小鷗に、茶もらひ一服と所望して腰うちかけて休ふは、此山櫻の入相の鐘撞の風情を見んが爲也といふ句なり。入相の鐘をやまと懸言葉に取たる手爾葉也云。此句唯吟じたる斗りにては、初心の聞得がたき手爾葉也。惣て句作のこなし、理屈より出てその理屈、道理をのがれて一句の姿をなすは、晋子が句作の強みを覺えて自由自在の手爾葉をあやつるべし。句の善悪は時に取て出来不出来あれども、こなしの自在なる事、實に蕉翁の高足なるべし。扱此頃初心の句に、

鎌倉に杖の集る十夜かな

といふ句を作りたり。是にては年寄の多く集る事を理屈に云立たり。されば句とは云がたし。杖千本の十夜哉と一直してこそ、理屈を離れて發句の姿は出来たり。されば初心には聞得る事かたくなるなれば、古人

の手段は初學の聞得ざるは元よりの事と心得て、よく

其句を聞分るやうに執行すべき事肝要也。古事に據り

歌を引き、あるひは詩を引きたる句は、その事にたづ

さはらざれば聞得る事ならぬことなり也。さまでも

なき句の聞えざるは、此道の執行・師傳の元手薄きゆ

へと覺えべし。

一問云、晋子が書れし終焉の記を、世の中に枯尾花の序

といふは誤りにて、文体も序の格にあらず。されば宗

祇法師の終焉の記によりて書たるものによ。

一荅、さも有べし。元祿七年十月十八日、此日翁の初七

日にて百韻興行あり。右の集を枯尾花と標題す。其集

の始にこの終焉の記を出せり。依て世に枯尾花の序と

心得たるは實に誤也。猶文中に、愚かに終焉の記を残

し侍る也とあるにて明か也。

一問云、終焉の記に三更月下入無我といふを、宜麥の註

に、入無我は入我・我入對したる所の一体也といへり。

いかゞ。

一荅、宜麥の註當らず。そは江湖風月集卷一、三山ノ偃溪

聞和尚の偈に、路ニ不資<sup>カ</sup>糧<sup>ヲ</sup>笑<sup>テ</sup>復歌<sup>フ</sup>、三更月下入<sup>ル</sup>

無<sup>ク</sup>何<sup>ニ</sup>。大平誰<sup>カ</sup>整<sup>ヘ</sup>閑<sup>カ</sup>戈<sup>ヲ</sup>甲<sup>ヲ</sup>。王庫初<sup>ニ</sup>無<sup>ク</sup>如<sup>キ</sup>是<sup>ノ</sup>刀<sup>一</sup>。

と是也。其角、暗記の一失にて、何を我に書誤りたる

也。

一問云、曠野集に、

蓮の實のぬけ盡したか蓮の實か 越人

此句、ある人の説に、越人、素堂亭へ行に、例の蓮池よ

り蓮の實を取りてもてなすに、皆くひ盡して、ぬけ盡

したる蓮の實がもうないかと、馳走を忝くするの挨拶

也。物を残すは不敬にあたれば、かくは興せし句作也

といへり。いかゞ。

一荅、さにはあらざるべし。越人が素堂の所へ行て蓮の

實の馳走にあひたるにもせよ、皆喰ひ盡して、ぬけ盡

したる蓮の實がもうないかと、馳走を忝くするの挨拶

也とはおかしからず。愚案にては、蓮は花の清香なる

もの也とも云て、佛家その清香を愛して、専ら蓮花を

玩びて佛坐とも成し、又淨土の池中、其花の大車輪の

如しとも説り。唐土には美人の顔にもたとへたり。



芙蓉ミズアザミ不レ及美人メカノ粧シといふも、其蓮花の清香の、かたちよりはまたまさりて美人なりといふ事也。芙蓉といふは即ち蓮花の事也。今いふ芙蓉は木芙蓉といふもの也。素堂は山口氏某の隠遁したる也。かの謝靈運が癖を傳へて蓮を愛せり。蓮菴と云、素堂といふ。尤白蓮を愛せしと見えたり。其氣性清潔たる、推して見るべし。その素堂に對して、越人亦其向上の趣意を句作れり。其ゆへは、此清香淨潔の蓮に實の多くみゆる事こそ本意なけれ。されば蓮の實は皆ぬけ盡して跡かたもなく、売ばかりに成たるが蓮の實の本意であるかといふ句作にして、尤蓮の實情を尋出し見附出したる向上の趣向也。唯ひと通りの挨拶・洒落の句にてはあるまじ。

朝顔アサガオや此花にして實の多きといふ句をもつて解すべし。此句、作者忘れたり。おのづから句意明か也。一問云、祖翁の附合に偽作ありと、宜麥が申されたるよし、さやうの事にや。

一答、それは畫歌仙といふ書の序に、芭蕉の俳諧三百五十卷の中百五十卷は偽作也と、宜麥が自筆にて書れたり。猶又別に其偽作の卷、一句毎に凡俗也、精神なしなど評してあり。是も自筆にて書れたり。其書もいつぞや見すべし。實に宜叟は卓見にして、凡眼の及ぶ處にあらず。

一問云、古來傳書に百韻四花八月のうち定坐を立て、みだりになす事を禁す。それは月花の景物、連俳の眼目なれば、短句にさせまじき爲也といへり。右の如く心得てよろしきや。

一答、しかなり。宗祇法師なども是等の事云置れたれば、さる事あるべし。しかれども蕉翁の俳諧は、宗祇の連歌を本として俳言を用ひ、連歌の式を取て連歌の式を用ひず、規外の有規・規中の無規と深意より出たり。規を守る時は連歌一轉の俳意なく、規を守らざる時は俳諧の連歌といふ意なし。されば四花八月は、百韻の式なれば缺く事あたはず。されど長短句の差別なく、時宜により差合・去嫌の場をよく見定めて居ゆる

人目にたつと引なぐる珠數 酒堂

一息に地主權現の花ざかり 其角

○句兄弟名殘裏四句目花

老たるは御簾より外に畏り 芭蕉

花の名にくしどこか楊貴妃 彫棠

一問云、や哉ややけりの事は、猿蓑逆志抄にて會得いたしたれど、疑のやと申はいかなる事にや。

一答、やの字、上下の味ひにて詠とも疑ともわかるゝ事也。

よひの雨しるや土筆の長短か 闇指

かれはてゝ名にも耻すや女郎花 杉風

すこゝとつむや摘ますや土筆 其角

夕やみは螢もしるや酒ばやし 水鷗

すゞしやとむしろもてる川の端 野水

これらはいづれも疑のやの正しき例也。いつたれなど云詞の下には、やはつかはぬ例也。かは遣ふ也。たとへば、いつからかみると遣ふ也。

けうときは鶯の栖や雲の峯 祐甫

也。依て蕉門に月花定坐といふ事なし。唯表には月なくてかなはず、裏に月花なくてかなはずと知るべし。されど今時の老俳、片腹いたき事どものゝしりて、祖傳の師傳のと口走るやから多ければ、猶わが覺えたる證句一二をいふべし。

○花摘表四句目月

川舟の綱にほたるを引立て 會良

鶉の飛あとに見ゆる三日月 釣雪

○伊達衣名殘表十句目月

伽になる鳥鴨の餌をしたひ 等窮

四五日月を見たる蟹の屋 栗齋

○ひさご表六句目月

紫蘇の實をかますに入らゝ夕間暮 珍碩

親子并びて月に物くふ 全

○同集裏十句目月花結ぶ

旅姿稚き人の姫つれて 路通

花はあかいよ月は朧夜 全

○桃實集名殘裏三句目花



是はかといふべきを、やにあやまれる也。

春雨のあるかや軒になく雀 羽紅  
柳よき陰ぞこゝらに鞠なきや 重五  
これらいづれもかと云て叶ふ句也。又かは問ふ心也。  
やはおもふ心也。

奥山はあられに減るか岩の角 湍水

千子が身まかりけるをきよて、み

の國より去來がもとへ申つかは

し侍ける

なき人の小袖も今や土用干 芭蕉  
らん けんなど置べき所も、みなはぶきたる例のみ也。  
これを中のかといふ也。但し略すと略  
まぬと二例なり

春の夜はたれか初瀬の堂籠り 曾良  
いく人かしぐれかけぬく せたの橋 丈草  
たれ人かこも着ています 花の春 はせを  
天井まもりいつか色づく 去來  
夕立にどの大名か一トしほり 傘下  
是等にて知るべし。又、

内藏頭かとよぶ聲はたれ 乙州  
名月や富士みゆるかと 駿河町 素龍  
盆の月ねたかと門をたきけり 野坡  
これらのかとは、みな カト見テ カトキ、テ カトシテ  
カト思フテ カトイフテ などの  
心也。

一問云、中のやといふあり、いかど。

一答、中のやに二例あり。下のうち合せを畧すと、畧さぬと也。中のかに同じ。

永き日 やけるをさきのふにわす 荷兮  
子 やまたんあまり雲雀の高あがり 杉風  
たふとさのなみだ や直にこほらん 越人  
是等皆中のやの正しき例也。又畧せる例ならば、  
さみだれにかくれぬもの や勢田の橋 はせを  
たびねして見しや浮世の煤掃 全  
名月に麓の霧や田のくもり 全  
梅白しきのふ や雀を盗まれし 全  
象浮の雨や西施が合歡の花 全  
夕立に傘かる家やま 一町 圃水

ながれ木の根やあらはる 花の瀧 如雪  
風流のはじめや奥の田植唄 芭蕉  
すみれ草小鍋あらひし跡やこれ 曲翠  
鷹ゆくかたや白子若松 芭蕉  
山や花かきねの酒ばやし 龜洞  
麥跡の田植やおそき螢どき 許六  
見おほえんこやあらたまの年の海 長虹  
笠島やいづこ五月のぬかり道 芭蕉  
水鶏なくと人のいへばやさや廻り 全  
是等の類也。

一問云、よの字の義いかど。

一答、よの心は上の詠のやの眞反也。五十音ヤとヨと眞反也。やはむかふへとどかぬ心、よはこなたのあとの方へとどかぬ心也。いなばのそよといふ人のなきなどよめるそよは、俗語にソレヨといふ心也。此故にこのよはあり過たる事を思ひかへすほどの心也。これその今の場よりは、うしろの方にて循せられぬ場となりてある也。こゝの差別よく辨ふべし。これを知ら

ぬやからは、思はずよ うらみずよ など、心得もなく常によむぞかし。此心ならで此よを用ひば、あたぬ所もいでくべき也。やとよとよ味はど、眞反なる事手にとるが如くなるべし。

ちる花は酒ぬす人よく 舟泉

ちる花はあはれなる物とのみおもへば、酒ぬす人とは、人こもつかぬ事を歎息せる心也。この心をもてやと眞反なる事をさとるべし。

一問云、詠のよといふはいかど。

一答、

あかくと日はつれなくも秋の風 はせを  
笠ぬぎて無理にもぬる 北時雨 野水  
またも大事の鮮をとり出す 去來  
是皆詠のよ也。

一問云、なの字の義いかど。

一答、此なは物の持合の他のをよばざる歎息也。たとへば飯を食する時、そへてくふ物を俗には菜といふ。いにしへは是をなといへり。そのいにしへなといひし



を、音にて後世はサイといふなるべし。さて今菜といふは、魚肉をも野菜をも押くるめていふ事、すなはちいにしへのなといふ義にて、今なといふは野菜の方にばかり残りて、魚にはいはぬやうになれり。今サイといふはかへつていにせよさればなといへば、野菜の事とのみ世には心得たれど、さにあらず。すべてなとは、魚肉・野菜ともに、飯にそへてくふ物の名也としるべし。此なといふ名の義も飯とよく持合て、他の菓子などはおよばざるがゆへの名也。これひとつをもても、なといふ詠嘆の心はしるべし。

むさんやなかぶとの下のきりくす はせを

二日にもぬかりはせじな花の春 全

落葉かく身はつぶねともならばやな 越人

是等の句にてもさとりるべし。

人々の書留の

内より四時の吟

撰出し

蓬萊や見勝手もなく思はるゝ 塾熊  
輪かざりをほぐれて來たり春の風 柯調  
折取て尾花かざゝん鱸かな 吟蛙  
明月や水見とめればもとの空 顧夕  
花撰む心もつかであさ櫻 許一  
落ついた日の暮やうぞ濱の秋 空宜  
試に水もゑらまぬ新茶哉 言蘭  
あらかねの土に成る身を厚衾 榊柯  
ちる櫻既に彌生も吹濟す 下總 柯丈  
市の雪積り直して暮にけり 東和  
うぐひすやくつるいで來る跡の聲 蘆舟  
心には松島書んほとゝぎす 月草  
武藏野のうけらが花歎雨後の月 記月  
瓜むけばはや松風のそよぎけり 杉宇  
駕下りて朝涼拾ふ繩手かな 女 柯明  
産毛剃る手元へ來るや冬の蠅 李蝶  
橋越せどもとのひとりよ寒念佛 爲水

俳諧茶話終

目印の柳へ戻る野みち哉 且山  
藤の花眠しくと鐘が鳴る 景里  
けふの月さて夫からも待れける 一柯  
むつみあふて夜は氷るらめ鴛二ツ 靜雅  
寒梅や客をまふけの新疊 一仙  
秋近う成りぬ寐おくれ起おくれ 素學  
磯の香に四五丁酔ふや小春風 女 智光  
朝兒のけふもひと重に咲にけり 秋良  
春雨を我がもの顔のわら家哉 柯月  
炎天や豆の飛込む隣畑 惠雨  
青柳や吹井の水ののみ心 汝柳  
名月が春は朧でおもしろし 女 宜麥  
爪琴に夜も霞まれて春の月 壽扇  
降ぬけて一際立ちぬ天の河 柯正  
鶯の來る木占へ雲の中 顧言

かの禪師が唐茶の鍋煎はいさ知らず。番茶の澁の流出れたるに、爐中の糖をかき立つ、風話の耳にとどまりて、二三子が早くもよく悟りたるは、汝村が稱嘆せる六ツの徳とやいはん。されば此けぶりには、落花の風もおろそかには吹まじと、そとろに自慢顔して、山吹の盛り過るころ、松尾の松の千代かけて忍川巢の、氏より育つ素學が、莖長に卷末へ書つけ侍りぬ。素學



不<sup>ふ</sup>白<sup>はく</sup>翁<sup>おう</sup>句<sup>く</sup>集<sup>しふ</sup>



寛政戊午季冬

蔭涼謙堂書



謙堂氏

不白翁句集叙

金剛劍

本邦之和歌猶如中華之詩也凡有感於情必形於言奚謂之異於其撰乎哉和歌之道岐而有聯歌有俳歌亦如詩有古風近體然其溫柔敦厚優遊不迫此愈於彼也遠矣蓋藉本邦之性情使然焉耳斯集者蓮華老翁良辰美夕弄花嘯月所寓情于俳辭之麗什也翁雖固不用意締構乎其天然韻致可挹而知矣自壯至老前後諷咏無一不留稿者矣振一亭主室邇交密事則隨聞隨記之珍襲輒整然成卷翁令嗣日一卷主得之珍顧不唯弊帚千金遂謀上梓廣布同志顧微余辨言夫翁之德之劭也實足不朽乎千載豈假斯一集雖余不能爲皇甫抑復爲曹丘乎翁天資坦率不脩邊幅不狹不泛齡踰八十猶尙矍鑠真神仙人矣且至若其粹於茶儀則海內嚮慕之誠如山咨康亦可謂盛矣

不白翁句集序

茲に蓮華菴のあるじ不白翁は、茶道の先達にして盧玉川が皮、陸桑亭が肉、利抛釜の骨を得たる人也。紀劬新宮の産にして、姓は藤原、氏は川上といふ。すなはち新宮侯につかへて江都にいたり、十六歳の時千先生如心齋の門に入、京師に赴き、千家をあるじとして茶道を學び、默雷菴宗雪といふ。しかりしよりこのかた、日夜の修行。功夫・練磨は、礪礪もて美玉の明をてらし、礪砥もて雄劍の靈をあらはすがどく、此道の奥儀悉く成就しければ、普く天下に千家の風を弘めんものは、汝にあらでは、いでや東都に赴て身を立、揚名して我をあらはせよと、如師の嚴命をうけ、旅立ける時

秋風に乗て歸るや東人如心

と錢別の一句は、是もろこしの飛衛が射を甘蠅に學て巧なる事、其師に過たりといふにたとへて翁をよみし。又沖虚真人が風を御したる古事によて、誠に譽れある賜なり。すなはち習として此清風に乗じつゝ江府におもむき、するが臺に默雷菴をつくり、柴崎の社の傍には蓮華菴をいとなみ、左に酒瓶を提げ、右に茶釜を曳て、一た



び不寐菴の紫旗をひるがへせば、地位清高の蒼生、千となく萬となく、皆風を望て門下にすゝむ。然れば竹園の花閣・松林の月亭に招引され、聚螢の草廬・映雪の野家に逢迎せらる。亦、向上宗乘堅固法身の樞機は大徳寺大龍禪師に參禪し、大道無門の關を蹴破て乾坤獨歩の躬となりしかば、竜師是に萬里一條鉄の錫杖を打て孤峰不白居士といふ。因て其友とするの智識は、大川・萬輝・無學・龍門。萬保・大嶺、其外黃檗山の湛江和尚・本方寺の貫主日詮上人のたぐひ、皆碩學の高僧也。長入・宗哲・淨益・正玄・利齋・庄右衛門が輩は、もとよりのしたしみにして擧るにいとまあらず。曾て翁の風雅あまりあるや、若き時は沾洲に會し、壯年には珪琳に逢、老ては我雪中菴の蓼太叟にちなみて、花に月に或は畫賛、物く〜にふれつゝおもひを述し詠あり。又今の玄廬は我白屋に隣れば、常に行かふて雨に零に芭蕉翁の迹追て、冬の日の閑居に炭俵の口をほぐし、猿が人まねの蓑笠に四五輩の考參ては、彼橘中の仙人のたのしみをたのしむがどし。されば此夜

話の折く〜のむかし語に、口よりまろび出る玉の言葉も、我に琢よ磨けよとあるをしるしとどめしを見れば、いつしか二百三十余章こそありけれ。是を、いとまなき我筆のいとまにつらね置しを、或時日々菴のあるじ見つゝ、是はこれ阿父の風骨、吾家の寶貨也。此集に序して得させよとあるにまかせつゝ、短才の疎毫、鄙序はどかりなきにはあらねど、たゞ其聞けるまゝを述けらし。嗚呼、茶者南方嘉木、翁乃紀陽英兒、遐齡八十益壯。孤峯不白居士、別号は蓮花菴・默雷菴・不羨齋・亭々亭・圓頓齋といふ。けに長命は飲茶にありとか。唐帝いませば、此翁も又保壽亭におらしめ玉はむ。仍て狀し因て序す。後の此集を見んものは、翁の風流雅清、高年、令名、もておもひ、もてうらやみ、もてしたはざらんやとしかいふ。

寛政戊午仲秋

雪太郎三駱誌

良太雪 駱三

不白翁句集

雪太郎三駱撰

春之部

歳且

茶の道や古きをもてけさの春  
若水や夏より清き朝ほらけ  
門く〜や何里目出たき松の春  
うら白や表はあをき松の門  
あたらしき海の詠やけさの春  
松建て是へましませはつ日かけ  
しづかさや門には松に松のかけ  
去年は老としは若し松の色  
我菴は臺司の方を恵方哉  
大ぶくやかかはらぬ色を初むかし  
元日甲子  
あら玉の玉をうち出の初日哉

鷺峯みるや世界の別の春

孤峯不白は大竜禪師の賜ひし号なり。仍て老の身の樂しびは、やすくながからむものなと、安永二年の春よりはこれをもて我名とし、宗雪をば嗣子宗引に譲て

ゆづりははの末葉こやせよ千世の春

天府君より、浪花のふる國とやらんが、住よしの小松引てまいらせたりし其松の根に付たる土にて、茶わん造りてと好みこし玉へるに手づくれしつゝ、岸に生てふとよみしわすれ草と名づけてまいらせける

此松にひかれて老をわすれ草

若菜 猿 鳥追

雪の間をまたニツ葉のわかかな  
雪のゝを先駈したり若なつみ  
飛く〜に跡うつなみや磯若菜  
猿引や世わたる業も綱わたり  
鳥追やだみし調子もはるの風



梅

雪どけの垣ねつたひや梅花  
梅がよや隣もおなじ朝ほらけ  
梅もたぬ軒の端もなし里つとき  
神鏡にひづまぬ梅のすはひ哉

鶯

うぐひすの南向てはつ音哉  
鶯や啼そむる日を揚松葉  
うぐひすや朝ねの窓の夢に入

身延

黄鳥や通本橋のたに間より

霞

雪いまだ遠山白し夕がすみ  
帆にかすむ大江の岸やみほつくし

春雪 春雨

日々菴にて茶湯の時、侍合にありしうち、  
牙返りつゝ雪の降出しけるに

淡雪の降も茶湯の花香哉

宗雪云、其前の花生は無銘にてありしかば、すなはち乞  
て淡雪と銘せられし。

はるなれや櫻となつて暮の雪  
春雨や枕も榮花物がたり  
此ごろや去年は何して春雨

若草

若草や是より右へ春日山

洛外

わか草や乾坤杖の立所  
蒲公や野渡まつ夢の枕元

春風 春月

冬としの皺をのしてや春風  
しら梅の誰すむ宿ぞ朧月  
雲と見し花より出たり春月

柳

青柳や水なでよは見く

清水にて

願へたよ慈悲の光の柳かな

角田川渡舟贊

船頭のはなしを聞ば柳かな

初午

初午や福不可量の種おろし

涅槃 東福寺にて

涅槃會や香のけぶりの夕霞

雉子 鳥巢 蝶 蛙

刈残す薄に花の雉子かな  
鳥巢に僧も宿かる山路かな  
葉を喰た身に花吸て小蝶哉  
雨近き野澤の月やなく蛙  
新田に隠居家建て蛙かな

春日

はるの日や遅牛も淀鳥羽繩手  
永き日や繪馬をみてゐる旅の人

利休息

抛てる茶筌に花の匂ひかな

聚光院詣

春毎に勅許の居士や塚の花

紫のゆかりあればや大徳寺の聚光院に靈をと

どめ給ふ不審菴掘筌齊利休居士の寶塔を、東  
都万松山東海禪林にうつしよてと思ひ立しよ  
り、いづれか此靈地ならんと、大徳寺三百七  
十世萬輝禪師、宗旭大和尚の東海寺九十二世  
の輪番はてゝ爰の清光院に在し玉ふに合鉢し  
て、そこらもとむるに、清光に隣れる琳光院  
は堂宇荒廢し、近ごろは住なせる僧もなく、  
庭は荊蕀心のまゝにひろがり、狐狸もえたる  
栖とやなすらん。是を再興し、且法塔建んは  
猶功德大ならんと思ひけるころ、相摸國の杜  
多なるが、觀自在菩薩の御厨子再興に御佛負  
奉て此精舎に來つる。其破れたる厨子のうち  
に識の箭入たり。折から佛意伺ひみんと信心  
して是をとるに、第十八番なり。識の詞にい  
はく、離暗出明時。麻衣變綠衣。舊憂終是退。  
遇祿應交輝。とあり。此識、奇なるかな妙な  
るか。出明は清光に應じ、變綠衣は身立の  
意、交輝は則萬輝也。遇祿は此大和尚、琳光  
院を中興し給ふべき兆にして、誠に佛意・祖意  
にもかかなひける大士の御教へと、發心決定し



て土石の功をつみ、居士の塔及び本堂・庫裏・門・塀迄悉く成就したり。殊に此門は、聚樂の御所の傍にありし居士の門を世に揚土門といひし、是をこゝに其模しよたる也。將、此事跡を林祭酒信言朝臣撰述ありしかば、禪師筆を揮て石上に勒し、猶万歳を祝し玉ふ。則此供養は明和五年戊子春二月二十八日、居士の祥忌正當也。東海寺一山の智識をはじめ、各僧侶を招待し、偈をもて拈香供養、如在の禮をもて敬て供佛齊僧。時に萬輝禪師一偈あり、

曰、

大千沙界現全身 一塔巍々東海濱  
地先苦深今洒掃 烟雲瓦礫爲生春

云々。因て我又謹て和。

毫端点出現全身 塔院中興東海濱  
葉破殘人無鼻孔 茶香偏滿万松春

落誠の慶讚、挿草の功績、既に事をはりぬれば、別に一句子を餘して

つぎ穂して古き匂ひや梅花

扱此院・此塔成就してより年々歳々の春、利休忌と号しつゝ此所に會して、先師如心齋の

巧夫に成し七事の式をもて、居士の靈を祭る事とはなりぬ。

めぐむ茶の恵みを摘て手向かな

東叡大王隨宜樂院の准后の宮、或時此琳光院に渡御ならせ玉ひけるに御茶奉りて

御園の花や竹田の森祝ひ

最上乘院法親王の上野の御本坊にめされて、御茶湯の事申上よと、おそれおほくも御師範の御ゆるし蒙りし時

伏てみる雲の上野の櫻かな

内裏へうちく献じ奉り玉ふよし、准后の宮のおほせを蒙り、御花生たてまつりけるころ

九重の花に仰ぐや一重切

長門少將重就朝臣、茶御稽古の日、或とき花月を題して

晴曇る中にひらくや月に花

巨福山建長寺の山門は、同國長谷寺の觀世音の御堂なりしを、むかし其御堂修補の時、其古材を引て建たりしものとかや。夫を又此開

山大覺蘭漢禪師五百年忌の法養に修營有しかば、土木の助予が微力を進めし時、此古柱一本乞とりて東都にひかせ、道安好の數寄屋にて、床柱に用ひたり。誠に千載の古木、友としてなを老を養ふべし。

活てみる春やむかしを花の友

三駱問、如何是茶。荅曰、

立歸みよ我宿のむめの花

花櫻

幾たびか又古道や櫻がり  
杖立ていづこへゆかむ山櫻

先師如心翁とよに嵯峨に遊びけるころ、西行堂にて

西行のむかしをけふの櫻哉

あらし山

いとほじの花やあらしの山櫻

野々宮

ちる花を雪に黒木の鳥居哉

清水

白雲もひとつに地主の櫻哉

予十五歳にて、手束弓紀の新宮を出しより十とせを経て歸國

古郷の春やむかしを夕櫻

白居士問鳥窠禪師、如何是佛法大意。窠云、諸惡莫作、衆善奉行。白笑曰、三才孩子如是。窠曰、三才孩子言可云、八十翁不能行云。嗚呼語なるかな、我心肝に砒す。

八十とせの耻を老木の櫻かな

一とせ蓼太老人、振々亭にあそびけるが、晝のほどはまだ蒼たりし花も、永き日のいつしか咲出たるゆふべを興じて、

とくさけと君やいひけん夕櫻

とありしをおもひいでく、朝櫻みばやと眠鳥・蒼鷺などがたらひ、此亭に夜込して

雲雪とさくや櫻の山かづら

雲林院に、英巖和尚の時、茶所の催ありければ、予、路次を櫻の一式と好けるを、如心齋甚感じ申されしが、其程もなく巖師遷化せられしより、此事もむなしくなりてやみにし。



其のち或とし膳所候へ茶に召れけるに宗哲を  
いざなひしが、此御城内に、櫻木の中に釣鐘  
の半ば草に埋たる有き。其さまいとおもしろ  
かりければ、宗哲が此所のさまを路次にせば  
興あるべしといへりしを、歸て後如師に語り  
ければ大に感激の余り、

つり鐘に櫻の路次のひとしくて

と口ずさみ、下の句決てのち、したよめあ  
たふべしとの玉ひしが、世中の其事この事に  
まぎるまうち、如師も又世を辭し申されしが、  
爰に此句の不可思儀なる、我薰のいふべくも  
あらねど、遠く此道の内秘を仰ぎ、近く此句  
の外理を頼ぐより、師没後三十余年の今、心  
にうかぶにまかせたる下の句は、其優遊に對  
せんとはあらねど、心をもて心に傳るには、

花はあけぼの雪は夕ぐれ

かく清寂の心を述しが、是を東海禪刹の琳光  
院の路次に摸して、褒貶はよし、百世の明鑒  
にまかせんとす。

しづかさや花にさはらぬ鐘の聲

三鶴云、此琳光院の路次歌寄屋を、隨宜樂院の法王め  
て玉ひて花活今出川の御閑居に、此とくいとなみうつし  
給ひしか。

日暮里に遊て

春毎に其日ぐらしや花心

花にきてみても物なし建長寺

修理大夫久貞朝臣の庭に甘棠あり。春毎に蔽  
莆たる盛をば、いませし時殊に秘藏し給ひし  
が、げにさる事よ、いにしへの人は翦となか  
れとしたひしものを。我も又

甘棠や君なつかしき花曇

沙干

品川にて

元船の火を吸付る沙干かな  
大ひらめ泥にぬたうつ沙干哉

茶摘 宇治

唐音の外に花あり茶摘唄

暮春

行春やまだいとけなき櫻坊  
行はるや梢にすぎる花二輪

夏之部

更衣

わすれては袂さぐるや衣更

郭公

山彦のそへて二聲郭公

雨雲に消ゆく峯や時鳥

いたゞかぬ枕科なし郭公

獨尊とのたまふ朝やほととぎす

一泊り岩倉山やほととぎす

足柄山

あしがらや足の下から蜀魂

北野

さては此繪馬が啼たか時鳥

水戸黄門の君、いまだ相公にあらせられし時、

東海寺へわたり玉ひし、御目通へめされける

ころ

天邊より御意いたゞくや時鳥

牡丹 杜石

花ごゝろ深み草なり白牡丹

影うつすふりわけ髪や杜若

京種を江戸紫やかきつばた

卯花や妹が垣ねもみしりごし

身延詣しけるころ、切石とかやいへる民家に

咲る花をみて

裏富士やかゝる里にも美人草

葵祭

御車の跡に二葉のあふひかな

二いろに神風ふくやくらべ馬

扇

もろこしの風も涼しき扇哉

或時は螢もまねくあふぎかな

五月雨 田羅

五月雨や日にく肥る瀧の糸

住よしや植るを花の御田笠

蚊 蚤

春の野とみしもうつゝの蚊遣哉

關取の蚤にはまけてねぬ夜かな



閑呼鳥 水雞 鶉

柴の戸の何焚鍋ぞかんど鳥  
ねた人をみまふくるなの月夜哉  
篝火や下る鶉ぶねの千鳥かけ  
かどり火の芦間縫ゆく鶉舟かな

清水にて

清かりし瀧の音羽や夏木立

十年ぶりにて古郷に歸り、熊野の御山を拜す

氏神の杉見違る茂りかな

清水 夏水

足あらふ水に事かく清水哉

若水の其清きよりしみづ哉

手にとれば齒のうく夏の氷哉

青田

日本の繪圖ありくと青田哉

暑

菅笠の影もひづまぬ暑かな

あら野行我影もなき暑哉

蟬 虫干 瓜

花とみし枝かしましと蟬の聲  
虫ほしや匂ひ目出たき具足櫃  
鳩鳥の身やとんふりと眞桑瓜

夕立

夕だちやぬれる短氣の無分別

薩摩中將のとの仰によて、敦寄屋花月樓に

物すきし、また其御庭の路次作りける日、夕

立しければ

白雨や此地がための幾千とせ

雜夏

近衛殿下、御祈願所北野なる西王寺に成せら

れけるころ、御茶点じて奉れよと有て、御相

伴は柳原亞相の君などわたらせ給ひし。御節

付はみな其御方のきよき御道具にて、壺の口

切事 御覽あらんとの御事ゆへ、平手前に点

じ、御茶碗は御臺に載て

たてまつる御茶や薫る風の色

旅立人を送る

青梅や口のすくなる暇ごひ

石寶殿

世くを經し石の宮居や苔花

東吳の手水鉢といふは、そのかみ豊國明神の

朝鮮を征し給ひし時、名にしおふ先鋒(終)たりし

清正大將のいきほひは、撃とる勝ずといふ

事なく、攻るところ拔ずといふ事なし。され

ば彼國深く東吳とかいへる所迄攻入て、猛威

を震ひし後の證にとて、其所の橋柱なりしを

押折て携來りしものなりとかや。それを敢奇

人の賞翫し、京師にありしを、其石に似たる

大和石をもて摸しければ髣髴として、いづれ

かそれならんと思ふばかりになん有ける。し

かるに其本の石は祝融子の災にかよりきとか

聞。しかれば是ぞ其本をとどめしぞ、よくも

摸しせし事よと嬉しくて、いよゝめでももの

にして

もろこしの露をく月や苔の花

橋寺

香ぞしるき橋寺のむかし哉

或とるにて

夕がほやたそがれ時を化粧下や  
父母及びおほぢ・とをつおやの菩提を吊ひま  
いらせんと、熊野新宮の本廣寺・東郡雜司が谷  
鬼子母神に一石一字法華經を書寫して奉納す。

法界のもれぬ光や蓮の露

轉法院にて  
宮の御茶

亭々と清きを蓮の御茶かな

谷中安立寺開山日新堂建立して

法の花ひらきて蓮の臺哉

夏月

刈込の甲斐ある松や夏月

影おちて夜は早瀬也夏月

小石川の御庭を、宗雲とよみに拜見して

すどしさを月常住の橋の上

旅中

すどしさを訪よる松の舎かな

銀閣寺

涼しさや雪にしてみる銀閣寺



四條

川中の中に火宅のすゞみかな  
備前のかうのとの信敬朝臣の別業に遊ぶ。吹  
井戸にいたりて  
すゞしさを心を洗ふはしり水  
御秋  
身の垢をすゞける風や御秋河

秋之部

立秋

秋たつといふて來にけり秋の風

七夕

わたるかと星みて更つ天川  
牛駑を猪牙で行夜や銀河

朝兒

朝がほやたゞ露の間の三世心

しゝが谷の大文字は、弘法大師の御作とて筆  
力の余勢、今も孟蘭盆の送り火に凡俗の闇を

てらしつ

加茂河の底をこがすや大文字  
稻妻

いなづまや見合す顔も妹脊山

虫

草の戸の夜く虫を枕かな  
松むしやりんとして待しらせ鉦

月

照といふ花もありけりけふの月  
名月や野すゑの空に浪の音  
明月や蟻の這ゆく垣隣  
さして行牛嶋黒し月見舟  
段く山染てゆく月夜哉

寛政丁巳の春、長崎の人より清人の書とて贈  
りこしたり。おもひかけぬ事ながら、ひらき  
みれば、

余頗嗜茗飲夙解老湯之法清骨之味丙辰之春館於日本長  
崎因象背照君聞東都河上先生以陸羽之辨專稱於時列侯  
貴人延爲賓師余想見其葛巾野服品試烹門之狀爲因邊野蘇  
詞寄呈亦將神交乎千里之秋爾

だちて身まかり給ひしかば夫々の法養、大  
徳寺にて修行して

大空にその名は満よ月の秋

師恩の厚きを拜して

三十年ふり積りけり月の雪

秋風

秋かぜの裏戸にそよとたそや誰  
あき風や破れ障子の調子竹

身のぶにて

秋風や雲吹わけて七面

或時、紀の本宮より和歌山へ至る道にて、山  
河の出水にとどめられし。此所は糶てふもの  
も、夢にそら豆入て炊たるを喰て、一日二夜そ  
この藁家に泊りしが、山中といひ、家居とい  
ひ、喰ものといひ、旅は憂事のためしにも、  
是ほどの苦しきは有まじと思ひし。

捨し身に何としみるぞ秋の風

新宮に、辨慶の産る楠とて、十抱にもあまり  
ぬる大木有しが、古木となれば空穂と成しに、

もろこしへよい便ありけふの月

鶴岡

月古し神の御前の大銀杏

身延にて

月清き影見る鷺の御山哉

又

はれわたるわしのみ山の月は今

身のぶのそらに影のさやけし

師如心齋は、寛延四・八月十三日、良夜に先



剃法師どものすみかとなし、火をあやまつて  
今は其焦根ばかりぞ残ける。

ふんぞつて生れた根あり楠の焮

稻 花野

うちよする稻の穂波や花ごころ

鐵に掛稻の畫に

秋に富實のりを花の田づら哉

兩の手に折つくされぬ花野哉

是にこそ小金の名なれ花野原

花ははな心の直なるをよみするに、左によぢ、

右にひねり、花を實をうしなへるは、花もさ

ぞめいわくにや侍らん

人心千ぐさに花のあらし哉

風早殿より、御花生きりてまいらせよとあり

し。是は、はこやの山のうちくくの御ながめ

に成べう侍ると仰こされければ、敬みて奉り

ける折に

けふよりは猶万代や竹の春

茸狩 助節

茸狩や酔ねど山をちどり足  
鮎つりや面壁九年岸の上

鷹 小鳥

はつ鷹や先井目は置ならべ

線いだす雁の備や霧の奥

雲路にも八重の徑や渡鳥

山がらやからくくとはなれ業

砧

山ひとつ越て里あり小夜砧

西東風ふきわけてきぬた哉

夢やぶるね覺の里や小夜砧

菊

憂秋と思ひしが此菊の花

或所の祝に

千世やちよひらくためしや菊花

後月

木守の梢に寒し後の月

秋夜

長き夜やね覺て咄す友白髪

明かねる夜や寐ながらの一字觀

鹿

糸による夜の戸ほそや鹿聲

鹿なくや時雨亭の北南

紅葉

下染のまだき時雨や初紅葉

東海寺

紫の寺を奪ふてもみぢ哉

海晏寺 袖浦

袖裏を浪のにしきや夕紅葉

峯も尾もけに名高尾の紅葉哉

松杉も色に出たり蔦もみぢ

今はむかし、和哥山を出て高野山に詣。古園、

熊野に趣きけるころ、はてなし越にかゝりし

が、此山は人の行かふ事稀くにして、たゞ

柚山人のみ至る所にこそあれ。半ぶくより上

は雲霧常に有て、禽獸すら棲とせず。おりし

も秋なりしかば、一しほ霧深うして、書頃ま

では咫尺もわかず。連たる僕のわづか一二間

隔る顔もみわけざるばかりに、たゞ呼かはし  
つゝ聲を力に行先覺束なく侍るに、又蛇とい  
ふ虫の多くむらがりて笠のうちに入、目鼻も  
わかずとどまりければ、薄を折て打はらひ  
くしてゆく。

霧深き浮世の外も憂世哉

まことに王安石が、一鳥不啼山更幽なりといへ

りしも、かゝる所にや侍げんとおもはる。か

くしつゝ行程に、此山中に山なまこといふて、

大なるでどむしの一二尺ばかりも有が、うね

りく、岩はな樹々の木すゑ道のほとりに

有て、是にとりつかれば、いかならんうきめ

をやみんと、いとおそろしくぞありし。

立よれば大樹の露や山なまこ

扱たどりく行に、水ひとつのむべき所もな

く、かろうして尾にいたれば、頂上に家ひと

つ有。居なしいやしからず、よしある家作な

り。かゝる所にも人は住けりと、ふしぎにこ

そおもはるれ。是は國君の仰事うけ玉はる獵

師にして、大小の熊皮のいまだ血に染たるを



軒に釣て、もの／＼しきさまなり。則立より  
て湯水などもらひ、息つきしつゝ、あるじを  
間に、しかん／＼のよしをいふ。さて熊膽所望  
しければ、いつ／＼調へられし事ありやと問  
に、いかでか此山路しかる事あらんやといへ  
ば、さあらばとて掛目五分呉たり。是は少し  
也、價はいかほども出すべしといへば、いや  
／＼此品多く賣まいらせたりとて薬の功・不  
功をもいまだ不辨人に、多くは賣まいらせ難  
し。病に用ひて利あらば、其節はいか程もま  
いらすべし、是我宿の法なりとて、いかやう  
乞ても五分の外はうらで、我姓名聞て書留た  
り。是は後に乞の證なりとぞ。斯る山中我と  
渠ばかりにて、誰人のしるべきならねば、い  
程も當座の利にかへてんものを、まめやかな  
る心ざし社、げにめでたくゆかしくて

雲霧に曇らぬ月の心かな

其家をはなれば竜軸が出る。黒雲は莫／＼  
として前後に覆ひ風穴に遮る。白雲は片／＼  
として左右にはしる。此雲を踏で下れば、と

りし。夫はたゞ一輪に天下の譽れをとり、是  
は百花に禪林の寂をみせたり。

朝顔につゞくや菊に名残の茶

金龍山の轉法院を、隨宜樂院の御座所にさ  
だめられて、彼是御物ずきあるが中に、御床  
の御掛ものをはづせば、夫ほどに御壁をうが  
ちて、遙なる富士の山を置ものゝ御詠めに遊  
ばしけるぞ又たぐひなくありし。或日此宮に  
て御茶有けるに、折から四方の景色、樹々は  
染て夕陽色をそへ、をのづからなる庭上蕭條  
錦繡林、山は雪に青天そばだち、まことに白雪  
千秋突兀看、げにいへらく、勝地本来無定主。  
太都山屬愛山人とかや。げに／＼清き風雅に  
遊び給ふける。此御まへにさぶらふ事のかげ  
まくもかしこく、かたじけなき恐れおほさ、  
誠に有がたくて

天地のめぐみ身にしむ名残の茶

つが村といふへ出たり。いはゆる是十津川に  
して、ますら男のたけん／＼しく、家居も薙く  
しくして、鎗・長刀・弓・矢飾り、鎌きら／＼磨  
たてゝ、ふりにし建武の御名残も今さらのや  
うに思ひ出らる

緋おどしの御味方おほき紅葉哉

天府君にいざなはれ、上つふさなる大多喜に  
まかり、猪狩をみて

浪うつてよせ來る勢子や花薄

終日狩くらして、各獲したる猪・鹿・狼・狐・兎  
の類提げ、大守の御覽に入んと、五角山いへ  
る山神の社の前へならべ立たるさま、げに物  
／＼しく、富士野・小金の御狩の事／＼かり  
し、是にぞ思ひあはせらる。其獲結付たる竹  
を乞て茶抄に削り、猪の牙と名づけて宗雲に  
土産にす。

荒猪の牙もなごめつ草の露

或とし長月もけふあす斗なるに、濟松寺謙室  
和尚の室に至れば、菊の花いろ／＼唐の錦を  
織はへたり。いにしへ祖居士、朝兒の茶湯あ

冬之部

時雨

しぐるゝや肩もかくれぬ小風ろしき  
西山を留守にして降時雨かな  
山門にしぐれたのむや圓覺寺

風 落葉

木がらしや拍子のぬける瀧の音  
凧やみえすく奥に淨明寺  
下枝に秋は残て落葉かな  
寶鐸を鳴して落る木葉哉

久米仙人贊

紅裏のちらり／＼と落葉哉

口切

利休翁の玉へる事有

口切の沙汰に及ぶや色付袖  
口きりや友を松葉の敷心  
くち切や千世もと契る竹の色

啐啄宗匠、はじめて江都に下られし砌、日



菴の号を書て宗雪にあたへられし。其類びら  
きの茶は予を招じ、相客は津輕屋の武陵なり  
しが、あるじのまうけ、掛物は白紙を表具し  
つゝ予に所望しければ、則武陵に松を畫しめ、  
其上に斯

口きりや日々に重る松の霜

達磨忌

達磨忌や枯木の風の味もなし

枯野

くれなるの色おとろへて枯野哉

露に貸花の宿なし枯野原

冬籠 紙衣 頭巾

柴の戸や柴を焚ほす冬籠

紙子着て軽さや老の出立ばへ

年を経て都に登りける頃

顔に皺よるの錦や澁昏子

よの中をくゞつて丸き頭巾哉

水鳥

聲細う吹きる風やさよ千鳥

透間もる夜のにしきや浦衛  
夕汐に浮洲の泡や鴨の淀  
枯蘆を夜のふしどや鴛の妻  
岩はなの假寐も鴛鴦の妹脊哉

顔見世 袴着

兒みせや春けき宵の人通り

はかま着や千歳も鶴の一步より

神樂

氷る夜や内侍所の御鈴の音

千早振霜雪もふる神樂哉

水仙 寒菊 寒梅

兒わけも若衆盛や水仙花

先がけて空から梅の春邊かな

寒梅や其色としも雪の友

寒菊や花にしてさす葉のみみぢ

安永五年の夏四月日光山 御社參濟せられけ

る其冬霜月、上野なる 准后の宮の 御本坊

に 大樹のわたらせ給ふ日 御座の間の 御

花つかまつれと、 宮の仰ごと有ければ、寒

菊を入奉りけるが心のうちに

寒菊や君が八千世を花心

御茶屋の御庭に大木の櫻あり。是に作り花を

咲せつゝ、今を盛の春邊と、二なき御こゝろ

くばりに、又其御茶屋の御花には石南花の爛

漫たるを、日光の御山よりとりよせられしを、

すなはち仕て

石南花も歸るや冬の日の光

安永三年、先師如心齊廿五回忌追善の爲に上

京しけるころ、風早宰相の君・千種中將の君、

予が草屏をたゝかされたまひ、しのびて御入あ

りけるに、御茶まいらせて

はどかりの一間や雪に回り炭

或時轉法院にて、法親王の御まへに侍りけ

るが、折ふし天寒かりければ、めさせ玉ひし

おほんぞをぬがせられて下し賜ふ。おもひが

けぬ有がたき、身にあまりて

御衣の花咲けり老の冬牡丹

氷

流よるものをとらへて氷かな

瀧の音もたえて久しき氷哉

寒

下手念に今宵の雪や寒の入

雪

はつ雪や行届ざる庭の隅

初雪やせめて薄茶の仕廻迄

芭蕉翁の内に居さうな人は誰との給ひしと思

へば

はつ雪やよくも在宿つかまつり

又、一品が芭蕉葉は

初ゆきや雨となり又風となる

鎌倉にて

大乘の雪白妙や松葉が谷

老床

夜は雪と思ひし事よさればこそ

利休居士の立像は、雪中路次のさまをうつせ

るなり

飛石の跡踏ばかり雪の杖

啐啄宗匠出生の朝、千家の榮へ、幾千歳もと

心のうちに念じて

秀るや雪のあしたの男松



鷹

雪空の擧に鷹のいさみ哉  
むらさきや朱をうばふて歸鷹

歳暮

煤掃や竹のいく代のとし男

千年屋

大同の煤を掃也千世の竹  
としの瀬や笑て流す年忘  
春毎の世話に暮行師走哉  
年もはや梅の一重の隣かな  
よい春に明んと季の暮るぞや  
阿炭も置心よし除夜の鐘

雑

振々亭に篋あり。此うちによきを撰て花生につくりてと有しかば、むかし利休居士、菫山にてかゝる事も有しと興じつゝ藪中にわけ入て、周り尺ばかりなるを掘せ、一重は愛たき事侍れば千年の友といひ、二重は其勢ひ青雲の擧るかたちにより登龍とし、根は春風のなこの海にうち霞るがどきをもて、遠帆とこそ

名づけたりし

くれ竹の千世や月雪花の友

三二二

或日振々亭に遊びけるに、机上を探れば一草子あり。是我が老翁の、青山緑水に心をやり、花曙雪暮に思ひをのべ、又はかれに讃し、これが需に隨がひし五七五をば、夜話の折くこの主人にかたりあひ、且斧を乞れしを、雪太郎まめやかに筆し置れしもの也き。見るく歡喜のあまり、亦我耳底にとどまれるをも三四七八と是に増くはふれば、塵つもりて山の井の淺からぬ駱子の深切を拜し、猶其撰を乞て冊のついでをなす。たゞに阿父の癖として、事と物と捨るがどく、其日其時の興にしつゝ、しるしとどむべき事もなければ、八十年來の玉藻の數もやと渚にひろふのたぐひなるべし。けに風雅には富りけるものを、是我川上の家の流たえせず、千載の寶鑿とし、ついではまた我黨茶道のたすけともならんやと、櫻木の花にもうつさまほしくおもふて是に跋す。

戊午の冬

日々菴宗雪

菴日

自得

能のう

靜せい

草さう

莊丹



此みちにかばかりたくみなる人の今の世にのこれる事、  
きしかたゆくする有がたかめるを、御會のたびにつよ  
くとしてまるられし、としるされしは俊成卿九十の賀  
の記文なり。けに才と年とうちあひたるは、むかしより  
まれなることなるべし。莊丹翁、わかき頃よりいま八旬  
にちかきまでつくれる句どもをつみあけなば、たかき年  
の老もかくるゝばかりならんか。もとより名利のさかひ  
に足をふまず、江戸のかまびすしきをきらひて一所に杖  
をとどむる事なく、ひたすら閑を得靜をもとめむと、い  
まは与野といふ所に薄のほやつくりて人にしらるゝ事な  
からむとす。西行の撰集抄は遠ければいはず、元政の隱  
逸傳中の人なる事はうたがひなし。かくるといへども人  
ゆるさず、したがひまなぶものすくなくならずとぞ。是そ  
の句にたくみなる故なり。翁たゞよく靜なれば、人呼て  
能靜翁といふ。此頃句集を上木せんとして、予にひとこ  
とそへよときこゆ。翁のいまだ若かりしむかし、猪武者  
の編集あり。その頃予幼名は良治とて作者の中に句をな  
らべたり。つらくおもふに是五十年の昔にして、翁は

すでに渭濱の浪を額にたゞみ、われまた商山の霜を眉に  
おける朽入道となりぬ。かゝるひさしきまじはりもめづ  
らしからずや。此集の序かゝむもの、われをおきてたれ  
ならむと翁の申さるゝにまかせて、なほゆくするもかゝ  
れとぞおもふ、かゝれとぞおもふ、とかの俊成卿の杖に  
そへられしふる哥を、かへすゝうたひて隨齋成美序。

文化戊辰

成美

能靜草叙



吾蕉風にをけるや、翁が洒落は置て論ぜず。たゞ其嵐  
の風骨をうかゞひ、蓼先師の譚笑をしたふ。しかるに  
壯年來の口號をしるし、かつ筆して、すなはち能靜草  
と題して巾箱のものとなし置るを、門生菜子ひたす  
らに寫し與へよの責めをふさぐ。もとより大邦の俳客  
の覽にあづかるべきにあらざれども、譚言微中、聊み  
づからの心の紛をとくものなりけらし。

莊郎書



享和元年季冬



能靜草

藏于黃蝶堂者全矣

○春之部

時在子田家

馬の尾のしづかに垂る初日かな  
大和行をおもふて

蓬萊やこゝろに花の吉野榎  
はつはるや老をやしなふ草冊子  
元日や王母が桃の童子教

自壽四十一春

わか水やまづ立よればかゞみ山  
初春や若きが中に干大根  
はき燕脂の春めく肆と成に鳧  
梅がゝに塵こそさぐれ片折戸  
綻る業平鯉むめの花  
おどけ客七種うつて戻りけり

鶯の右手を放つて初音かな  
はつ午やあまぎる雪の十二銅  
初午やまづ拍手は酒杜氏

誌壽藏

うぐひすや朝なくの布施に何  
しら魚につらぬきとめぬ價哉  
何作る日向の脊中桃の花  
はる雨や二葉に眠る牛の角  
春雨や橋場菴崎眞乳山  
春雨や奈良の鹿には紅葉傘  
筑波

出流嵐

むらさきの塵に交る御山哉  
おがむ涙岩屋のしづく春雨敷  
稲づまに其身を悟れ小鮎汲  
江戸半九郎、半太夫と名をあらた  
めけるに  
はる霞いほり看板幾代へむ

日本堤

懷夢師

うぐひすや堤八町むかし節  
わすれめや服紗さばきの海苔二枚  
向上の一路なりけり海苔の味  
出代や人のこゝろの鏡磨

駿府時雨窓菴有談笑道場

之額

春は滿俳道場の旅寐かな  
三保

かすむ日や松にもかけずしほ衣  
寺町に雪踏の音や飛胡蝶  
欠する人の多さよもゝの花  
季吟先生之墓

上野から寺は木間ぞ花の春  
方丈の灯はしらみけり山櫻  
山吹や蓑ひとつある筏乗り  
欸冬や橋次が駒も歩行涉り

同トス  
師トス

うめがゝの這渡りけり茶店が床

臥龍寐

音信る囃子はいづこはるの風  
晝見ればさもなき池や鳴蛙

太平無日不春風

けふひと日此文覺は花の瀧

囊茶五千句

應之牧  
君之牧

小娘の木登りしたる櫻かな

途中

鶏を雉子に見ばやの華の宿

班石亭

朝くの鏡見せばや家櫻

さくら見る人の歩みや鬘事

花ざかり極彩色の日和かな

牽馬の若殿様や花盛

庭作り旅に手をうつつくしかな

うしほ煮の花袖なりけりちる櫻



菅神法樂

墨の香の殊さらにこそ神の梅  
涅槃會や雪も氷も四句の文  
幅つらぬ頃でおがむやねはん像

磯邊明神

神の前むかし蒔繪の櫻かな

那珂湊

いざさらば青きを踏んより若和布

讀蒙求

物よみの我も雀や春の空

觀唐崎新之助輕飛

ほめたりや蝶のふるまひ下り藤

我死ばも梅柳うすき酒

かもの曙鳴のむら雨 晋子

我しなば桃と櫻に草の餅

足利學校

釋菜の跡のしらべや春の鳥

行道山

岩角や水ぬるませぬ谷の聲

武州小河松調園藏百富士之寫  
中別有騰龍之形

雷のはるかに春の高根かな

寛政辛亥季春六日修造壽

藏。在武州足立郡鈴谷郵

妙行寺裡。因觀兼好法師之

和歌

華さくら雙岡のおもひかな

晋呼古されし菜窻の號を贈るとて

花ながら參らせ籠や莖立菜

○夏之部

うつせみの足袋片づけつ更衣

ひろ蓋に乗べき花のほたんかな

妙觀が鈍き刀や花牡丹

觀世水寶生雲やほととぎす

乙鳥に巢などは借す杜宇

桑弛蓬矢

大太刀を弓に蓬のかぶとかな

軒あやめいづれ幟の美髯公

下闇やところ得顔の臺

市川雷藏助六の出端

水くと水の市川かきつばた

撫子や馬骨の中の唐錦

夕殿登飛思情然

大内へ推參したるほたるかな

鍛鍛冶の澤へうち出す螢哉

腕久に狂ふて見せるほたるかな

岸の竹ほたるに撓む斗なり

大傳馬町天王祭禮

祇園會や幟の義なら木綿店

腹中の書物にあらず夕すども

題二鐘入

ゆふ納涼鐘にうらみはなかりけり

よし雀の拍子揃ふや船大工

若宮神前

殿禪師のむかしをおもひて

かくれたり鴨脚の陰の蝸牛

杜若帽子に名あり澤之亟

題二帶引朝比奈

筍や項羽が山をぬく力

灌佛のけふや鑄物師を摩耶夫人

鎌倉

右ひだり扇が谷や麥の塵



青丹よし楯の廣葉のわか葉哉  
人形町

人込を歌舞妓役者や夏の月  
川狩の淺瀬とひ鳧都人  
かはほりや衛も通ふ藏やしき

金、御牧夏草や莊子が云る眞の馬  
織見る風を端居のはじめかな  
みじか夜や國守の泊る宿のこゑ

伊良少、時師、事、先生、於、武、江、  
爾後越<sub>ニ</sub>在<sub>ニ</sub>于<sub>ニ</sub>四<sub>ニ</sub>方<sub>ニ</sub>。今<sub>ニ</sub>歳<sub>ニ</sub>四<sub>ニ</sub>月

念<sub>ニ</sub>日<sub>ニ</sub>謹<sub>テ</sub>聆<sub>ク</sub>先<sub>ニ</sub>生<sub>ニ</sub>以<sub>テ</sub>去<sub>リ</sub>歲<sub>ニ</sub>孟<sub>ニ</sub>夏

十<sub>ニ</sub>有<sub>ニ</sub>一<sub>ニ</sub>日<sub>ニ</sub>易<sub>レ</sub>簀<sub>。良不<sub>ニ</sub>幸<sub>ニ</sub>不<sub>レ</sub></sub>

得<sub>レ</sub>執<sub>ニ</sub>之<sub>ニ</sub>縛<sub>。彼子貢六<sub>ニ</sub>年<sub>ニ</sub>之</sub>

厚<sub>キ</sub>實<sub>ニ</sub>不<sub>レ</sub>可<sub>ニ</sub>企<sub>及<sub>ニ</sub>テ</sub>。於<sub>テ</sub>是<sub>ニ</sub>是<sub>ニ</sub>乎

請<sub>ニ</sub>諸<sub>ニ</sub>家<sub>ニ</sub>之<sub>ニ</sub>瓊<sub>。章<sub>ヲ</sub>、且作<sub>ニ</sub>鄙<sub>言<sub>ヲ</sub></sub></sub>

以<sub>テ</sub>奠<sub>ニ</sub>獻<sub>。先<sub>ニ</sub>生<sub>ニ</sub>牌<sub>ニ</sub>位<sub>ニ</sub>下<sub>ニ</sub>。仰<sub>ニ</sub>冀<sub>ハ</sub></sub>

神<sub>夫<sub>ニ</sub>享<sub>レ</sub>玉<sub>ヘ</sub>之<sub>。</sub></sub>

夏衣着やこゝろの藤ごろも

僕佛<sub>ニ</sub>生<sub>ニ</sub>會<sub>ニ</sub>之<sub>ニ</sub>日<sub>、當<sub>ニ</sub>喫<sub>ニ</sub>蓬<sub>餅<sub>ヲ</sub></sub></sub>。

此時板齒<sub>ニ</sub>搖<sub>レ</sub>落<sub>。於<sub>レ</sub>是<sub>ニ</sub>乎<sub>有<sub>レ</sub>感<sub>。</sub></sub></sub>

花御堂既落葉のおしへかも

蓼師と周竹叟、みちのくの行を干

住に送る舟<sub>中</sub>吟

夏川やはなれぬ鴛の船二艘

蓼先師のいはく、句は觀の一字と。

うの花や座せば明るき胸の中

○秋之部

研上る刀に寒し今朝の秋

町もはや鱒すさまじき光りかな

七夕やさそなら傘も春日山

たなばたや鳥羽白河の車かし

七夕やいとほなやかに竹の露

七夕や明るわびしき牛の面

けふ洗ふ若紫の硯かな

張敞が筆のすさみよ三日の月  
三日月やまばゆき昏の嫩かさり

新場

夜がつをの火影なりしを秋のくれ

日本橋邊

朝霧や歌舞妓の太鼓河岸のこゑ

經にとく諸天の外や高灯籠

鳥さしのしらぬ梢や高灯籠

先人十三周に、其墓のちかきあた

りに在て

此秋や吾健かと手向草

しらつゆや箒にかゝる朝清め

途中

女郎花多かる野邊や菌狩

後の月氷の鯉の籥かな

甘ほしに寒き齧や十三夜

古河永仙院裏に、三喜先生の旧跡

を尋て

それながら糸屋の娘星祭  
白瓜のひま行駒や靈祭

靈祭

鼠尾草や松山鏡水かゞみ

大平山

木の下露篋をあふぐ御山哉

名月や染らぬ色の糸すゝき

墨田川

名月や花にも寺の十五日

老らくのそら耳敷もし虫の聲

瑞巖信士一回忌 江戸 牛太天也

その焔の片瀬参りも寒かりし

雨竹庵にひと夜かり寐せしに

雨敷むしか枕に通ふ明のこゑ

誰<sub>ニ</sub>家<sub>ニ</sub>玉<sub>ニ</sub>笛<sub>ニ</sub>暗<sub>ニ</sub>飛<sub>レ</sub>聲<sub>。</sub>

ほし合に吹はすさみそ一節切

鹿の音のながれて届く篋かな

身じろぎを抑なざるよけさの秋

おもしろや飛蟬も牧の駒



跡やその道を傳への松の露  
行秋や芒の波も飛鳥川  
境、宮島氏にやどる。其夜は基盤  
人形に殊更興じければ

出つかひや坐敷の錦木ムならで

大江の佐國は天性はなはだ花を愛  
す。其子の夢みらく、亡父來り告  
て曰、蝶に化し、每春花園に遊ぶ。  
其子追慕に堪ず。衆花を裁て、房  
ごとに蜜をぬりて羣蝶に供す。

しらつゆや佐國は蝶のいたり者  
直道を孟母が機の花野かな

眺望

松嶋や定ぬ月の置所

新大橋の邊を散歩す

まつ宵と標零に見ゆるうしほかな  
もの云はぬ亭主ぶりかなけふの月

神奈川に遊ぶ。折から葉落て十二

天の汀明らかにして

波てるや我にことたる七日月  
川霧や勤ほのかに弘福寺  
名月や水想觀の水の物

〇冬之部

手ごころの卵たまくや初氷  
濡て行數寄屋大工やはつしぐれ  
水仙や兔の耳も旭影  
いくばくの雨露や吸けん枯野原  
はせを忌の花手向ばや芙蓉巾

旅中風雨に逢て艸廬に歸る

芭蕉忌や吾破笠も旅の味  
あの中に鰍の家や濱ちどり  
にぎやかに篷屋くらすよむら衛  
遙拜に里は小春の茶の烟  
その音も冬來にけらし水車  
家と見る灯かけはうれし枯野原

きぬ川

しら縮やしぐれに染ぬ川の面

故雪中茶忌日

木がらしや烟這行齋支度

眞間行

落葉たく祖父は若木ぞ寺紅葉

市川

日あたりに小春の市のきほひ哉

舟中吟

月はひとつ影は江に鳴千鳥哉

至、口閑、昼

一陽や寒きが中に鳥の聲

菜は春の色に冬至の日向かな

白氏負、冬、日、の詩をよむ

醇醪の日に向けり冬の梅

爲レニ汝ガ安、心シ、竟ル

達磨忌や庫裡に大根の肘を斷

田家

日あたりに垣結ふ人やとしのくれ

歳、年、人不、同

顔見せや綿を常磐の雪の松

莊子云、藐姑射山有、神人、居焉。

肌膚若、氷、雪、綽、約若、處、女。

かほ見せの脂氷らめ鬢かつら

顔見せや燕脂ほのくと朝朗

かほ見せや靈山會下の切落し

かまくら行

稲イネふらも穂に出るものよ今朝の霜

千種、濱

かれくし果や千くさも浪の花

古河より十八町ほどに野、渡村、萬福

寺に兼栽櫻あり。

今も猶月もれとてか冬ざくら

梁、雲信、士、一、周、忌

邯鄲の眞松風やしぐれ月

はたらきも三、面六、臂としのくれ



としのくれ其角と飲し人は誰  
兒の紅粉翌残りけりとし忘  
越後屋  
判とりの往來や年のくれはとり  
蘭室女七句の賀  
冬の夜や王母が桃のたまご酒  
としの市晝夜を舍す隅田川

附録

若葉の晴紀行

此山の茂りや妙の一宇よりと、阿師の靈場の妙をつ  
くせる遺吟も、あが信じ奉れる所なりけり。且は其境  
へ、住し年さゝけ申ぬる、常住のひとき尊し春の山と  
愚吟せし、是を首途のちからぐさと、まだ朝じめりおか  
しつゝ、

こゝろには鶯谷を夏寒し

艸山の政師は、母のねがひにて、此御山に母を奉じて

ほととぎすふりさけ見れば有聲の晝

此夜は栗ばらといふにいたる。

廿八日、心にかゝる雲もなく晴たり。石和なる鶴飼川  
に高祖の徳をおもひ、遠妙寺に念珠し、庫裡に茶をた  
まひ、笛吹川をわたり、酒折宮にぬかづき、甲斐の善  
光寺はほどちかう立たたまふ甲府を過て、あら川・釜  
無河をわたり、鰍澤につく。夜雨ふる。  
廿九日、晴。宿を出れば路邊、富士川のいしぶみあり。  
致景いふべからず。

杜宇早瀬に寒し不二おろし

道のほとりより便船して下山といふに着。羊腸をた  
どり身延山にちかづく。此時にいたり、吾ねがひみて  
りと、そとろ涙に袖をうるほし、御山の麓につかれをや  
すらふて竹の坊にやどる。

五月朔日、晴。御山高祖の御影、および御骨の寶塔に  
安じ奉るを拜む。草山師の歎息さこそとしのばれ、

安穩のまこと仰ぐや夏木立

又

まうでられ、吾は父・母親族の戒名、はた兩師の亡名を  
たづさへ、先達とたのみ奉れるは前の妙行師にして、  
旅ごろも日めもす夜もすがら枕となし袖になしぬるは、  
草山師の紀行一帖なりけり。草山立出るは卯花月十  
一日、兎角して江戸に在て同じき廿四日、妙行師にし  
たがふ道心の僧と三たり、先堀之内の大ほさちまうでし  
て、

うの花のそれを包むや御洗米

日高けれど下布田といふ所に舍る。

廿五日、晴。府中を過て藪むら藪天にまいるける。

けふといひことは御神の九百年に當り給ふぬれば、こ  
とにたうとくぞおもふ。玉川をうちわたるに調布は見  
えず。さら更にむかししのばしく、八王子を經、駒木  
野の關こえて、こゝに旅まくらす。

廿六日、晴。小佛峠、郡内の嶮嶮を過て鳥澤にいた  
る。

廿七日、晴。猿橋は腹のいたはりにて轎に凭てすぐ。

笹子峠を下りに、

一と上靈山の色 行、雲氣深

經聲都世外 寶閣照人心

それより奥の院へ攀のほり、坊にかへる。

二日、晴。坊をいで、麓のとある莽にて、妙行師に袂を  
わかち奉る。道、西行坂・西行の松といふある峠に眺  
望す。

夏蔭やしばしとてこそ人もよれ

三日、雨ふり、晴。萬澤より岩淵に出て、それより根方

にいたる。

歸路新晴日 延山緑樹深

滑稽甘水飯 自是故人心

菜窓先生遊身延山歸途、過茅屋敢和之。

富士山下伊達維博

醫家伊達甫折叟之令子、俳号曰多少。學儒京師巖垣  
氏、學俳、雪中庵。

根方比奈村自足亭歌仙半折・伊達氏亭同一卷于茲略。

雲歩恭阿彌陀佛應求



寛政十二年八月三日

於角山養氣館

獨吟

風蘭の簷たちまちにけふの月 莊丹

楨に霧たつ前裁の奥  
篠の弓曳しほりたる棹鹿に  
はさめる腰の烟管いやしき  
洋く音なき川の水の色  
荷に作りにし綿の豊年

錫ふつて俊乗都の寺勸化  
兒に愛相もいふて別る  
とをり雨跡なくやみて日は斜  
樹くに聳る城の萬歳  
鞍上の頰に句を得る毫とりて  
金華の臘酒今に醒ざる

秋はた窓の小草の朝じめり  
うちすてきぬた薄月の下  
我戀は身を簑むしのしのび啼  
鬢に開るももつらき煩き  
花あかり土圭は鳴ど暮遅く  
めぐる茶臼の青き春かな

二  
のどかさは隠逸傳の不審紙  
八端がけや栢庭が友  
やね船を隅田河はらに乗放し  
いづれ菖蒲に百草を採  
貧しさの中に養ふ母ひとり  
他國あるきもとしくの留守

門並の新地はすこし仇めきて  
貫ふ祝ひの七ところ鏡醬  
むらしぐれ傘とるまでもなかりけり  
未だ更がてに夜講果ぬる  
蟬の吟そここに月の頃  
圍炉裡にはねる栗の山里

ウ  
中くに咄せばやさし相撲とり  
たより求めるかり物の禮  
雫して鱒ふるまゝの苞の鯉  
猶たちまさる市の人ごゑ  
瑞籬(原註) 瑞籬のすがしくも花の中  
ながれは淺き如月の水

こはかき捨たりし詠草を、そのま  
ゝこゝに附録するものなりけらし。

書ものもて人を導にあらぬ莊師の言行を世の人に施さん  
と、道の道にあらざる文のあやなるものを、その有のま  
ゝになすと、う婆そこの菜英、勸善懲惡の筆を信心のた  
めに採。

かくれ家も今は求めじいづくにも老のすみかは靜也け  
り。能靜老人、年頃の發句・獨吟の哥仙・身延の記行等を  
梓行す。冊子の後に完來筆とりて、その能靜なる老がす  
みかに贈る。

千時文化六年己巳冬霜月



をのゝえ草稿  
乙二



我聞、佛ののたまへるとして、心の師とはなるともこゝろを師とするとなかれと。何くれのこにわたりて、いととうとく覺え侍りぬ。松窓乙二坊は、俳諧の伎に此境にもたどらで堪能なるとは、駒の蹄のいたれる際み、舟の舳のとどまるかぎり其名あまねく聞えて、何國となくす杖の停るところ、山梨のすき人等が年頃のまどひは、いなりのめあけゆくど明らかにもなりけらし。將、齡既に七十年のしほに近く、いたつきにさへかゝりて、え起もやらす侍るに、十竹坊はらからの女とかたみにかぞの叟のこゝろのはな、いたづらにちりうせ、上葉のはやしむなしく埋木とならんとををしみ、もしは末の世のため、且はなきあとのかたみとおもひて、こたびあるが中の金玉を撰びて板にゑり侍りぬ。おほよそかぞいろにつかふ道多かる中に、志を養ふをもてむねとすとか、古しへかしこき人のをしへにそむかぬこそ、いとみじきわざなめれ。



坊が其先はいさしらず、いその上ふりにし代より我家のけんざにて、坊は 鬼子父君の遊びがたきにてさへ有ける。花をとひ月をおもふにつけつゝ、いと親しくつかふまつりぬるまに、予も又難波津の何事もたどしきいはけなき時より、此道のとなど、千代のふるみちふりにし文どもなど、かた糸のより、ものしけるなさけの余波、みぢかき筆のつかのまも忘れがたく、又はかの、花の葉もみぢの下葉かきつめてこのもとよりぞちらんとす亂、とかいふふる歌にもよく協て、いとまめなるとに聞なされて、渠が需にそむき得ず。そがとほりは松井梅屋が眞名がきに譲りて、拙きかぎり世の嘲りを打忘れて、巻のはじめに、文政癸未季夏、白石城西常盤崎の隠莊聞蛙亭の北窓に筆を採る。

鬼孫





をのゝえ草稿

正月やわすれてあれば袖の月  
母のあるむ月七日の寒かな  
正月のころもにさはる染木哉

む月の間あるとし、武さしの友人へ申おくる

元朝の不盡ふたつ見んうら山し

江戸に年を迎て吾妻橋より眺望

万歳ものほれつくばの朝南

川風のさらば吹こせうめのうへ

大津繪は梅にうつらぬ寒かな

子を呼に出て子を連て梅ゆふべ

奥の細道に、月の輪のわたしを越てとある所也

かはる瀬の月の輪わたり梅の花

しのぶのおくにて

梅さけば茶の實植るときく日哉

うめの花これや小家は繪にも書

山間の空を嬉しとさく梅か

行方の海苔柴多き月夜哉  
のり柴も風が吹ぞやあさほらけ  
海苔のよるなぎさも過ぬ馬のうへ  
松風や時うつりして海苔の寄る  
ときん着て見れば淋しき柳哉  
青柳の中より見たり朝朗  
へなたりをへなくと吹柳哉  
正月の下戸くより來る柳哉  
寐て起ておろかもこれやはる心  
吹ためて風は置やはるごころ  
麻の種三粒持てもきく蛙  
のり喰に鼠は來るになく蛙  
はるの朝蜺は黒きものぞかし  
春の風市の月夜の身にそはね  
鶯や田づらより來て見へずなる  
反故焼て鶯またん夕ごころ  
うぐひすのはつ影うつる紙帳哉  
鶯やはらみ雀はくるしいか

老が身は齋屑にも劣けり  
親と子の間にこほるゝ齋哉  
木のほよもかすみ残さぬ夕かな  
水香て哀さめたり八重がすみ  
鬼つらや井戸のはたなるうめの花  
丈艸が宿や梅待茶摺小木  
江の空や歸らぬうちは鴈のもの  
月のある夜を唐めきて鴈の行  
手習に越しはむかしはるの山  
ふる事をおもひ出て  
えほし着て白川越す日春の山

常盤崎鬼子公別荘

はるの山に取まかれてぞ住れける

鶴などはとしよるものをはるの山

いかのほりまだつめたいか山の空

家に七ツになる三郎もちぬ

夜は夜とてわすれね紙鳶の置所

東風吹やまがきが嶋の注連はりに

目黒みち

水と山はるにして置ところ哉  
春もまだ子の淋しがる月夜哉  
うぐひすを吹や小城のあまり風  
萱のうね藪の徑なりにけり  
雨に鳴尾長もこれやはるの鳥  
野の空をうけてありくや春の鹿  
雀子や家のうしろはあさぢ原  
子をよぶかすよめの聲のふとくなる  
はる艸によきゆめ見るかはなれ家  
春草にそつと置たし我いほり  
きさらぎや起はぐれしも朝ほらけ  
霞戸や死んだふりしてけふは寐ん  
かすむ日やあまき物くふ布留の里  
雪どけや近おとりする妹が家  
ちる梅の片空かけてなくひばり  
小田に降雨見ても引小鴨哉  
雛追てすぐにこがるゝ男猫哉



木がくるゝ人うぐひすよく  
はるの夜のねぶたき眼にも峰の松  
春の夜の爪上り也瑞巖寺  
鶯の日はくれにけりきじの聲  
花さくや朝めし遅き小商人  
ちる花や脚布ハヤキしてゆく道のほど  
花の雪ふすまかぶりし夜に似たり  
はなの香や夜のこゝろのほそ長き  
木の股の哀なりけり夜のはな

途中

莽に見ゆる花の山風ふきにけり  
墨繩にうつくしうちるさくら哉  
花守の不沙汰か小田の片あらし  
上野にて 二句

ふるさとにくらふればちる櫻哉  
佐保姫のたぶさの風か少しづゝ

佐藤庄司が丸山の館の跡へ、入〜とともに  
のぼりて

酒こほせすみれの外は山のもの  
腰の法螺莖つむにはむつかしき  
羅漢寺のものとなりけり春の暮  
花に乞食増賀のころも着てありく  
さきの世は朱雀の鬼かつゝじ賣  
なまなかにつゝじ植てぞ山ごゝろ

露なしの早 鬼子公の別荘

まてば来るきゞすの外は松の風  
小鳥らが餌もありけ也つばな原  
芹提て出たりな鶯のすみかより  
行かたにゆけば鴈にぞ逢れける  
七くさの七朝過し柳かな  
はる雨や木の間に見ゆる海の道  
晝の月春は減るとも思はずや  
ころもがえ根つかぬ松ぞものたらね  
何となう子の日嬉しき袷哉  
降雨にくらるつけたりほとゝぎす

梁川竹隱居が許

子規鳴やこゝにも山のつゆ  
麥ふみし人のうの花咲にけり  
しきみつむそこらあたりの若葉哉  
若葉吹風やさけゆく馬の脊  
山のはの空もほたるも夜明かな  
螢火や雀が家の竹の影

乙二とは、をうなめきたる名なりといふ人に  
戯て答ふ。

鉄漿捨に出れば艸の螢かな  
鬼灯の花は暮たに飛ほたる  
蚊一ツに青空ちかき夕哉  
蚊に起て御兒淋しやみろく佛

こぞより江戸にありて、花にきさらぎの十五  
日も、つゝじに彌生の晦日も暮て

御ほとけのうまれし今朝や不盡の山  
かたばみの花雨ふると鳴すどめ  
かたばみの花の宿にもなりにけり  
さみだれのすゝきむらく夜（響）の明る  
五月雨の水鶏鶯尾長鳥

みじか夜を寐たや牡丹の花の上

酒田高野の濱にて

よる波の砂に濁りて夜みじかし  
ものゝ露落るも嬉し牡丹越  
笠嶋の人が笠着て眞菰艸

書窓

かぐや姫紙魚の行衛ぞおほつか  
哀けもなくて夜に入藜かな  
古妻やあやめの冠着たりけり  
酒田にて  
ふるさとを思はぬふりぞ粽とく

仙府にありて

粽とかで雄鷲の僧はいなれける  
投込で見たき家也さゝちまき  
戸あくればけさの影さすあやめ哉  
押水によごれぬけしのつほみ哉  
あやめふけ目白の不二の暮ぬうち  
常盤木（響）の大こゝろなる落葉哉



松島の方へ行葉兆法師を、わすれず山の下流  
まで送る。

松葉ちる竹筒は酒の盡やすき  
朝の間に見てゆく野路の清水哉  
妻と子が大事のしみづ濁しけり

これはむすめが縁ならずして家に歸り、家刀自は病にあ  
やうき時の句なり。

水かけてあかるくしたり苔の花

出羽行脚の頃

はし姫のひとりはあるよ最上川  
かたびらや風のそばへる舟のうへ  
嘉右衛門は帷子時の繪書かな  
帷子にはなれ切たり朝の空  
鶉匠らがひたと濡たり小夜嵐  
ゆふけしき鶉のあし水にはじまりぬ  
粟まくやわすれずの山西にして  
旅ごろも奈須野のいちごほれけり  
久保田旅窓あした  
蚤のあとときゆるまで見んつくば山

鮮なれよ松をかぞへてくよるうち  
桂女も鮎つる糸は流しけり  
たちばなのつほむとくさきむかし哉

途中急雨に逢し時

かれは塩がまの琵琶法師に踏つぶされ、これ  
は多賀城のあとの畑守にもらひぬ。

青桐の笠に見てゆくしづく哉  
山駕の浅香も過つ青あらし  
鳩の中はしり過たる鹿の子哉  
風かほる暮や鞠場の茶の給仕  
世わすれにはしり入り青すゝき  
落の葉を引裂て見る暑かな  
ゆふ立にすはやくころの深山あく

すみだ川即興

蘆の根に落すと見しかぬれ扇  
水鶏なけ水乞鳥は暮なり  
龍宮の圖  
八大龍王すゞしさうにて小淋しき  
山人は山草かれや夏の月

山の井にあすまで残れ夏の月  
蓮の糸はすの莖とも詠けり  
しら雲や茅の輪くどりし人の上

宇考亭

土用東風天の川より吹やどり

小松途中

暑ければ雲のいやしき山の上  
さうぶ湯や濡手に受る雨三粒  
水飯やあすは出て行くさの宿

蟹の泡、鬼のめしなどいふを

あぢさるのあらぬ名を呼山家哉

鱒路山のほとりにて

紫陽花のあすはどこまで道つくり  
あぢさるやしまひのつかぬ晝の酒

蕨林が我を見送てたてる兒も、ちいさうなり  
て双の關にいたる

松しまへ行影うつすしみづ哉  
さくら花ちりぬ早苗の風まつり  
鶯のうしろ見らるゝあつさかな

ばらの花ちりぬるをわが岡の家

朴の木のみくらは、つぶりのいたきものなれ

南天の花こほるゝよ腹のうへ  
みじか夜の満月かゝる端山哉

成美が幼きむすめの一めぐりに申遣す

其親に其子とゝきし合歡や咲

出羽のゆきゝ、蘭丈が家にやどりて

松の葉の歸れば來れば軒にちる  
螢火や屋根よりこける苔の音  
花けしや空もかざりになればなる  
ほとゝぎすまたあけほのゝまみれ哉

母の身まかり給ひし時

とり付てだゞ子ごゝろや夏の關

なきがらを棺におさめまいらすとて

煙さへとゞまるものを蚊屋の内  
星となりて夜は見へたまへ母の影  
高き木に花もあれかし星の戀  
すゞしさや願の糸の吹たまる  
星待やさもなき門の糸芒